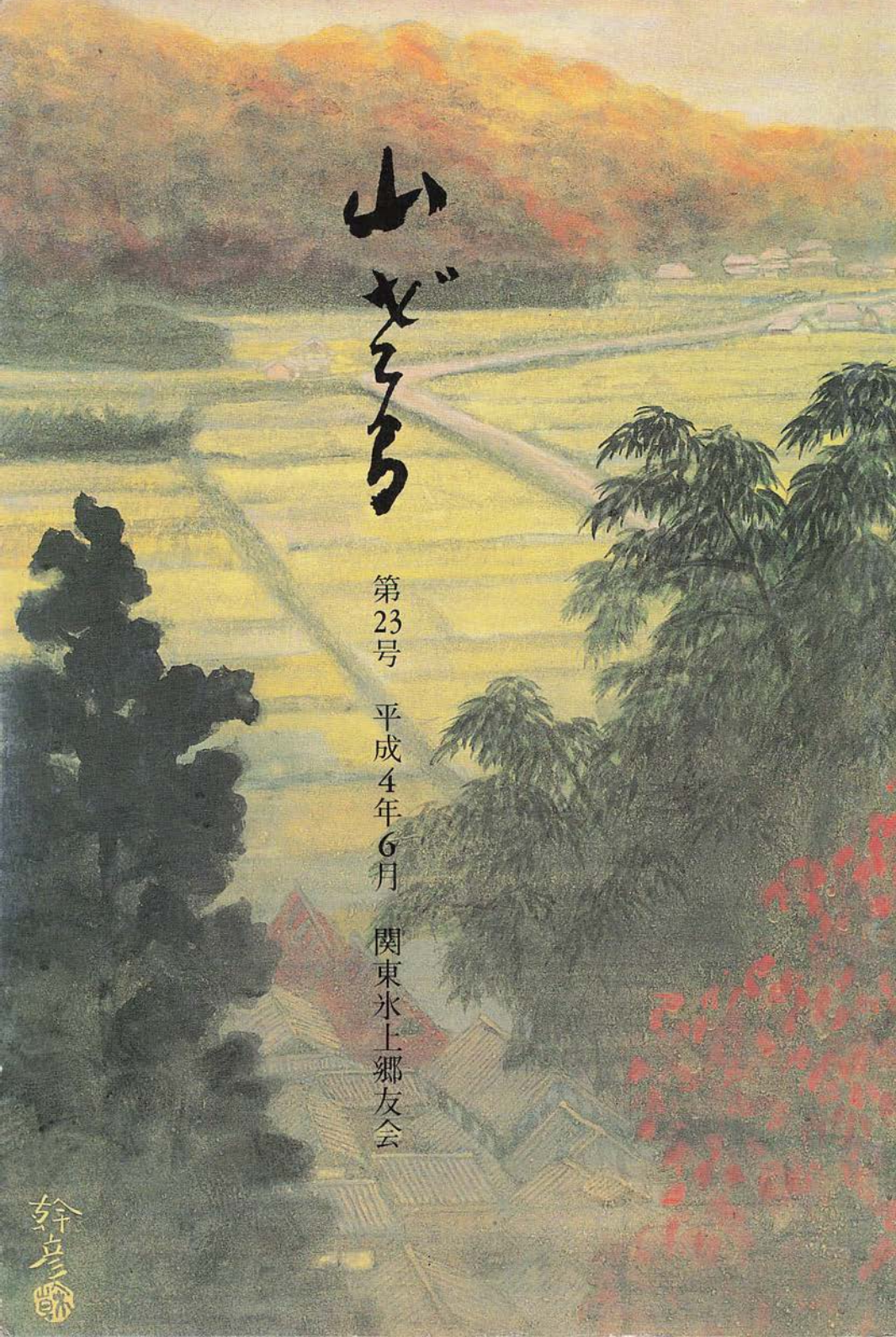




山ざくら

第23号

平成4年6月

関東氷上郷友会

おもわず新しい



“包装文化を創造するネクスタグループ”

ネクスタ株式会社

本 社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京支店	111	東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F	Tel 03-3861-2331
大阪支店	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
名古屋営業所	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
九州営業所	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ ラッパイ株式会社

本 社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京工場	121	東京都足立区中央本町5-22-12	Tel 03-3849-6611
千葉工場	270-02	千葉県東葛飾郡関宿町台町2192	Tel 0471-96-1721
名古屋工場	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
大阪工場	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
福井工場	919-04	福井県坂井郡春江町江留下相田63-66	Tel 0776-51-5886
福岡工場	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ パッケージ株式会社

本 社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
栃木工場	349-13	栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938	Tel 0282-62-3321
兵庫工場	675-11	兵庫県加古郡稲美町蛸草1438-1	Tel 0794-95-0257

山
ざ
ら

第
23
号



山ざる 第23号 目次

表紙……………常岡幹彦画・丹波の秋……………平成三年作	
口絵写真……………水上町朝阪……………1・佐治川……………2・3・4・霜の朝……………渡邊隆男	
草刈歌・米搗歌・石場搗歌……………青垣町史より……………4	
生きる楽しさ美しさ……………村上末吉……………5	
平成三年度総会、祝寿会、懇親会報告……………6	
ふるさとだより……………藤原三郎……………10	
福知山線複線化と丹波と私……………梶原清……………12	
父祖の地の歴史民俗資料館……………織田信孝……………15	
柏原藩と篠山藩の江戸屋敷……………志村勝郎……………16	
山南町の「青田神楽」……………小谷敏雄……………17	
二十一世紀は文化の花咲くまち・青垣……………平岩慎悟……………21	
城崎温泉・西村屋印象記……………荘正衛……………23	
柏原と私……………田健一……………25	
ふるさと……………田敏夫……………27	
郷愁……………波多洋三……………28	
郷里に思う……………谷垣富子……………30	
幼少の記……………足立順治……………32	
柏原をたずねて……………国村きぬゑ……………39	
柏原讃歌……………谷達雄……………42	
今様浦島……………大野すゞ子……………44	
故郷探訪「水分かれ」周辺……………池上亘泰……………45	



私の故郷……………	足立美都子……………	47
帰郷難感……………	木内実喜夫……………	49
丹波柏原へのこだわり……………	加賀山次郎……………	51
父の三回忌を前に……………	岡本庄太郎……………	53
我が家より眺めた鎌倉の空……………	足立誠一……………	55
大自然に溶け込んだ三陸の日々……………	野村節三……………	57
ジャワの日々から……………	上野重喜……………	60
故郷の恩師と友達……………	村上善英……………	65
嗚呼、青垣の山に向かい……………	足立正美……………	68
牛の喉……………	村上久夫……………	71
青春虚実——遊蕩事始め……………	田中篤郎……………	72
焼きものの雑感……………	生田清弘……………	76
スメタナ先生との出会い……………	池畑豪四郎……………	82
祝賀会……………	小川晴通氏・梶原清氏・上山顕氏……………	85
足立源治さん逝く……………	足立源治さんの逝去を悲しむ……………	田中篤郎……………
出版……………	90	92
氷上同好会報告……………	文化・ゴルフ・囲碁会……………	94
三つの同期会……………	95	かんれき・えんゆう会……………
お便り・短信……………	102	98
寄付者芳名録・訃報……………	109	
91丹波の動き……………	110	
会計報告・共賛広告・関東氷上郷友会会員名簿……………		巻末



草刈歌

——青垣町史より——

- 主が山行きや 牛まで可愛い 牛よ はよもどれ
- 花よ咲くなよ 蕾でおれよ 咲いて 小枝を折られなよ
- うちのほんちは あたかの山で 歌うて草刈る 声がする
- 歌い出したは 朝草刈りが 朝のね言で ほそぼそと

米搗歌

- 相手仕事に 相手がよけりや 面白うてする 楽でする
- 相手仕事に ねぶりやる人は 相手だましか 情けなや
- どんど どんどと 踏む唐臼は とり木枕に ねてござる

石場搗歌

- めでた めでたの 若松様よ 枝も栄える 葉も繁る 面白の瓢箪や
- めでためでたが 三つ重なりて 鶴が ご門に巢をかける

生きる楽しさ美しさ

会長 村上末吉



皆様お元気でお過しのことお慶び申しあげます。今回「山ざる」23号が出版頒布されたことに、衷心より感謝し、共に喜びをわかち合いたいと思います。

さてバブル崩壊後不景氣風が吹き、この波はしばらく続くだろうといわれております。優秀な企業と思われていた会社でも過去にない赤字を出すなど、激しい変化をみせています。

最近、企業は誰のためにあるのかとの問い掛けが叫ばれ、フィランソロピーという言葉が浮上してまいりました。企業に勤務する従業員は、給料を支給する企業に対し、利益増進に励み、利潤の追求に走るのは理解できますが、その手段や方法が適正を欠き、露骨になったり、自己中心になりすぎると、今回のような不祥事が生じ、罪悪を犯す結果となることは衆目の一致する処です。

日本人にはもともとお金より技を、利よりも名誉を重んじ

る風習があつて、テレビ等で時代劇に感激させられるのは、どんなに貧乏であつても、それを意に介せず、自分の存在と誇りを大切にして「やり通す」という心意気があつたからではないでしょうか。

戦後の壊滅状態から今日の経済大国にまで築きあげ得た基には、日本人の美点が発揮され、全国民が力を合わせて苦難に耐え、金銭を度外視して頑張ってきた魂のなせる業であつて、今日のような「何でも利が先」といった風潮は、日本人らしくないと思つてゐるのですが、いかがでしょうか。

バブルの不祥事は殆んどが自己の利益のためには手段を選ばない「金のあるやつが勝ち」式の結果ではないでしょうか。日本にはまだ自己の利よりも、名誉と誇りを大切に生きておられる方が沢山居られますが、日本人全体がもう一度社会を見直す必要があると思つております。

特に企業（会社）はどんなに小さくても、社会があればこそ生きられるのであつて、人様、社会のために働くといった原点をもう一度よく考えてほしいと思います。フィランソロピーともつたいぶつていうよりも、率直に人の役にたち、心の豊かな社会に生きることこそが人生だと思ふ次第です。

郷友会は東京の人口からすれば僅かですが、この集まりは人に感動を与え、生きる楽しさや美しさを持つてゐる人びとの集団であると思つております。

平成三年度総会、祝寿会、懇親会報告

平成三年度総会、祝寿会、懇親会は十一月二日、九段会館真珠の間で行われた。出席者は七十二名といささか低調ではあったが、会の雰囲気はいつもながらに熱い丹波弁の交歓で盛りあがった。

総会では村上会長のあいさつに続き、鶴田理事から会計報告、藤田、荻野監事の会計監査報告（両監事欠席につき文書での報告）、坂上理事の会務報告が行われ、滞りなく議事を終えた。

会務報告のなかで、創立二十周年を迎える「氷上青年会議所」記念事業への協賛についての結果報告が行われた。

氷上青年会議所は日本青年会議所の下部組織で、昭和四十七年十月、全国で五百十二番目に誕生したものである。青年会議所は文字どおり、次代を担う青年経済人の集まりで、奉仕・修練・友愛を活動三原則とし、地域社会に資するさまざまな事業を展開している団体である。

本郷友会では平成三年七月三日の定例役員会において、当

青年会議所からの創立二十周年事業協賛依頼について検討したが、現在、本郷友会として特定の団体または個人に対する寄附、募金応募等の行為を行っていないため、有志による協賛を募ることとし、とりあえず理事五十名へ会長名にて協賛依頼書を送付した。

主旨賛同者から寄せられた浄財は事務局で取りまとめ、関東氷上郷友会有志一同として、氷上青年会議所二十周年実行委員会宛に振り込んだ。

この二十周年事業の内容は、当青年会議所からの趣意書によると、氷上に住む者達が心から氷上を愛し、将来に向かって夢を語れるようにという願いを込めて「二〇一〇年、夢ひかみ計画」（夢ひかみの立体模型）と「歴史アニメ計画」（ビデオ制作）からなる予算総額千七百万円余のものであった。

なお本年二月、当青年会議所より、協賛への謝辞、事業完成の報告をかねた書状とともに、アニメVTR「氷上刀売」一巻が、事務局に送られてきた。希望の向きには貸し出しを行うのでお申し出願いたい。

祝寿では左記六名の方々に会長より祝詞を述べ、記念品を贈った。（五十音順）

大岡弘殿、清水正男殿、谷達雄殿、常岡昌子殿、畑秀夫殿、渡辺ひろ子殿。

席上では代表の谷達雄氏から謝辞が述べられた。御身專一にますますご健康で過ごされんことを祈念する次第である。

懇親会では恒例の「お楽しみ抽選会」「ザ・トップクラブ・ミュージック・サルーン」のお嬢さんがたのコーラス、一年ぶりの会話などを楽しみ、午後四時解散となった。

当日の出席者と、景品寄贈者は次の通り

出席者（敬称略）

〔来賓〕 1名

船原晃一郎（兵庫県東京事務所森本浩三代理）

〔祝寿〕 2名

谷 達雄 渡辺ひろ子

〔一般会員〕

青垣町 2名

足立静雄 安原三智子

市島町 13名

芦田重秋 足立敬子 伊藤まち子 井田悦子 荻野一雄

木村つた江 近藤 勇 渋谷英子 田中篤郎 鶴田ゆき子

早瀬徳郎 森下千寿子 余田士郎

春日町 12名

大江康嗣 木呂子恵美子 近藤勇夫 佐々木盛雄 高橋博子

波多洋三 船越祥郎 水船隆昌 村上末吉 村上久夫

吉住重造

柏原町 15名

足立美都子 生田清弘 上村愛子 上山 顕 小田富士夫

岡 吉明 澤田みさを 志村勝郎 常岡幹彦 出町京子

新田造迪 能勢 徹 久安敏夫 宮野 近 村上善英

山南町 9名

小川晴通 小田明子 梶原やす子 久保春雄 田中 寛

中居篤子 東田 實 増井 攻 渡辺貴美子

水上町 15名

安達健一郎 足立謙悟 足立 正 足立美也子 大地富美子

岸本昌子 坂上五朗 坂上勝朗 清水展代 田辺龍平

谷垣宏造 十倉博子 樋口ふみ子 三又康子 渡辺隆男

西脇市 2名

大石佐代子 笹倉郁子

黒田庄町 1名

神井あつみ

2、お楽しみ抽選会景品及び寄附者（順不同）

10度数テレフォンカード 10本 足立誠一殿

織田煮（佃煮） 3本 岡 吉明殿

野沢菜漬（二袋セット） 20本 常岡幹彦殿

洗剤（無公害台所用） 10本 足立和巳殿





七宝焼ネックレス

フジカラー「写るんです」

遠赤外線ワタとバイオテープ

楼蘭（黒大豆の酒）

紳士セーター

電気スタンド

CD・Wラジオカセット

昭和メモリー

五〇年ノート

高級和染ミニ缶（日本茶）

中国名画複製

書籍「痔のはなし」

書籍「小説・青竹のように」

コンサート入場券（2枚組）

山芋（2 kg）

参加賞（黒豆一袋）

特別提供「ザ・トップクラブ・ミュージックサルーン」コーラス四名出演

3本 宮野 近殿

5本 堀井隆川殿

10本 足立かをる殿

12本 安原三智子殿

ほか有志

5本 吉住重造殿

1本 足立謙悟殿

1本 村上末吉殿

2本 池田 忍殿

3本 同 右

50本 明日香園殿

5本 渡辺隆男殿

5本 渡辺和代殿

72本 木村つたえ殿

2本 笹倉郁子殿

5本 郷 友 会

全員 郷 友 会

岡田一男殿

ふるさとだより

兵庫県議会副議長 藤原三郎



デカンショ節の歌詞に出てくる丹波は全国的に有名です。現にわが兵庫県の人でも「あなたの出身地は」と聞かれたとき、「兵庫県は丹波です」と答えると「あゝ、篠山ですね」とおそらく百人中九十人以上の人がいうでしょう。「いや、篠山は多紀郡で、篠山より少し上の京都府福知山に近い氷上郡というところです」正確にはこう答えるを得ません。

みなさんのふるさとがこんなことではいけませんね。そこで、最近の全国ドライブマップを見てください。北近畿自動車道舞鶴線に春日インターチェンジがあります。さらに春日インターより北近畿自動車道豊岡線が、春日、氷上、青垣の各町を通ることになり、すでに用地買収も始まっています。

みなさんがふるさとにお帰りになっても便利なように、また丹波に住む人々が快適な生活ができるように、道路網の整

備拡充、水洗便所など下排水も始まりかけています。

福知山線は篠山口までの複線化が決定し、あと福知山までいかにして延伸させるかが課題です。緑を残しつつ便利な水上郡にしていくのも課題のひとつです。

二十一世紀まで八年、みなさんのふるさとの各町がかかえている問題は。

〈柏原町〉桜の名所鐘ヶ坂、土砂崩れが起きるのでルート変更も含めた見直し。山南町―柏原町間の奥野々峠のトンネル化予算計上済み。丹波文化会館の大改築、駅前及び駅周辺の並木道の整備等いずれも予算化。

〈山南町〉川代の公園化。篠山―山南線の大改修、前川橋、和田橋の架け替え。五ヶ野、梶にゴルフ場の建設。西脇からの国道一七五号線の至山のトンネル化。役場庁舎の移設、井原バイパスなど。

〈氷上町〉三原にゴルフ場開設、幸世松ヶ鼻から天王坂に至る一三〇万ヘクタールを兵庫県が県有地として買収。京橋、犬岡橋、本郷橋の架け替え。北近畿自動車道が本郷にインター設置等々。

〈青垣町〉北近畿自動車道が西芦田にインター設置。国道四二七号線の播州トンネル化（現在工事中）。福知山市に通じる穴浦峠の改修。西芦田の乱開発を防止するため、県が広範な用地買収。

〈市島町〉市島町市島地区の水防のための竹田川改修、八代学園跡地にダンロップ工場進出（現在工事中）市島沿線の改修。美和に神戸灘生協の保養所設置。塩津峠へのバイパス。戸平トンネル拡幅等。

〈春日町〉船城地区の湿田改良のための黒井川改修。遊農園の設置。多紀郡下板井―東中線の新設。下三井庄に三宝ダム of 建設（工事中）。栢野バイパスと栗柄峠を含めた改修など。これらはいずれも、県・国が直接、間接に関与しているものですが、その他小さいものを挙げればきりがありません。私の考えでは、高齢者社会を迎えるに当たって、地域格差、所得格差を無くすことが、この丹波にとつて今、最も重要なことと思っています。京阪神より一〇〇キロの範囲にあるのに交通の便が悪い、だから年間一人当たりの所得は京阪神二三二万円に比べて一八三万円と低い。またあらゆる面での不便さがあります。

税にしても丹波では国税が一〇億円、県税六〇億円、町民税九〇億円、計二六〇億円を納めています、私をはじめみなさん懸命の努力で国や県より交付金、補助金など合わせて三六〇億円を持って帰ってきています。この入り超をもっと伸ばすことが丹波の発展につながるものと思います。

お蔭様で私もみなさんの絶大なご支援で、兵庫県議会副議長にならせていただきました。みなさんがこよなく愛し、想

いを馳せておられるこの丹波、わけても氷上郡のため、住民のみなさんと一緒になって熱い心でがんばります。そして、明るい二十一世紀を迎えたいと思っております。いつそうのご教導とご鞭撻をお願い申し上げます。

福知山線複線化と丹波と私と

参議院議員 梶原 清
(参議院内閣委員長)



タタとおおママ

昭和二十一年一月のことであった。川代溪谷に沿った細くて起伏の激しい道を、私はゲートル姿で篠山に向かって自転車ペダルをこいだ。溪谷が終わるころ、後ろの父が、

「清、どうやった？」

「どうやったというてやけど、全然見なんださかいわからへん」

「何や。見合いに行つといて、相手をよう見なかったんか」

「そないいうてやけど、後ろの襖があいて、お茶が出たと思うたら、それきり姿が見えんようになった。見たのは手だけや」

「何しとつたんや。そやけど、大人しそうな、ええ子やったやないか。どうやると、一週間のうちに返事せえよ。よいな」
「もうお母さんに任せろわ」

母は旧上久下村青田の出身、先方と近い縁続きであった。

話はすぐにまとまって、その年の節句の日に十人足らずでさやかな仮祝言をあげ、氷上と多紀の若い男女が結ばれた。

二人のあいだに男子一人と女子三人が生まれた。不幸なことに次女が夭折したが、長女と長男に女の子ばかりの三人の孫を授かった。そして妻の知慧で、この孫たちが私はタタ、妻をおおママと呼ぶことになった。英語で祖母をグランド・マザーというから、おおママというのは納得できるが、なぜ私がタタなのかわからない。かといって、タタは嫌だとダダをこねるわけにも行かず、今では「タタだよ」と一日に一回は孫に電話をかける仕儀となっている。おじいちゃん、おばあちゃんと呼ばれると老けてしまうが、タタ、おおママのおかげで、古稀を迎えながら、やつと還暦を迎えたばかりのよいうな気持ちの毎日を送っている。

半農・半鉄・汽車勉

私は、父の言い付けで、旧制の鳳鳴中学校を第三学年で中退して国鉄に就職した。中山寺駅の駅員を振り出しに、十三年間大阪駅改札掛、大阪車掌区車掌などを勤め、家では農業を手伝った。

このような「半農・半鉄」の毎日を送りながら、旧制中学の卒業資格が与えられる専門学校入学者検定試験（専検）に合格し、関西学院大学予科を経て京都大学法学部に学んだ。

そのころの私にとって篠山口―大阪間片道二時間余りの通勤列車のなかが一番貴重な勉強場所であった。書物のうえに飛び込んでくる蒸気機関車のすすをフーフー吹きながら勉強したものである。

「半農・半鉄」に駅弁ならぬ「汽車勉」を加えた「半農・半鉄・汽車勉」が私の青年時代であったが、昭和二十五年に京都大学を卒業して運輸省に入省した。

篠山線の廃止と覚書

終戦直前の昭和十九年三月に国鉄篠山線（篠山口―福住）が開通した。もともと軍事目的のために建設されたもので、全国でも一、二位の赤字地方交通線であった。当時の福知山鉄道管理局は、国鉄財政再建方策の一環として篠山線の廃止を打ち出すとともに、丹波の発展のためには福知山線を複線電化して阪神地域との「時間距離」を短縮すべきであることを強く訴えた。

篠山線は昭和四十七年三月一日に廃止されたが、それに先立ち、四十六年六月二十七日に兵庫県知事と福知山鉄道管理局との間で、①五十五年度完成を目途に福知山線三田地区―篠山口間の複線電化工事を進める。②兵庫県は沿線の開発を

促進するため側面的に協力する、との覚書を締結した。そして、福知山鉄道管理局は、翌四十七年十一月から用地買収を開始し、約七十五パーセントの面積の用地買収をすませた。国鉄財政が悪化の一途をたどり、かつ複線化工事について運輸大臣への認可申請もしていない段階での約九億円の用地取得は、会計検査院から「不要不急の支出」と非難されても仕方のないものであったが、これが後々好結果をもたらしたことを看過してはならないと思っている。

新三田までの複線化

私の運輸省の大先輩であった故・有田喜一先生が福知山線の複線電化実現のために大変尽力され、幸い第一期工事の塚口―宝塚間の複線電化工事が昭和四十八年二月に運輸大臣の認可になった。用地買収が難航したために完成は五十六年四月であった。

続く第二期工事でどこまで複線にするかで、当時の坂井時忠兵庫県知事と住田正二運輸省鉄道監督局長が激しく対立した。有田先生が五十一年十二月の総選挙で落選された直後のことである。坂井知事は、福知山鉄道管理局長の覚書どおり篠山口まで認可せよ。さもなくば訴訟を提起すると強く迫られたが、住田局長は、国鉄財政は破産寸前の状態にあり、新規工事抑制の方針を堅持している。国鉄の地方機関の覚書があっても、運輸省としては、収益性が非常に悪い三田―篠山

口間の複線化は絶対に認められないとの態度であつた。当時自動車局業務部長であつた私は「お家の大事」と何度も鉄道監督局長室を訪ねた。剛の者として名高い住田局長の部屋に入るには、入口で何度も深呼吸してから入らなければならなかつたが、「私の郷里ですの……」と必死に頼み込み、五十二年九月二十六日に新三田―篠山口間の複線工事の認可をいただくことができた。

国鉄財政が破産寸前の状態であつたにもかかわらず、福知山線を最優先で取り組んでもらい、おかげで宝塚―新三田間の複線工事、宝塚―城崎間の電化が六十一年十一月一日に完成した。

新三田―篠山口間複線工事着工と篠山口以北の問題

昨年十月一日に特殊法人・鉄道整備基金が発足し、同基金の無利子貸付金制度によつて、新三田―篠山口間二・五キロの複線工事に着手されることになった。輸送密度がずっと高い線区が多くあるなかで、福知山線をまっ先にとりあげてもらつたことは、丹波の発展のためにご同慶にたえない。

去る二月二十八日付で運輸大臣の無利子貸付対象事業認定ほかの手続も終え、これから調査測量、実施設計にとりかかる。新駅設置費を除く線路増設工事費は約百五十億円の見込み。鉄道整備基金、地元（県および関係市町）がそれぞれの四十パーセントを鉄道建設公団に無利子貸付（五年据え置き、

十年償還）、あとの二十パーセントを財政投融资で調達する。工事主体は日本鉄道公団であるが、ＪＲ西日本に工事を委託する予定。工期は平成三年度から約五年となっているが、地元の協力次第で早めることは可能。

問題は篠山口以北。地域社会の総力を結集し、引き続き福知山線全線複線化早期実現のために懸命の努力をしていかなければならないことはいうまでもない。複線化するかどうかは当該線区の採算性、投資効率がポイントで、現状の乗車密度からすると、ＪＲ西日本としては調査をすることにも消極的であろうと想像されるが、何といつてもＪＲと地域社会はいわゆる「唇齒輔車」の関係。ぜひ一步でも前進することを検討していただきたい。その意味で、さしむき加古川線との結接点である谷川駅折り返しの列車を増発してもらうことはどうだろうか。

私は参議院大蔵委員長当時、勤務先から支給される通勤手当が、従前は月額二万六千円まで非課税であつたものを、五万円まで非課税にするよう大蔵省主税局へと足を運び、平成元年度税制改正を審議する自民党税制調査会で懸命に主張し、おかげで実現を見ることができた。これによつて丹波から阪神間への通勤者の負担が軽減され、通勤者の増加に役立つのではないかと思う。

丹波は欧州の一国にも匹敵する人口と企業を有する阪神地

域に近い。『丹波』の名は多くの人に知られ、特産物、文化的遺産にも恵まれている。山並みも非常に美しい。阪神地域の多くの人々がぜひ丹波を訪れようと普通乗車券でどんどんきてもらえるような、美しくて活気のある田園文化都市につくりあげていこうではないか。私は決してパチンコ店を否定するものではないが、あの丹波に煌々としたネオンサインはいかなものか。広告の必要性は否定しないが、『丹波の森街道』に広告宣伝用の幟が林立するのはいかがなものか。丹波の山並みは美しいが、道路から見ても、ほんとうに美しいと思ってもらうためには、家なり工場などどのように立地するのがよいか、これらの点についてはヨーロッパ諸国に学びたいものである。乱開発の危険性が迫っているが、乱開発は丹波の発展を阻害することを訴えておきたい。

父祖の地の歴史民俗資料館

織田 信孝（柏原町）

織田家の遺品を歴史民俗資料館に寄贈してから、既に二年が経ちました。遺品は我家の所有ではありませんが、長らく柏原で無印会（織田家の家臣筋で組織しています）の方々に保管していただいていたもので、書画や藩政日記、安土城の

図、甲冑、火縄銃など、その数は二百七十点を越えます。

織田信長の次男、信雄の子孫である信休が大和宇陀（奈良県）から元禄八年に移って以来、織田家は十代にわたって、柏原の藩主でした。私の曾祖父の代で、官軍側として明治維新に参加し、東京に移りましたが、そんなわけで、柏原には二十七基の墓のある織田家の廟所があります（町の文化財に指定されています）。

歴史民俗資料館のことは、建設計画のときから知らされ、その後、安井町長、小松助役（文化財審議委員長）、神崎中央公民館長などから正式にご依頼がありました。私にとつて柏原は父祖の地、そこで多少なりともお役に立てばと思い、その大部分を寄付することにしたのです。だからその際、寄付した遺品が柏原町から散逸しないようにすることだけはお願いしました。無印会の藤本正也さん（現歴史民俗資料館運営委員長）に、遺品のリストを作成していただくなど多大なご協力を得て整理をし、一方、町長さんたちとは書簡をやりとりするなどして具体的に話を詰めていきました。

開館したのは平成二年の五月です。開館式には町からお招きいただき、私は久しぶりに柏原の地を踏みしました。歴史民俗資料館は規模こそ小さいけれども、丁寧に作られた立派なもので、寄贈した甲斐があったと思ったものです。安土や大宇陀の町長さんも招待されており、開館式の後、会食をしな

がからお話をうかがうことができたのもよい思い出です。

柏原を訪れる度に思うのは、その静謐さです。東京というおそらく世界的に見ても最も目まぐるしく動いている都市に住んでいるせいもあるでしょうが、柏原の落ち着いた雰囲気は何か上品な人柄のようなものさえ感じさせ、快いものです。ともすれば街はにぎわってはいくけないような思い込みが世間にはあるようですが、私はそうは思いません。地方都市を歩くとき、東京のコピーのような街作りをしたために妙に薄っぺらな外観になってしまった街がいかにも多いかに気づきます。私のルーツのある街がそうならず、ある種の威厳をたたえて居続けることを、とてもうれしく感じるので。

加えて、お会いする人々の優しさはいつも私の心をなごませます。今、二年に一度訪れるかどうかですが、どなたも変わらず暖かくもてなしてくださるのには感謝しています。

遺品を寄贈した人間として、いささか勝手な願いをいえば、歴史民俗資料館は成長する施設であってほしい、ということです。現在のものが完成品と考えてほしくないのです。博物館や図書館の目的は、資料を「死蔵」することではありません。そこをいろいろな人が訪れて、何らかの感銘を受けたり新しい研究の手助けになってこそ意味がある、ただ観光のスポットとして存在しているだけの施設にはならないようにしてほしいものです。もちろん当初は管理をするだけで精いつ

ぱいかもしれません。けれども他の研究機関と交流したり、歴史研究の拠点として利用できるような「生きている施設」となってくれるよう心から願っています。

柏原藩（織田藩）と篠山藩（青山藩）の江戸屋敷

志 村 勝 郎（柏原町）

柏原藩史によると織田長頼公（大和宇陀・松山三代藩主）の寛文二年夏、江戸下邸として浅草田町に四、八五〇歩を江戸幕府より賜わった（藩史二八頁）とあり、寛文十一年に下谷新寺坊邸六、一六〇歩を賜わった（藩史三二頁）との記録があり、さらに信守公（柏原八代藩主）の文政十一年一月、下谷上邸に出家があり、信守公は父の信憑公と次代の信古君とともに浅草下邸に避難（藩史九一頁）、つぎに信古公（柏原九代藩主）の天保十一年一月、下谷上邸六千余歩を返し、改めて芝三田小山に三千歩を賜わる。しかし芝三田小山邸が狭いため、浅草下邸の千余歩と引きかえに隣地の千余歩を併せて四千余歩を賜わる（藩史一〇三頁）との記録がある。

このことを柏原町の実家に帰郷した際、藩史をひもといて確認したので、この史実を確かめるため、私は平成二年十月、港区港郷土資料館および台東図書館郷土資料室などに

赴いて調べてみた。

芝三田小山邸の方は港郷土資料館で即座に確認できたが、浅草下邸と下谷上邸の方は両資料館とも把握できておらず、古い地図を何枚か、あれこれと私も加わって調べあげた結果ようやく確認にこぎつけた。これはとくに港資料館の協力によるところが大きかった。以下にその状況を紹介する。

(イ) 浅草下邸は現在、台東区浅草五丁目六六、六七、六八、六九、七一、七二の地域で東浅草一丁目との境の土手通りに面し、浅草寺の北約六百×七百メートルぐらいの所。

(ロ) 下谷上邸は現在、台東区元浅草一丁目一、二、三、七、八、九、十、十一、十二、十三の地域で春日通りに面し、J R御徒町駅の南約八百×九百メートルぐらいの所。

(ハ) 芝三田小山邸は現在、港区三田二丁目一番地の地域で、この地には明治年代になってから明治の実業家、渋沢栄一の邸宅が存在し、最近は大蔵省三田共用会議所として最近まで使用されていた（この元渋沢邸は平成三年、青森県三沢市古牧温泉に移築復元された）。なお、この地の南側には慶応義塾グラウンドが、東南には慶応義塾大学がある。

(ニ) お隣り、篠山の青山藩邸は現在、港区赤坂七丁目三、四の地域（現在、高橋是清記念公園およびカナダ大使館があり、東隣に草月会館がある）ならびに元赤坂二丁目的一部（現在の赤坂御所の用地内の一部）の地域である。

山南町の「青田神楽」

山南町上久下地区公民館

小谷 敏 雄

草深い丹波の里も、柏原の厄除さんが終りますと、そこはかとなく春の息吹きを感じられ、落のとうが芽をふくらませていきます。このたび「山ざる」誌に郷土芸能を紹介するようにとの依頼を受けましたので、山南町・青田の神楽をご紹介します。

当、青田神楽の起源は定かではございませんが、享保年間（二八〇年前）には既に行われていた記録があり、大歳神社の氏子の安全と五穀豊穡を祈って、毎年秋祭（十月十日）に奉納しています。

昔は「若連中」「青年団員」の独身男性主体で継承されていましたが、日本経済の高度成長期から過疎化現象と相まって、若者（男性）の不足が目立ってきました。その上、物資万能主義から文化的遺産等を軽視する風潮もあり、一時は中止の危機にさらされたことも再三でした。しかし、一方、「郷土芸能の文化的遺産」の歴史の重みと、地域文化の重要性を再認識した住民有志が、保存継承と郷土づくりを目指して、昭和四十四年に保存会を結成し、現在に至っています。





次に神楽の道具類、特長、舞の種類等を簡単にご説明いたします。

(道具類)

①獅子頭、天狗の面(いずれも木製のくり抜き)

②鈴、御幣、天狗用の花。

③囃子は、竹笛、太鼓のみ(楽譜等は一切なく、祖父―父子―孫へと、口と耳で伝承している)。

(特長)

①神に奉納することを目的とした素朴な神楽である。

②誰でも参加できるよう衣装は自由である(袴等不用)。

③小道具類は手作りで、経済的負担を軽くしている。

④芸のみに重点をおいて伝承、見せ物的な派手さはない。

⑤昔は農村娯楽の一つで、若者達の団結の場でもあった。

(舞の種類)

荒神払いⅡ各々の舞の最初に神前で行う清め払いの舞。

①四方舞Ⅱ獅子と天狗が一組となり、四方の神々に奉納を告げる。いわば「つゆ払い」の舞。

②剣の舞Ⅱ獅子が剣を持って悪魔退散のために行う厄払いの舞。おごそかに静かなうちにもめりはりのついた舞。

③地舞Ⅱ最も勇ましい男性的な舞。時には狩りをしたり、昼寝をしたり、蝶と戯れるさまざまな大自然の獅子の生態を表現している。静と動とを組み合わせた勇壮な舞。

④花獅子Ⅱ一番わかりやすい舞。天狗が手にする花を獅子が手に入れるまで追い求める過程を描く舞で、怒り狂う獅子と天狗の敏しょう性を表現している。

⑤鈴の舞Ⅱ唯一の女性の獅子で、優雅さを全身で表現している。男前ぶりを発揮する優美な舞である。

⑥背継Ⅱ大人に肩車された子供が獅子舞をし、あるいは肩の上で立ち上り演ずる等、曲芸的な獅子舞。重く大きな獅子頭と子供のアンバランスによって愛らしさとスリルを強調、神楽一番の見せ場を作る。

背継の芸内容は次の通りです。

①鶴の豆ひろいⅡ鶴が長い首を曲げて豆を啄む様子を表現する。

②肩に立ち上がるⅡ大人の肩に乗り立ち上がる。

③一本足Ⅱ肩の上で一本足で立ち上がる。一番危険な芸である。

④高山の大仏Ⅱ背の高い大仏の姿を表現する。

⑤おやまの道中Ⅱ祭りばやしにあわせ、女形姿の道中絵巻を表現する。背継の一番の見せ場である。

⑥松に下り藤Ⅱ谷間の松大木に藤が下がり、風に揺れる様を表現する。

⑦しゃちほこⅡ大屋根に輝くシャチホコの様を表現する。

⑧達磨大師Ⅱ達磨大師の座禅の姿を表現する。

⑦乗ったか三吉よい男Ⅱやれやれ背継の芸も終り、祭りもこれでおしまい、大団円、よかったよかった、となる。

以上のようにして古式豊かに大歳神社神殿に奉納するのですが、近年は郷土芸能の代表として県内主要イベントに卒先出演し、心ゆたかな社会づくりに貢献しています。

また一方、一番大切なことは、練習の過程です。20余名の会員の他、小学生五、六年生が練習に自主参加し、勤務の余暇や夜間利用で一ヶ月余りをついやして完成させるもので、人と人との連帯の輪・和は、欠くことのできないものであり、子供達と成年とのコミュニケーション作りにも重要な役割りを果たしています。

丹波に稲穂が重くたれ、朝霧が流れるころになりますと、神楽囃子の竹笛の音が耳から離れません。

ふるさとを出て都会で活躍する郷土出身者は、秋が深まると祭り囃子にさそわれるように青田に郷帰りして祭りに加わり、神楽を見て、一縷の安堵とやすらぎを得るといいます。

派手さはない素朴な郷土芸能ですが、大事に保存したいと思っています。また、ご縁がありましたら一度花のお江戸で目と耳と心とでご観賞いただければと、途方もない夢を見えています。終りに関東郷友会の益々の御発展と各位の御活躍をお祈り申しあげます。

二十一世紀は文化の花咲くまち・青垣

青垣町町長 平 岩 慎 悟



歴史が物語る町の年輪

文献の上で、本町の名が記されたのは奈良朝初期のころで、佐治郷と呼ばれ、平安朝時代には宿駅として佐治の名が見られる。鎌倉時代になると足立遠政が遠阪山垣に築城し、この地を統轄することとなった。そして織田信長の丹波攻めまで、足立氏の支配下にあった。その後、藩政を経て明治二十一年の町村制の実施にともない、旧佐治郷は四カ村に分けられ、地域の特性を生かしつつ独自の道をたどることになった。そして昭和二十八年施行の町村合併促進法によって、三十年四月これら四地域が合併して青垣町が誕生した。町域はほぼ森林からなり、極めて良質の杉、檜の植林地でもある。

わくわくいイベントの町・青垣

美しい自然の中で、心と体のリフレッシュ！それは今、都市や生活環境の複雑化の波が押し寄せる中で、人が本来求め

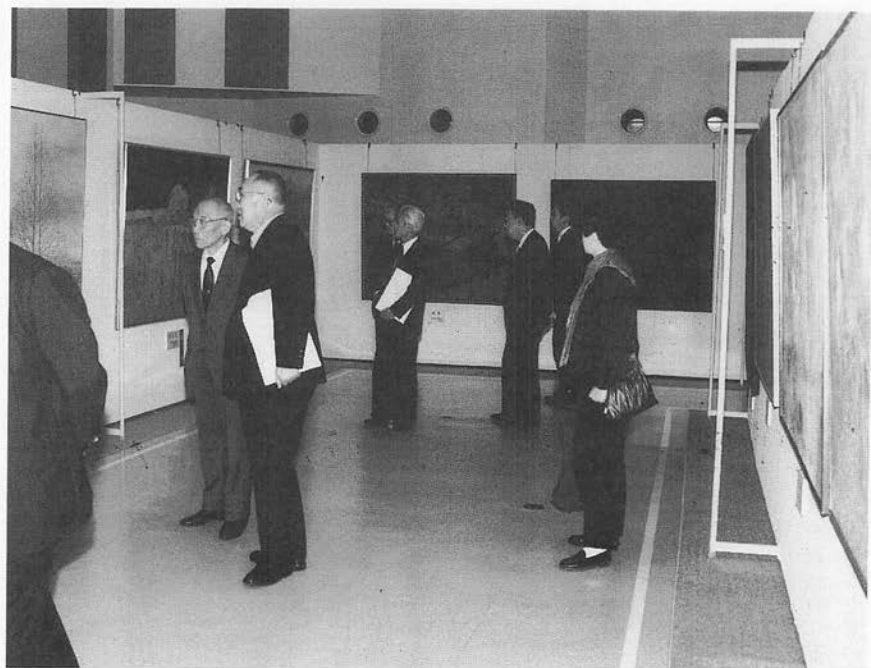
ている「やすらぎ」の姿なのである。澄んだ空気、色とりどりの野や山、耳を澄ますと聞こえてくる清らかな水の流れや小鳥のさえずりなど、人が自然とふれあうための要素がいっぱいの青垣町。そんな環境を生かしながら、町ではスポーツイベントとして「青垣もみじの里マラソン」、文化イベントとして「青垣二〇〇一年日本画展」、「手づくりと伝統の全国もめん染織展」、ふれあいイベントの「国際交流」あおがきの夏」など、都市と農村、世代間交流のさまざまな事業を展開し、二十一世紀に向けて、豊かな町づくりの基盤を住民一体となつて築いている。

日本のバルビゾンをめざして

文化創造の町として、一躍脚光を浴びた町民自慢のイベントは、「青垣二〇〇一年日本画」美術展である。これは四十歳以下の日本画家を対象に、全国から作品を公募して開催しているもので、毎年全国的美術ファンが一人、青垣町に流れ込むという人気ぶりである。

町では、この中の優秀作品二点を買上げ、これを所蔵品として、将来、日本画専門の美術館をつくることを考えている。そして二十一世紀の日本画壇を担う日本画家を育て、いわば日本のバルビゾン（ミレーやルッソー等が住んだパリ郊外の美術村）をめざすという壮大な夢を描いている。

この美術展は今年で第五回を数え、第四回からは事業展も





城崎温泉・西村屋印象記

荘 正 衛 (柏原町)

開催している。すでにいくつかの成果が表われている。たとえば、町民文化祭には絵画の出版が増えていし、町内の中学校では岩絵具を使った日本画の授業も始まっている。このように美術への鑑賞と創作の意欲を盛り上げる効果をもたらしている。それだけではない。単に中央からの文化の導入にとどまらず、むしろ地元の小さな町から全国へ向けて文化の発信を行っている。町民が青垣に誇りをもち、郷土意識を高め、文化の花を咲かせるという強い決意である。

町民の知恵が生んだ『青垣二〇〇一年日本画展』は、町づくりの代表選手であり、原点でもある。

平成三年春四月、どこか温泉へ行こうかと誘われ、友人三人で城崎温泉西村屋へ行くことに決った。二十二日京都駅午後一時あさしお五号にのりこんだ。特急といっても山陰線は単線で、ところどころで列車の待ち

合わせがあつて新幹線のようにはいかない。沿線の風景も単調であつたが、窓外にながれる山かげの緑の中に、ちらほら桜が春のゆくのを惜しむごとく咲いていた。

城崎といえはすぐ思い出すのは、浪速の文人上田秋成が療養のため、妻これ連れ「城崎入湯の記」をものしている。また近くは、島崎藤村が「山陰記行」を残している。

西村屋差しまわしの車が温泉街を通りぬけ玄関に到着した。女中さんにとまなわれて長い廊下をまわりながら、奥の二階の間に木の香も新しい部屋に案内された。

寸分くるわぬ建具、数寄屋作りのたたずまいに驚き聞いてみると、平田雅哉なる人の代表作とのことであつた。平田とはいかなる人なるか知る由もないが、昭和の小堀遠州とでもいいたいようなその作風の美しさに心うたれた。

二階から階段を降りると浴場がある。翌朝早く朝風呂に入つたが、浴室の一方が総硝子で外の庭園が見える。ほかの古い庭とはことなり、現代的な感覚がとり入れられて浴場と連っている。軒先から光線が屈折して透명한湯水の中に銀白色の輝きを漂わせているのが清潔感をあおつた。この一画、この一ときこそが湯治の醍醐味というのであろうか。腰の痛みも心なしが消えて行く。建築庭園ともに新しさと古きが自然にとけ合い、古い歴史の中につみ重ねられた文化の香りが感じられた。玄関を入ったところに一際目だつ大きな書がか

である。神戸の女流書家、望月美佐の「一期一会」とある。女将の心がしのばれてうれしかった。なお特に感じたことは部屋廊下浴場庭園トイレ等すべて掃除がゆきとどいて清潔であること。また働いている人々が独りひとり、残らず同じやさしい気持で接してくれ、真心が伝わってくる思いがした。ほんとうに安らぎを与えてくれる温泉旅館、西村屋である。またぜひ行つてみたいと思つてゐる。

但馬路を往く

旅路も遠く城崎の 出湯の街に来てみれば
春雨かすむ円山川 岸辺の芦もほころびぬ

一羽の鳶が^{とび}大空に 輪をばえがいて消えてゆく
見はるかす丹波但馬の連山は 白皚々と夢のごと
遙かに浮ぶ大橋に そひてたゆとう薄れ灯が
くれなずむ川面におちて あやしきまでに静寂に

春雨けむる但馬路に 出石の町を逍遙えは
古き歴史の残照が 古城の影を映すかな
名にしおう古き生野の銀山は 秘めたる歴史の興亡を
まのあたり見る思いして 感慨いとど胸にしむ

春まだ残き死野の谷 「舞狂」の村の物語
吹く雨風は膚をさし 心悲しき想いする
ガイドの乙女は朗々と 「天の日槍」の傳説を
語る姿のいじらしく 一会の縁をいとおしむ

悲しき青春の口笛

遙けくも来つるものかな 浪草の都ゆ近江路へ
遠き浪花の青春は 臘月夜の中之島
伴に肩くみ手をとりに 歩みしことの思い出よ
さ霧流るる川岸に 語りしことのなつかしき
月は流れ歳は往く 朝な夕のかた時も
ゆめ忘れめやあの往時

想いつゞけて六十年の春 初恋の女性住むという
草むら深き近江路に ゆくりなくもたどりくる
燃ゆる想をしずめつつ 訪れみればその女性
悲しきかなや今は逝く この世の人にはあらざりき

想い悲しき彼の森の おくつきの前にたたずめば
はかなき恋の思い出と 君が面影しのばれて
告白んとすればその声は つとう涙にきえうせて
語らんとすれどわが愁い

まともの言葉とはならざりき

この世に生れて君をしる はかなく哀しき恋なれど
はるけき昔をいとおしみ 墓前にしばしぬかずきて
君が冥福を祈るなり

生き永らえてわれ独り 八十路の坂を越え来たり
君がねむれる近江路の 静寂き草津の里に住み
終のすみかとちかうなり

金勝山をさまよえば 遙かに浮かぶ比良の峰
われ訪れるその日まで きみ安らかにねむれかし

柏原と私

田 健 一 (柏原町)

物心つく前は別として、記憶に残る最初の柏原訪問は、大正九年学習院初等科一年の頃で、祖父健治郎の兄・田艇吉翁を父に連れられてお訪ねしたときでした。

下小倉の邸の塀の白壁が暖かい日ざしに白く輝いて見えました。幼い日に見た小高い山を背景に明るく穏やかなこの光

景が、今日まで柏原の印象として鮮やかに浮かんできます。その夜夕食を頂いているときに、どなたかに「男はお酒が飲めない駄目だぞ」というようなことをいわれ、盃に注がれたお酒を一気に飲んでしまいました。顔がほてり、恐らく目を白黒させていたことと思いますが、その暖かな周囲は、子供心に浮き浮きするような一刻でした。

次に下小倉をお訪ねしたのは初等科六年生の頃でしたか、二人の弟と三人でした。その年に初めて走った特急つばめに乗りたい冒険旅行を兼ねたものでした。このとき艇吉翁は、田家のこと、特に三百年ほど前の祖先に捨女という方がおられ、六歳のときに「雪の朝二の字二の字の下駄のあと」と詠まれて世間を驚かせたこと、祖父健治郎との子供の頃の話など、やさしく話して下さったのをなつかしく思い出します。また邸にきておられたお年寄りから猪の話を書きました。この辺りは猪が多く、猪は山から一家で出てきて、父親が二本の牙を畠につきさして走り、いもなどを掘り起こして子供達が後から続いてこれを食べる、こういう被害を防ぐために山のすそに針金を張り回わし、空砲を撃ったりするなど、手ぶりを交えた面白い話でした。後年郷友会の集まりに柏原から芸者さんが猪の肉をたくさん持ってきて盛り上がったことがありましたが、山くじらといって、冬食べるとおいしいというお年寄りの話も思い出して一層楽しんだことでした。

もう一つ少々異質の思い出があります。それは徴兵検査です。私は大学在学中徴兵延期の手続きをしていましたので、昭和十五年に卒業して間もなく柏原で徴兵検査を受けたのでした。御承知のように検査の結果は甲、第一乙、第二乙、丙の四種類でしたが、その年に初めて丙種が二つに分かれて第三乙ができました。学生時代三年も寝込む大病をした私は第三乙とされ、徴兵官から「銃後でお国のために盡くせ」というような訓示があつて、そのときは何とも恥かしく申しわけない暗い気持になったものでした。しかし検査場である小学校から一步出て、柏原の明るい暖かな空気を吸うと、正直なところホツとしました。ただし現実はその翌年召集を受けて姫路聯隊に入り、昭和二十一年初夏に帰国するまで兵役に服しました。

こうして見てくると柏原と私は薄い御縁かもしれません。広報紙「かいばら」を送って頂いたり、何かにつけてお手数をかけ、一方的に柏原町のお世話になっていて申しわけなく思いながら、七十八歳の今日まで本籍を下小倉においているのは、私にとって柏原が心の故郷だからです。それはもちろん血の流れがありましようが、とくに幼児期から少年期にかけて多く柏原を訪れることができ、柏原の自然にひたり、人情にふれ、心暖まる経験を重ねたことが、私に郷土意識を培ってくれたものと思つています。「柏原と私」、私にとって実

は深い心のつながりがあるのです。

かつて氷上郷友会の会員が度々訪れたという「萬象閣」についてふれておきます。

萬象閣は、祖父健治郎が明治三十九年に玉川村に購入して命名した別荘でした。当時独立国であつたハワイの駐日公使が別荘としていたものを購入したものです。

萬象閣は多摩川の左岸、あの辺りの東側に連なる台地の一郭にあり、眼下に多摩川の清流が流れ、正面にも富士山、北は秩父から南は箱根までの山々が連なり見え、遠くは甲斐、信濃の連山まで望める雄大さと、四季折々の樹木、花木の変化の妙とをあわせもつ所でした。萬象閣と命名した祖父の気持がよくわかる景勝の地でした。たまたま遊びに行つているときに雷雨があり、祖父に呼ばれて眺望のきく部屋で一緒に激しい風雨を見ていましたら、多摩川の手前の一本松に稲妻が立ち雷が落ちました。怖かったが凄いい光景でした。

祖父は晩年をここで過ごし、昭和五年十一月十六日に生涯を閉じました。

祖父が萬象閣を購入した四年前の明治三十五年に氷上郷友会が発足し、祖父は副会長に就きましたが、景勝が自慢のこの別荘に会員の方々を折にふれてお招きしたのではないかと思われまふ。現在は五島美術館のある辺りで、二子の渡しのあるあたりに、今は二子玉川として大いに栄えています。

ふるさと

田 敏 夫（柏原町）



私の祖父、田健治郎は柏原町下小倉の出身で、明治の中ごろ志をたてて上京し、官界・政界で活躍し、台湾総督を務めたあと引退、枢密顧問官として大所高所から国政のご意見番をつとめ、昭和五年に逝去した。

当時祖父は玉川上野毛に居を構え、私達孫共が遊びに行くのと、よく「ふるさと柏原」のことを話してくれた。まだ十歳に満たない私も、祖父から柏原の鐘ヶ坂の花見、篠山方面へ通じるトンネル開通の話など聞かされた。そんな当時の祖父の面影が今でも心に残っている。

その後大平洋戦争となり、昭和十九年、学徒動員となり、私は東京築地の海軍経理学校を卒業して舞鶴海軍鎮守府へ、主計少尉として任務についた。

戦争はますます激しくなり、東京をはじめ主要都市は焼かれ、鎮守府にいても戦況不利の様子が日一日と高まってくる

のがわかった。

当時東京空襲を避けて姉一家（故園田寛氏の長男）が柏原の祖父・田健治郎の生家へ疎開していた。私のいた舞鶴と柏原は汽車で二時間足らずの距離であつたので、勤務のない日には、よく柏原を訪れた。柏原駅から下小倉の家まで食糧を持つてよく歩いたが、今日の柏原の姿からはとても想像もつかない、疲れた、淋しい町並みであつた。

戦後、私は観光関係の仕事に終始し、出張などでよく福知山線を通るが、年ごとに沿線が活性化してきているのを見て、心強く感じていた。

昭和五十年、父（誠）が亡くなって、私の家族と母で柏原の祖父の墓詣りに行った。神戸で一泊し、自動車で柏原に向かったが、あつという間に篠山を通り柏原に着いた。とても今までの「遠い丹波のふるさと」という印象は去り、高速交通手段による距離の短縮が、いかに地域経済の活性化に貢献しているかを、目の前に見せつけられる感じであつた。

〈近況〉その後十五年以上たった今日、日本は懸命な努力の結果、経済大国へと成長した。しかし、これが本当に安心できる経済大国の姿なのか、一人々々が今一度考えてみる必要があるのではなからうか。これからは最も親しくつき合わなければならないアジア各国と日本との経済的協力が必要である。「昔は剣」、「これからは円」で日本が侵略するという印

象を、アジア各国の人々に植えつけてはならない。

現在私は旅行を通じて日本・中国の青少年の交流を促進する財団の仕事をしている。年に数回中国を訪れ、各地で中国の人々の生活を見ることができたが、彼等の日常は今日の日本の生活から見て極めて質素であり、足が地に着いた生活態度である。日本の修学旅行生が中国を訪れ、同年代の青少年と接して皆感じることは、日本人の今日の生活態度がこれくらいのかという反省である。これは各校の中国旅行記録に書かれた生徒の印象でもある。

隣国中国の青少年の物と心に対する考え方、これからの日本を背負う青少年の指導、アジア各国の青少年を交えて相互理解する機会をどんどんふやすべきだと思う。

「これから」 戦前から終戦後しばらくの間、日本は「心の時代」であり、経済が復興し隆盛になるにつれ「物の時代」へと変化してきた。お金さえ出せば何でもできるという考え方が今日幅を利かせているようである。政治の成行きでは、これが何時、崩壊するかわからない今日このごろである。

日本人は本来、心の支えによって生きてきた国民であり、教育の面でも一時歪められたときもあつたが、物質優先の現代社会を善しとする人々は少ないのではないだろうか。「自己主張」から「相手の立場を考える」ことへの転換が、これからの日本人の心掛けなければならぬ課題だと思う。

「ふるさと」「母国」を最も尊ぶ私達日本人にとって、これから「物心」のバランスのとれた態度こそが、国外・国内ともに求められる時代となるであろう。

郷愁

波多洋 三(春日町)



人は誰でも郷里を愛するのである。毎日住んでいると慣れてしまつて気づかないが、いったん郷里を離れて遠くへ行くと、急に郷里が懐しく恋しくなるものである。

丹波で生まれ丹波で育つた私は、国領村(現春日町)の進修小学校から柏原中学校(現柏原高校)に進み、柏原中学校を卒業するとすぐ大阪に出た。

大阪高等工業学校で電気工学を学んで大阪電気暖房(株)に入社した。それから今日までいろいろなことはあつたが、いつの間にか八十の坂を越してしまつた。

今この間をふり返ってみると、故郷が恋しくてたまらなく思つた時が三回あつた。最初は徴兵検査で甲種合格になり、

野砲第四連隊（大阪府泉北郡信太山）に幹部候補生として入隊した時であった。昼間は乗馬訓練や砲術訓練でたくさんに疲れ、そのうえ幹部候補生であるため学課試験も厳しく、夜間が勉強できる時間ではあったが、九時の消灯ラッパが鳴ると不寝当番以外の者は全員が寝台の毛布にもぐり込まなければならなかった。

そんな時である。誰もが寝台に入って、あたりがしんと静まり返ると、すぐに寝込んでしまうはずなのに逆に目が冴えて寝付かれず、郷里のことが臉にちらつき、両親や兄弟のことから子供の頃よく遊んだ友達など、あの山や川までがまるで走馬灯のように浮かんできてたまらなく恋しくなるのであった。こんなことを毎晩のようにくり返すうち、隊内の生活にも少しずつ慣れ、そのうち日曜の外出が許可されるようになる。大阪に出るのが嬉しく、郷里に近づいた気がして、その頃から少しずつ郷愁の念も薄らいだように思われた。

昭和六、七年頃になって日本と満州の往来がだんだん繁しくなり、新潟、敦賀から日本海を跨いで北朝鮮経由で満州国の首都・新京へ直通のコースが計画された。北朝鮮の羅津に数万トン級の船舶が数隻同時に発着できる埠頭を建設し、隣り町の雄基まで通じている鉄道を羅津まで延長し、この埠頭上で接続させるということであった。この工事は全部を満鉄（南満州鉄道株）が担当、施工業者は満鉄の指定業者の中か

ら選ばれることになり、大阪電気暖房株も同業教社とともに指定された。

この頃私は大阪市内に建設中の綿業会館の工事に関係していたが、三月になって急に羅津出張所長を命ぜられ、至急現地に赴き出張所を開設するよういい渡された。四月上旬、何の準備もないまま敦賀港から船出して三日目の夕方雄基港に上陸したのであった。羅津はこの頃まだ二、三十軒ほどの漁民の住む寒村であった。羅津を目的に集まる人々も、一軒の宿屋もないランブ生活の所ではどうしようもなく、みんな雄基に泊まってバスで往復していた。

私も同様で雄基に上陸したものの、いつまでも旅館住まいもならず、電灯会社の人の世話で宿泊のできる事務所を一軒借りた。羅津にバラック程度の事務所と宿舎を建てて移ったのが約三ヶ月後のことであった。

羅津に移るまでの約三ヶ月間、夜になると一人寝の淋しさからまたまた望郷の念がつのり、遅くまで手紙を書いて気分を紛らした。それでも故郷恋しさに涙ぐむ日もあった。

羅津に移って三年あまり、大阪からも多くの社員が往来するようになり、一人住まいの侘びしさはなくなった。

港湾建設の一期工事が終わったので後任者と交代していったん大阪に引き揚げ、昭和十一年四月に結婚式を挙げ、すぐまた新京支店に轉任することになった。新京に住んだ四年間

は平隠であつたが、昭和十五年になつて北京に支店を開設することになり、またまた私にお鉢が回つてきた。

北京支店の開設は非常に順調で、聯合準備銀行の本店や華北交通公社等大型工事が次々と決まり、技術者の増員が要求されたが、日本内地からの應援は次々と應召者が増えて望めず、満州からの應援に頼るよりほかなかつた。

昭和十八年に入ると、大東亜戦争の戦局が次第に悪くなり、北方ではアッツ島が落ち、南方ではガダルカナル島から撤退を余儀なくされたと発表があり、誰もが暗く沈んでいた昭和十九年一月十日、領事館から召集令状の赤紙が届けられ、一週間後に北京防衛司令部に入隊を命ぜられたのであつた。今應召すればどうなるかわからない。二度と帰つてこれられないかも知れない。会社のこと、家族のことなどあれこれ心配しながら、やはり母親のことが脳裏を駆けめぐり、子供の頃よく遊んだ郷里の霧深い朝の光景が浮かんでくるのであつた。声ありて追いつきがたし霧の朝

郷里に思う

谷垣富子（柏原町）

夫婦で郷里を共にするのはたいへん都合の良いもので、例

えば黒豆、山の芋、猪鍋、鯖ずし、松茸、白味噌と、ツーといえどカーと通じ合い、味覚の不一致など全く見られません。また主人が『あそこから見た山の姿が好きだ』といえど、私も『いや、あそこからの山も良い』と夕べの食卓がそのまま超ミニ郷友会の会場となります。

子供達も二十歳になり、長い道中に耐えられるようになりますと、夏は必ず祖父母の家に連れて帰りましたので、共に柏原を郷里と思うようになりました。親子で郷里を共にといえどちよつとおかしいのですが、子供達は育つた所がそのまま郷里となつてしまいます。ですから家族一緒に懐かしみ、帰れる田舎を持つていることを友人からたいへん羨ましがられると申します。

五年前、両親を見送りました。そうすると今度は、ただ懐かしい所であるだけではなく、お盆には帰つて先祖祀りをする大切な所でもあるのです。夏の風は田の面から稲の香りを運び、都会暮しの疲れを洗い流し、気持ちを生きたささせてくれます。道で行き合つたおばあさんは、お孫さんを背に知り合いでもないのに、『こんにちは』と、声をかけて下さいます。一緒に歩いていた息子は『ウー、こんなのいいなあ、都会では考えられないことだよ』とすっかり感激してしまいました。山が夕焼けに染まり、ともしびがともるころ、家々からそれぞれに異なる鐘の音と共に、御詠歌の声が聞こえてき

ます。お年寄りも、おチビちゃんも一緒に佛様の前に坐る姿が網戸越しに見えたりします。息子はまた『日本をよく知ってもらうために、外国の人にも、ぜひこんな様子を見せたいな』といいました。私も大賛成です。私達の丹波にはまだこんなに美しい日本の姿や心が残っているのです。

しかし車窓から見る山々は何と荒れているのでしょうか。昭和二十六、七年頃、絵を描く方が褒めに褒めた丹波の美しい山々は、世紀末かと思われるそけた立ち枯れの木々がやたら目立ちます。見事だった我が家の赤め樫の生垣も枯れ、無残な姿を残しています。酸性雨のためだそうです。ガガーリンの『地球は青かった』の言葉をいつまで守ることができるのでしょうか。

また先日、帰省の途上、三田までの車中には驚いてしまいました。一時半というのに下校する高校生が多く、煙草は吸うは、人もなげな席の取りかた、何とか映画さながらの男の子と女の子の重なり合った姿、そして窓に上げた男の子の足は、私の目の前にありました。ちよっと考えられないようなローカル線の無法地帯化した車内のありさまでした。その前日、貴花田の優勝に日本中が湧きましたが、それは厳しく育てられ、鍛えに鍛えられた十九歳の若者が、土俵の上で見せる勝負へのひたむきな姿に酔ったのだと思います。年令も大して違わない車中の彼等を較べて見ようとは思いませんが、

こんな形でしか自己を表現できず、青春を楽しむことができないとしたら、それは何と悲しく残念なことではないでしょうか。何故彼等はこんな生き方をするのかしらと思うとき、繁栄と経済成長のみを追い求めるのに忙しく、ふと置き忘れてしまった私達の心が、姿を変えてそこにあるように思われました。何も福知山線のことだけではなく、陰湿ないじめや、簡単に人を殺したり、注意をすれば暴力をふるわれて身があぶないという今の世の中ではありますが、でも半年の間に郷里で見た二つの姿は、私にどのように考え、どのように生き、どのように行動するべきかを、厳しく問い求めているものがあるのを感じました。ある線を越えると復元力は失なわれるといいます。そのある線を越える前に、私達自身が真の価値は何なのかを考え、見直し、新しい行動を起こさなければならぬのではないのでしょうか。

西郷南洲は『子孫に美田を残さず』といいましたが、私達は力を盡くして大いに子孫に豊かな自然と、生きるに値する社会と、強く美しく優しい日本人の心を残そうではありませんか。

ふる里よ永遠なれと祈りつゝ

幼少の記

足立順治（永上町）

山の肩・西南の山裾からの湧水が屋敷の下に流れてきて、鯉の池と飲料水用の二つの池に注ぎ、その余水は下の方へ流れ去るのであります。鯉の池では米を洗ったり、里芋や大根を洗って、その洗い粕を鯉が寄ってきて、はねくりまわりながらパクパクと食うのであります。

田舎の古い家のことでありますので、母屋や土蔵、台所に牛小屋、農作業場さらには継ぎ足しの家や離れの座敷と、いろいろとゴチャマゼの家に生まれた私でありまして、母屋には部屋が六つ、廊下の奥にはまた別に六畳の部屋が二つつながり、そこに接して大きな新蔵という土蔵がありました。この蔵から下の方へかけて、中の蔵、米蔵、醬油蔵があり、六つの部屋は前栽や上便所のついた奥座敷に中の間、口の間、玄関の土間、その裏側に奥の部屋、中部屋、口の部屋、そして台所部屋が続くのであります。台所部屋は米蔵、醬油蔵に面していて日用の電が三つ並んでいて、端にある一つの電には、いつもお湯のお釜が据えてあってお湯がシャンシャン沸いていました。この釜に『一富士二鷹三なすび』の堀り絵が

ついでいて、いつも母からそのいわれを聞かされていたのであります。台所土間の先には『ハシリ』（洗い場のこと）と水がめがあり、醬油蔵の手前には漬物桶が並んでいるし、庭の先には大電が二基並んでいて、その裏側には燃料の芝や木材こつば（小ツ葉）が置いてあります。この大電は母が豆腐作りのときや、餅つきの蒸し物作り、白味噌作りの大豆蒸し、牛の食料の雑穀や麥類を煮焚きするのであります。広い方の内庭に地下土囊がありまして、芋や野菜、ネギ、ゴボウ等を貯蔵しました。隣りに接する内中庭の瀬戸を出ると、雨天用の農作業棟と並んで牛小屋があり、その隣りが百姓では一番大事な肥の溜め場・大小便所があるのであります。風呂場の前の唐臼ではいつも雇い男の「ジョンさん」（爺与兵衛）がきて米搗きをしていました。二重戸のある玄関の土間にはちよつとした腰掛けみたいな板間がついていて、小作人さんが年貢の相談をしたり、呉服屋さんが品ならべなどをするのであります。

母屋の玄関前には広い露天の庭があり、春の茶つみどきの蒸し葉干しや秋の取り入れどきには物干し場、七月にはタナバタ祭りをするのであります。母屋の裏はすぐ山で、大きな百数十年も経た檜木の林がありまして、檜皮買いさんがときどき大勢きて檜木の皮を次々にはがして束にしてみました。米蔵には飯米箱や古米箱、米俵や大豆、小豆、そら豆などの

袋が積まれてありました。醤油の蔵には、醤油を造る背の高い大きな木樽がデンと据えられ、その中に丸い輪になった直径一尺くらいの竹の簀の子が入れてあり、ぐるりの諸味より絞り出る醤油を汲み取るようになっていました。その奥に味噌樽が何本か置いてあり、漬物や浅漬は大切な日常の茶漬のご飯には無くてはならぬものでありまして、一年分の沢庵桶の大きな四斗樽が石を頭に乗せて並んでいましたし、それはそれは醤油蔵の中は諸味と塩と豆麴のにおいでぶんぶんでありました。一番奥の新蔵には長持や箆筒が並んでいまして、その中には衣類に布団、座布団、屏風や軸物、古物類が入れてあり、あちこちの棚には槍、刀、床の飾り物等が並べてありました。この蔵の外の屋根裏には大きなデンドリ蜂（スズメ蜂）の巣がぶら下がっていました。中の蔵には家財道具、鍋、釜、茶わん、塗り物、接待用品、茶葉に干物等々が入れてありました。

露天の広庭の先の新建ての座敷棟はおやじ自慢の釘を使わない建物で、田井の重さんという大工の一家に頼んで造ってもらったのでした。冬も夏も通いづめで、重さん一家の大工さんが私の家にいつも居たことを覚えています。庭の端にある古い柿の木はもう百数十年になる古木で、とても甘いおいしい柿になるのでした。丹波栗といいますが、裏山に直径一米余の栗の原木が二本ありました。秋には小さな栗の実が雨

風の日などジャンジャン落ちて、近所の人拾いにこない間にと、朝暗いうちから起き出て、栗を拾いに行くのでありました。枇杷の木、銀杏の木も山のかなたや、お宮の森に生えていまして、よく拾いに行ったものです。

幼少の頃、私は父母や姉弟等の小さい家族と母屋の奥部屋に寝起きしていました。冬など炬燵を中にして西側に父、北側には母と私、その隣りに弟と妹の三人、そして東側には姉二人が炬燵を中に車座になって寝ていたのでした。麻疹にかかって、中の部屋に寝かせてもらっていたとき、母が枕元にきて『これは「りんご」というもののえ、お寺の方丈さんから頂いたんや』といって、赤い大きなリングを枕もとに置いてくれたのを、今も昨日のことのように思い出します。「キョーフの虫」といって、今でいう疫痢（赤痢）に私の次の弟謙悟がかかり、この部屋の箆筒の前で寝ていたのですが、強い引きつけのあと亡くなったことは子供心に忘れられないショックでありました。

従弟の俊ちゃんの家には、母屋に接して大きな製糸工場がありまして、女工さんがたくさん居ました。製糸工場には大きな風呂があり、そのお湯は大きなボイラーからの蒸気で沸かすのでありました。そのお湯の沸く様子は、蒸気の入り込むバリバリという音ですさまじいものでした。女工さん等と一緒に湯に入り、ワイワイガヤガヤにぎやかに湯あみをし

たものでした。そのころの絹糸は横浜の方へ送られていたと思います。捨さんという釜焚きさんが石炭をジャンジャン釜にほうり込み「石炭をゴヘイダといいました」、ボイラーの蒸気の力で大きな動輪のついた原動機を動かすのです。ゴヘイダの燃え粕が俊ちゃんの家まわりの道に敷き撒かれて、石ころ一つないきれいな道になっていたのでありました。

汽車というものに乗ったのは小学校の四、五年の頃かと思います。篠山の伯母のところへ遊びに連れて行かれたときでして、電信柱が矢のように後へ後へと流れて行くのにはほんとうに驚いてしまいました。俊ちゃんは柏原の中学校に入り、私は篠山の鳳鳴義塾に伯母の関係で入ったのですが、その頃から二人はライバルでありました。東京の早稲田で商科を学んだのですが、今は俊ちゃんはあの世、私は老骨でなお世事に未練を残して生きているのでございます。

私の母は子供を十四人（双子はなし）産みました。私はその十番目で母の三十五歳のときの子です。男の子七人、女の子七人のうち、小さいうちに五人は麻疹や疫病で亡くなり、残り女五人、男子四人の九人が生き延びてきたのです。四人の姉が京都の女学校から夏休みで帰ってきた日などは、まるで女護ヶ島、かしまし限りでありました。一人の兄の結婚式の日、家の玄関先で母、姉、伯母等がああ芝居に出る「打ち掛け」姿でずらりと並んで嫁女の到着を迎えていたのは壮

観でした。今ではあんな情景はとも見られないなアーと、派手な嫁どりをなつかしく思い出すのであります。

隠居のお爺いさん（私の祖父）の八十八歳のお祝いの日には、直径一尺余の大きな一斗餅を作って親類や親しいおうちに配ったりしましたが、井中のしきたりとしてはずいぶん派手であつたと思います。山奥の田舎ではこうした色々の行事を楽しんだのであります。

夜風呂に入るのは男性が先で女は後。母は家族の一番しんがりで、それから下男下女が、もう家の者共が寝てしまうころに入るのであります。風呂はむろん木桶式の丸い五衛門風呂で、底の水の当たるところは鉄の鍋尻なので中には浮き板が入れてあつて、その板の上に乗つかっていれば、熱い鉄底には直接に当たらず具合がいよいのであります。風呂をわかすのを風呂焚きといひまして、裏山にたくさん落ちている松の枯れ葉「コクバカキ」（松葉集め）といつて、それをたくさん持ち帰り、風呂の焚き物にするのであります。『早よう風呂たいてエーナア』等といつて、もっぱら女中さんや子供等が、煙で目をパチクリ涙を出しながら風呂焚きをするのであります。

母屋と中の蔵の間に中庭があり、中部屋の中庭側にある廊下の途中に色々のランプの置き場がありまして、私は小学校から帰ると必ずこのランプの掃除をする役目でありました。

ランプのほやに息を吹きかけて布で拭き、ランプのしんを鉄で切り揃え、石油を各ランプの油壺に満たして置くのです。お客さんがあるときは、蔵から特別のランプを出してきれいにして石油を詰めておくのも役目の一つでありました。石けんなどというものがありませんので、石油臭くなった手を洗うのには往生したもんです。

どこの家も牛を飼っていました。農耕用の力持ちのためです。春から夏にかけて農耕の済んだ頃から、村中の牛は毎朝早くから奥山へ放牧しました。午後には腹いっぱい野草を食べた牛をつかまえて行くのですが、どの牛にも何の目じるしもつけないのに、不思議と自分の家の牛は顔形ですぐわかるのです。牛小屋には敷藁を敷きますが、毎朝食用の草を土手で刈り、籠にいっぱい持ち帰り、全部一ぺんに投げ入れるのですから、その食い余り分が牛小屋にたまり、牛糞と敷藁とで厚さ三十センチにもなるのでございます。一ヶ月余でこの牛糞や藁草を表に引きずり出して、小山のような馬草積み（推肥）をするのであります。この仕事を女性も手伝うのですが、何と女性の手や足が、ウグイスの糞で洗ったように、瑤瑤の表面のようにツヤツヤと輝くようにきれいになるのです。『嫁入り前には馬草積みをすれば良いでエー』といわれるほどでありました。

女性のことといえば、五月の赤い腰巻きに紫の襷、手ッ甲

脚絆に手拭いかぶりの若い嫁さん等が、ずらりと並んで田植えをする姿は誠にみごとな春の風物詩、一幅の絵でありました。農家ですとで田植えはもちろんのこと家造りや屋根葺き葬儀や祝事等々は村人達が総がかりのにぎやかなものでありました。

村での蚕さん飼いのことですが、蚕の幼虫時代、二齢位までを共同蚕飼といって、小蚕の幼虫を四、五軒の有志の家で共同で飼うのでありました。母等の寝起きする奥部屋に二階に蚕室があつて、中部屋の天井から釣り梯子でその蚕室に入り、蚕が繭になるまで、そこで母が飼うのでありました。特筆したいのは母の機織りのことであります。新蔵の前の六畳の二ツの部屋の奥の部屋では、私や、私を可愛がってくれた出戻りの伯母等が寝るのですが、手前の六畳部屋には中庭に面して機織り機があつて、チャンチャンスウスウ、チャンチャンスウスウと、何時も母が機織りをしていました。紺屋さんで染めてきた木綿糸や絹糸を数十、あるいはもっと大きな糸巻に分けて並べ、その糸巻からスルスルすり出る糸をたくさん一ツに束ね、それを機織り機の作業芯に巻き取るのです。それは口の間から中の間を通つて奥の座敷まで川のように引っぱりまして、箒という歯櫛のような真竹の繊維で作った糸取り箒に、一本一本の糸を克明に通し分け、布巾一ぱい分、数百本の糸巻き束根を作る作業は、また格別めんどろな

仕事でした。二日も三日もかかって機械機の準備をするのでありました。

初夏の麥叩き、秋には稻コキ、晩秋の唐箕トウを使つての粃摺モミスり。そして正月の餅つきを大きなタチ臼、重い杵でペツタンペツタンと母のあしらいで搗きまくつたのでした。また内庭の大きな竈で豆腐作りもしました。ニガリというものを入れ豆腐湯をしぼって箱に注ぎ込み、重しの蓋をして固まれば大きな豆腐のできあがりです。このように私の家では豆腐も味噌、醬油もみな自家製で、辛いも甘いも自由自在、みな母の味加減一つでありました。

母は明治元年の生まれで、明治三十五年の二月（太陽暦）に第十子目の私を産んだのでございます。そのころは新暦制を（太陽暦）採ってしまして、私の産まれた日の生年月日の届け出は、明治三十五年二月二十八日となっているのでございます。新暦二月といえは、旧暦（陰暦）では十二月の末か旧正月になるかならないかのころかと思ひます。

私の産まれた家の南西の山裾は池の谷といひまして、山からの絞り水が流れ出て、細い溝に添つて家より一段と低い庭先にある二つの池に溜められました。大きな池には鯉や鯔、小さい池は近所の家々の共同の飲料用の水溜め池で、「目だか」や「山もと」が泳ぎ、「カニ」や「うなぎ」も穴にひそんでいました。毎年お盆には飲料池の掃除をかねて近所の人々が集

まって溝を止め、『カイどり』といつて池水を汲み出し、池を乾し上げてきれいに掃除をし、御神酒を注いで池を清めるのでありました。そんなとき、大きな「うなぎ」が池の隅からニョロニョロ出てきて私ら子供を喜ばしたものです。あとは近所の人々が集まつてお酒を飲んだり、大根と油揚げの交ぜご飯をたらふく食べるのが楽しみでありました。こうしたことは、家を新築したり藁屋根を葺き替えたり雨乞いをして山から帰つてきた時などに、にぎやかに行われたものです。

小学校や役場はみな新暦でありましたが、我が家はずっと旧暦で通しましたので、例えばお正月のお祝いは旧の正月ですからもう小川も「水ぬるむ頃」で、七草が生え盛り、露のとうが顔を出し、芹などがつみどき食べごろなのでありました。黒い古びた三寶サンボウに勝栗、するめ、黒豆にお米、そして二重ねの丸い祝ひ餅の上には、だいたいみかんと大きな伊勢えびが乗せてあつて、私ら子供はその前に正座して、父から勝ち栗、するめ、黒豆などを頂き、お目出度うございませと祝ひの言葉をとなえるのでございました。

麥刈りをしてホタルがあちこちの山裾に飛び交うころ、村の青年の一団が松の赤味でできた松明をかざし、奥の山里から虫追いといつて、井中田んぼを通つて佐治川土手まで走り下るのでありました。なぜ松明なのか虫追いなのか分りませんが、とにかく村の青年の初夏の行事の一つでありました。

そのころの夜は鯰取りというのがありまして、鯰が繁殖期で川から田んぼのふちの細い溝に昇ってきて卵を産むらしく、松明を照らして夜回りすると、大きな鯰が二匹三匹とバチャバチャはね回っているものでありました。初夏の夜の鯰取りの面白かったことは忘れられません。また泥田や泥溝にはドジョウがたくさん居まして、つかまえるとキューキューと泣くのです。あなたはドジョウの声を聞いたことがありますか。

私共の幸世村井中は汽車もなく海も見えない丹波の山里であります。汽車を初めて見、乗ったのは、中学校へ入る頃でありましたし、人力車は村に「市ッつあん」の一台と柳町の石井医院に一つあっただけであります。ですから私が大阪に初めて行ったときは、梅田駅前の広場に人力車がズラリと二、三百台整列しているのを見てドギモを抜かされました。

井中の奥地（オクジ）は山奥で、牛肉や牛乳などとても薬にしろともなかつたのでありますが、小学校の上級生のころ、中田井に乳牛が一頭いて、針金のついた細い首のピンに入れた牛乳を病人用に売っていたということを聞いたことがあります。また川向かいの鴨内から魚屋の「金さん」が、海産物を積んだ車力を引いて月に一、二度売りにきていたのでございますが、それを買に出るのは母の受け持ちでありました。干しジャ子、干し数の子、昆ん布、サイロ（サンマ）の干物、塩ザケ等でありました。

暑い晩春のある日、小学校の同級生であつた御井の文ちゃん（オノイ）が私の家の下男になりまして、私と一緒に田んぼに出て麦中（マキナ）という田仕事を汗をかきながらしたのでありますが、同級生の文ちゃんが下男だなぜ何だか可愛相で、私はほんとうにいやでありました。

十月二十七日は村の鎮守のお祭りでした。私共少年はその日の宵祭りの夜、宮の籠（カゴ）堂に集まり大きな『へっつい』の囲炉裏火を囲んでワイワイさわぎをして、その夜はお堂のあちこちの押入れなどにもぐり隠れて寝込むのでありましたが、夜中から『炭塗り合戦』（スミダマ）といって囲炉裏の炭を粉にして寝ている連中の顔に炭を塗りつけるのです。朝目が覚めると顔は炭だらけ、鼻も目のあたりも真っ黒けで、お猿さんが目をパチクリして笑い泣きしているようでありました。お祭りの行事が済むと帳破り（トウサキ）といって大きな籠にいっぱい松茸を集めてきて、お宮さんの大釜で松茸飯をたき、皆に大ばんふるまいし、お祭りのおさらえをすることがありました。

またこのお堂の東側に広い板張りがありまして、お正月にもなればやんちゃ盛りの子供や青年が十人余り寄り合つて、『独楽（コマ）回し合戦』をするのでありました。独楽には尖（トガ）った鉄の心棒があり、外まわりには鉄の輪金がついていて、丈夫なヒモでぐるぐる巻きにして相手の独楽に穴のあくほどぶっつけて倒すのでありまして、それはそれは大変な投げ独

楽合戦でありました。

このころ「オイツチニ」の薬屋のおじさんが手風琴を鳴らしながら村々を歩いていたのでした。その姿は、日露戦争の軍服・軍帽を着けて、肩から薬のカバンを下げ、手風琴（アコーディオン）を持って「ここはお国の何百里」と歌いながら、村の辻々を歩いていて、私等子供にはい로운な絵ビラを配ってくれたのも懐かしい思い出の一つです。

佐治川は名の通り、佐治奥から流れ出て播州加古川へと流れ入る川ですが、私どもの住む奥山からも支流で流れ落ちる細谷川の出口には「サカナ坪」という場所がありました。そこは幸世橋を下がつて東岸は方町で、西側は井中や御油田んぼのちょうど間で、黒々とした深い淵でした。夏にもなれば私ども子供達は、川へ泳ぎに行くといつてここへくるのでありました。坊主頭、前の物も丸出してドブンドブンと飛び込みの稽古や、かえる泳ぎで岸へたどり着くなどそれはそれは愉快的な川泳ぎでありました。幸世橋の上方に沼区があり、その村のはずれに清水という所がありまして、清水がコンコンと湧いているのであります。考えますと、ここは恐らく井中や御油の山奥からのしみ込み水、地下水が集まり集まって吹き出ているのでしょうが、その量たるや相当なもので、この水は流れ流れて井中田んぼの平地に注ぎ入り、灌漑用水となっているのであります。

夏の夜はイダ釣りといって、方町の勝治さんがあのサカナ坪の水辺で釣り場をこしらえて、夜な夜な夜釣りをしていました。イダ（ウグイ）という大きな魚を釣り上げる仕掛けなんです。また私の兄が西丹貯蓄銀行に勤てめいたときのことです。柳町橋の上流で火振り魚を奥地の若衆を連れてやりました。川の上流に「引き網」をずーっと横に引いて待つていて、川の下手から松明を二、三人で振り振り上流へと進んで行きますと、落ちアユの大きなのがたくさん網に引っかかるのであります、それはそれは面白いアユ漁で、柳町の看場屋さんで料理をしてもらい、みんなで食べたのでした。料理



屋のアユ料理は格別においしかったものです。こうして思いを書き綴りますと限りがありません。涙の出るような田舎のあり難さや母の慈愛が思い出されるのでございます。

かへり見て悔^イもあり たのしさも思い起こして

ただ父母のことのみぞなり

〈写真〉 近ごろはこんな姿で藤沢の町中を走りまわっております。

柏原をたずねて

国村 きぬゑ

(柏原町・旧姓平井)

昭和十四年、柏原高等女学校本科を卒業して、半世紀を遙かに越しました。

生まれたのは大正、そして昭和の時代には人生の一番盛んな時を過ごし、いま平成の世を迎えて、我が年令は「古稀」となりました。振り返って見れば遙かに来つるものかな！の感慨ひとしおです。

女学生時代だった昭和十年〜十四、五年の教育は、礼儀正しく、堅実に、良妻賢母を目ざしており、「お作法」の時間があるのも、女学校に入つての珍らしいことの一つでした。追々と戦時色も濃くなり、体操の授業に「薙刀」が入り、出征兵

士の留守宅への勤労奉仕などにも出かけ、また日の丸弁当の日といって、ご飯のまん中に梅干一個だけのお弁当を皆が持つてくる日もありました。すべては戦争に向けての歩みの中で過ごした日々でありましたけれど、四月入学式の頃は満開の桜が校庭を取り囲んでいました。運動会は秋晴れの暑い日、力一杯の声を張りあげ、賑やかに笑い、ときにはちよつとばかりイケズをやつてみたり、その時代なりに青春の入口を楽しんだように思われます。

自分の性格でしょうか、それとも時代のなせる業か、この長い年月は、いつも前ばかりを見て歩いてきたように思います。昨年ふと、心ゆくまで故郷を味わつてみたいと思ひ立ち、気ままな一人旅で思い出のふるさと柏原に帰りました。

柏原に着いてまず驚いたのは、何時もお世話になつた柏原駅が面目一新、モダンな駅舎になつていたことです。会いたいと思つていた人がフイといなくなつたような気分で、早いうちに写真にしておけばよかったと残念に思いました。

故郷に帰つて何が懐かしいといつても、自分の暮していた家が残っている嬉しさは格別です。今は他の方が住んでおられるので、中には入れないけれど、家のまわりを歩き、裏口からちよつと入つてみるだけで時計の針が逆廻りをする気持ちです。「故郷は遠きにありて想うもの」とはいいますけれど、目の前に故郷の山河を見る安らぎは格別です。



大手通りを旧高女の方に歩きますと、崇広小学校と並んで立つ思い出の建物、登って行く坂は幅狭くはなっているものの、右手の「さるすべり」は健在、正面の本館のステンドガラスは変わらぬ色で仰げました。「高女の卒業生ですが、ちょっと中を見せて頂きたいのですが」とお願いしてみる。「どうぞゆっくり見て下さい」に嬉しく入らせてもらう。卒業式以来はじめてのこと、胸がドキドキするのです。アッ、これ、そのままだわ！と思ったのは二階に上がる階段、思い出す手摺りの擬宝珠、忘れていたけれど両側から上がれるのだった。二階に上がって先ずは教室、松組、柏組二つの教室の間の廊下の狭まくて暗いこと、よく百人の生徒が行き来できたものと感じる。二教室とも新建材が張りめぐらされていて趣きも薄れ残念でした。正面玄関の上のバルコニー、この辺りにはいつもオルガンが置かれていたことなど思い出されます。今は町の施設として種々の行事に使われているようですが、内外とも以前の姿に戻せるようなら嬉しいのにと思ったりもしました。二年生から四年生、補習科の教室があった木造校舎は跡形もなく、寒い日には炭火に当たりに行った小使室はこの辺だったかと思い、小使いさん面白くて優しい人だったなあと思います。校庭の裏門を出て細い道を行くと東奥には大きな池があつて放課後遊びに行ったり、何人かで写真をとったりしました。思いついて行つて見ましたら賑



やかな声が聞こえて、昔の池は広々としたグラウンドに変わっていて、高校生が野球の最中でした。

八幡様の塔を眺め、町の中を隈々まで歩き、お友達や知人とおしゃべりをし、たくさん写真の写し、満足して帰ってまいりました。

結婚してからは北海道函館に住みましたが、その頃は柏原に帰りますのに足掛け三日もかかりました。今ならアメリカに住んでいるより遠かったかもしれません。

子供達の手も離れ、自分の通ってきた道を振り返ってみると、昔は形式から入ったことが多くて、今の新しい教育の発想はあこがれでした。そうであればこれからの人生、残り少

ないかもしれないが、自分の求めるものに励みたいと思い、先ずは少し素地のあつた書道を始めて、今ではお教えもしております。またこんな世界に往来するようになったのに母国語だけで過ごすのも残念と、中国語の学習を始めて六年が過ぎました。週一回東京の授業に通い、毎日辞書を操つての日々を過ごしています。去年から始めたパソコンも、もう少し上達すれば翻訳の清書に役立つと楽しみにしています。自分の気持ちは二十歳の時も今も変わらないように思いますのに、人生も閉店の時が近づいてまいりました。その日まで夢と希望を持って元気に暮らしたいと思うこのごろです。

柏原讃歌

谷 達 雄（柏原町）

水上郷友会でも柏陵同窓会でも、自己紹介が必要なとき、私の場合、至極簡単にすむ。「柏原の谷……」といいかける、と、先方から「あの本屋さんでっか」といつて下さる。郷里に対する私のアイデンティティーは、たいていの場合、簡明直截である。それだけ長い間、私の生家が多くの方々から御愛顧をいただいたわけで、ほんとうに有難いことである。

郷里の会合に出ると、話の節々に、私はどうも郷里に対す

る意識が薄いように感じることもある。これは私の性格にもよるだろうが、曲りなりにも私の生家がそこに健在で、いつでも足を伸ばして寝られる場所があるという思い、いわば私にとつて郷里が懐郷といった過去形ではなく、今もつて現在形で存在することによるのではないかと思っている。

とやかくいっても生まれ育つた柏原の町には愛着がある。柏原はよく城下町といわれるが、篠山のように城らしいものがあるわけではない。戦後、各地に復元された天守閣も聳えていない。むしろ柏原の住民の住まいと同じ平面に藩邸があつて、そこに殿さまが住まわれた、こういういわば民主的な旧藩の町でよいのではないか。

あまりいわれたことはないが、柏原という町の美しさは周囲の山巒にあると思つている。低い山並みが盆地の中にくびれ、その反対は膨らんで山巒をつくる。その巒の中にはたいいてい運営に苦しみながらも小さな寺があり、廃れつつも天神さまなどの小さなお宮があつて、これらが夏の間、次つぎにお祭の鈴を鳴らす。この山巒は秋日のなかの黄葉の頃がいちばん美しい。

これは柏原だけではないが、次は丹波の霧だ。ことに夏の深い霧の海と晴れた後の蒼天、この霧にひたると否応なしに丹波人の意識が生まれてくる。霧の名どころとして、山陽と山陰の接点の広島みよの三次や、愛媛の大洲おおすの川霧などが有名で

あるが、これらの霧は湧きたつ静的な味わいがあり、これは丹波人のやや退嬰的な性格にもあらわれているように思う。

柏原といえば八幡神社であるが、山地に立つ神域と神社の造型は第一級の観光資源である。もつと観光ルートが拓け、もつと都会に近かつたら、このお宮の値打ちは跳ねあがるに違いない。八幡さんの山の森には椎の木がたくさんある。秋のあらしの後、小さな実を拾ったものだが、皮を剥いだ果肉の白さは今も脳裏に鮮やかである。そして二月半ばの厄神祭、その賑いときめきは懐郷の念の薄い私にも、毎年ひそかな慕情をかきたてる。そして今年も雪が降ったのかなと、暮夜、生家へ電話を入れる仕儀となる。

盆地を囲むなかに、実は私にはもう一つ好きな山がある。八幡神社に続く裏山の高鉢山だ。柏原高校と五社稲荷の間の山でもあり、清水山へと続く。何の変哲もない低い山だが、赤松と灌木がほどよくあしらわれ、かなり広い地肌の花崗岩の砂の白さが眼にしみる。平らな山肌、ことに秋の日に座ると世の憂さを忘れる。そして赤松の中には松茸が出た。もう少し条件がよかつたら八幡神社と結びつけて恰好な遊覧地になるといつも思っていたものだ。

こういう柏原だが、もう一つ欲しいものが河だ。柏原川という川があるが少々物足りない。この頃その清流が宣伝される高知の四万十川ほどでなくても、もう少し広い清流があれば、

ば、柏原のよさは倍增するに違いない。

ご多分に漏れず、柏原の町も東から西へ新しい道路が貫く状況になった。道幅の狭い入りくんだ旧市街がとり残される。土地が広く気分が新しい新道の沿線が発展をたどる。この旧市街の問題は、全国の高速道、自動車道、新幹線の開発にもなつて見られるものである。どこでも衆知を集めて対策に苦慮している。旧市街がいれば後向き存在であるだけに、なかなか妙案が生まれない。旧市街と新道路との分化が適当なところで止まるのか、さらに深化するのか、むずかしい問題である。

○

ところで私はおよそ四十年、練馬に住んでいる。人口六十三万、東京二十三区中、緑の割合の最も多い土地である。雑木林で象徴される武蔵野の一部にはちがいないが、武蔵野の風情はあまりない。これは練馬にかぎらないが、私の最大の不満は山が見えないことだ。私は俳句を長年嗜んでいるが、のつぺらぼうの野原より起伏のある山がある方が作りやすい。山国に生まれ育った私には、山のないことは土地に膾が（な）ない思いだ。

水田はもちろんなく畑オンリー。関東ロームという火山灰地だから畑の畝は立てられず、畑づくりは全く簡単である。丹波の白い土にきれいに畝立てした畠が懐しく思われる。練

馬といえは大根、これは病気で滅び、今は一面のキャベツ畑で、東京のかなり大きな供給地である。

この土地にも今年、農地の生産緑地指定の問題が起きている。税制改正で、この農地で後継者を含めて今後三十年間、農業生産を続けると確約すれば、土地課税は今まで通りタダ同然、この指定から外れると宅地並みの高い課税に跳ね上がる。この選択に当たって、練馬の四十七%の農家が生産緑地を選んだ。これで練馬の景観はまずまず、緑が保たれることになる。都市計画でも農地を下手に宅地にするより、緑地で残す方がはるかに将来性があると思う。これにはこの地の農協がしっかり活動していることが力になっている。練馬農協は今年、NHK日本農業賞を受賞した。私も一組合員であるともあれ田園は一度潰すと元へは戻らない。

あれこれ思いつつ、私は今日も練馬の野を歩く。定かには意識しないが、心の底にはやはり懐郷の想いがひそんでいるのかもしれない。

今 様 浦 島

大 野 す ズ 子 (山南町)

六十年ぶりに、初めて小学校のクラス会に誘われて帰った

のですが、どなたかわからぬ方も、面影のある方もありました。皆さま健康で明るく、生き生きしておられ、感激いたしました。一泊のクラス会でしたが、篠山郷土館や城跡の桜などを見学し、それに「餅投げ」にまで逢い、とても楽しい思い出になりました。

生まれ故郷は山南町上滝ですが、両側から山の迫った峡の細長い村は、すっかり豊かになりました。道がよくなり、家々は見違えるように快適になり、耕地整理で川の流れも、人々も変わり、私は今様浦島の思いでした。

変わらないのは山々とお寺、氏神の山口神社と豊かな自然でした。灼かなお宮は鬱蒼とした森の奥に社殿があります。鳥居をくぐり、何百年も経つであろう巨木の杉木立の中の高い石段を、やっとの思いで上がってお参りました。三、四人の村人が境内を掃き浄めておられました。十月の村祭りには、この境内に土俵がつくられ、子供相撲と大人相撲があり、そのあとはお供えの餅投げに人々の歓声が森にこだまして賑わうのです。その日は家に親戚の方々をお呼びしてご馳走を囲んだものです。この行事は今も行われているのでしょうか。参詣の帰り道、私は星花咲く陽だまりの青草の畔に腰をおろし、遠き日に甘藷堀りなどした山裾の畑を眺めながら、しばし陶然としていました。

宮沢賢治の「イーハタヴ」の世界を想い出し、煌めく透明

な空氣をいっぱい吸って生き返ったようでした。

幾枚かの田を隔てた向かいの山裾に、昔のままのお寺があります。幼いころ友達と、お釈迦さまの日に甘茶をもらいに行きました。お寺の厨の大釜に湯げの立つ甘茶を、それぞれの瓶に入れてもらったものです。素朴なあの行事に心躍らせた日がよみがえるのでした。

かのノルマンディーの丘の、うねりのような向日葵畑、見渡す限りの麦畑、葡萄畑の果てに沈みゆく夕陽に感動した与謝野晶子の「ああ五月、仏蘭西の野は火の色す、君も雛罌粟（ヒナゲシ）われも雛罌粟」とうたった句を想い出して懐きました。

悠々と流れゆく白雲を追っていると、ここ箱庭のようなふるさととは、私の二十年間の青春の想い出でいっぱいです。父母も、また戦死の兄も眠るこのふる里に、今日かぎり帰ることないであろうことを思い、そしてこの村の文化活動に生き生きと暮しておられる友の平和と倅せとを祈りながら、ようやく立ちあがり、心遣いをいただいた親切な方々に感謝して帰京したのでした。

今日よりまた独りの一日が始まるのです。知人も、クラスの友人も少なくなつて淋しくなりましたが、調布図書館主催のクラブ活動の一つ、文学散歩の旅と短歌の会の友達がたくさんでき、皆さんについてゆくのが精いっぱいですが、楽しく学ばせていただいております。

この騒然とした世の片隅で、慎ましく無器用にしか生き得ませんが、心安らかなるを願い、いくつかの病を持ちながら、周りの者に支えられつつ、一日一日を大切にしたいと念じております。

○

峠路の雪解くところ萌黄なしこぞり出でたる路のとうはや久びさの友が賀状に画きたる墨なる鶴の舞ふに見あかず濡れしごとと羽脈すじあをき蟬ひとつ風ぎし夕べの網戸にすがる蕭条と樹木に雨ふる草庵の石段険し息つき上る

風の吹く野にあれど枯草の温き中にしばし身を置く

トカゲひとつかすか音たて日のあたる落葉の下に姿かくしぬ風の吹く坂道に見上げたり樹木の枯葉のひかりつつ降る屋根を越す楓かえでもみじも夕つ陽にわが荒ら屋も燃ゆかとばかり

しんしんと雪降りしきる片隅に雪丸く積む古椅子ひとつみ祖おやらの回向いくたびなししかな昔ながらのふる里の寺

故郷探訪 “水分かれ” 周辺

池 上 亘 泰（氷上町）

昨春秋、義姉の病氣見舞いのため久しぶりに故郷を訪れた。

“氷上町石生”である。

国道一七六号線に「水分かれ橋」がある。この橋は古来から有名で「ハア丹波氷上の水分橋は見ればたいらな石の橋、なぜに流れが瀬戸内海と日本海とに変わるやらソレ」等と古くから歌われている。山脈の分水嶺なら各地にあるが、ここは日本一低い分水嶺ならぬ分水界である。標高はわずか九五メートル。

分水界に沿って流れる「高谷川」、この堤の上は桜並木が美しく川をはさんで両側に並んでいるので、通称「桜トンネル」と呼ばれている。この高谷川の水源となる石生奥山（標高五六九米）の麓に村の鎮守の神様「いそべ岬部神社」がある。久斯比賀多命（クシヒガタノミコト）というややこしい名前の神様が祀つてあるそう。子供の頃この周囲は松や杉の木にかこまれた静かな淋しい所で、肝試しには格好の場所だったが、今度行ってみて驚いた。お宮を中心にして、清流を配した人工滝、遊園地、集合場等を備えた一大公園に変容しており、立派な郷土資料館まで併設されている。その上マイカー族のため広大な駐車場もあり、まさにいたれりつくせりである。「約十億円の町費によってこの公園は作られました。石生としてはかつてない大規模な開発です。ごらん下さい、うしろの山々の緑とともに、ここから眺める氷上盆地の眺めは一級品ですよ、帰られたら郷土出身の皆々に一度は来るようにいうといして下さい。」資料館を見ながら宣伝された。

松茸、丹波栗、柿は石生周辺のかつての名産品であった。しかし戦時中の松の乱伐により松茸の生産量は激減した。丹波栗はどういうわけか小振りとなり、往年のおもかげはない。柿は若者の嗜好の変化に取り残された感じ、そこで代わって登場したのが日本一低い分水界を歌い文句の「水分かれ」であり、これを「イソベ」神社と結びつけて一大プロジェクトとなったのであろう。

高谷川を下っていくと柏原川に合流する。いや合流させられるという方が正しい。この高谷川は全く奇妙な川である。途中で流れが消滅する。田ん圃の中の溝になってしまう。地形上のいたずらだろうが、このおかげで少し大雨が降るとたちまちこの地区はハンランして泥沼と化し、農作物は多大な損害を被る。昔からいくたの対策が講じられたが一向に効力を奏さなかった。古い記事にもこの地区の治水事業のむずかしさを嘆いたものが見つかっている。近年、県の治水対策事業に取り上げられ、抜本的な方策が取られた。「この地区は昔湿地か沼地でした。地区で一番低いのが稲継で九十一メートル、上流の柏原が九十三メートルとほとんど平地に近く、このため水はけが極端に悪くなっています。これがこの地区の被害の原因です。しかしわれわれの手で今やこの問題は完全に解決されました。あれが柏原川との接点に設けられた人工水門で、水の水位を必要に応じて調整することができます。」

もう水害の心配はいりません」と関係者は説明された。なるほど、さすがに技術大國日本だ、地区もこの恩恵を受けた。しかし子供の頃小鮒等のジャコ取りに興じたかの川はなくなつてしまつた。

鳳翔寺（ホーショージ）にも行つた。桜トンネルの南約三百米の奥山の麓にある。一六八四年の竣工といわれ、京都宇治万福寺の系列の名刹である。寺院内には三百有余年の歴史を誇る巨大な桧がそびえ、本堂は昔のままの葺ぶきの立派な建物である。中学校の頃このお和尚さんの息子が同級生でよく遊びに行つた。戦時中もお寺には珍しい菓子があり、これが遊びに行くお目当でもあつた。「オッサン」（お和尚さんのことをこう呼んだ）は教育熱心でこの息子の自習によくお伴させられた。「よう勉強せにやアカン」とよくいわれたものだ。その息子は今、寺にはいない。

福知山線石生駅を降りると西側に低い山なみがせまつてゐる。南の方から城山、向山、愛后山、霧山とつづいてゐる。戦国時代には戦略上の要として天王山ともいえる要衝であつた。この山々は高くはないが、戦前には松茸の豊庫であり、十一月三日の明治節（文化の日）に山が解禁になり、学校の式が終わるとすぐ松茸探しにこの山に入つたものだ。また野兎が多くおり、小学校では秋になると兎狩りに行つた。山裾に生徒がこん棒を持つて一列に並び、かけ声をあげながら下

から兎を追ひ上げる。峰に網が張つてあり、兎がこの網にかまるといふ全く非効率な原始的な方法ではあつたのが、想い出としてはなつかしい。この山のド真中に横田と大崎地区を直接結ぶ自動車用のトンネルが開通した。駅の裏側の畑や田園は、このトンネル工事で出てきた土砂で埋め立てられ、住宅や工場が新しくできている。

兎追ひしかの山、小鮒釣りしかの川、なつかしい故郷も日本の経済発展とともに大きく姿を変えた。福知山線も電化され、かつて三時間ほどかかつた大阪までが一時間半と半分に短縮されている。また福知山までの複線化も懸案になつてゐるようだ。今度訪ねるときはどのようになってゐるだろう。一抹の淋しさをおぼえながら故郷をあとにした。

私の故郷

足立美都子（柏原町）

柏原は私の生まれ育つた故郷、九十三歳になつた母の住む町であり、夫とその両親の眠る里です。

年老いた母の手伝いと墓参を兼ねての里帰りは、六年前夫を柏原の墓地に納めてより二、三ヶ月毎に続けてきました。たまたま柏高同窓会の案内がありますと、会場が大阪周辺の

場合は里帰りの日程を合わせて大阪で途中下車、同窓会を終えてから柏原へ帰るのです。一月の同期会、三年毎の男女合同、女子のみの会、それに昨年より小学校の同窓会が加わりました。「お母さんは年に何回同窓会に出るのよ」と娘に笑われましたが、五十を過ぎると昔が懐しくなるもので、ましてやもう還暦、同窓会の出席率も年々高くなるようです。三年前、夏の同窓会で私が写したスナップを、写っている人達に送りました。もちろん全員ではなく三十人位だったでしょう。その中に偶然高校三年で机を並べた由良さんがいらつしやいました。そして写真の礼状と一しよに由良さんの主宰する「礫の会」の会誌が送られてきました。「短歌を作って見ませんか、一から教えてあげます」と書かれていました。夫の三回忌を終えた頃より、がんで逝った夫を詠んだものが二、三十首手元にありました。誰かに見てもらおうなどとは考えてもいなかったのですが、先生の方からお誘いがかかったのです。しかも同級生が先生なのですから一も二もなく入会いたしました。

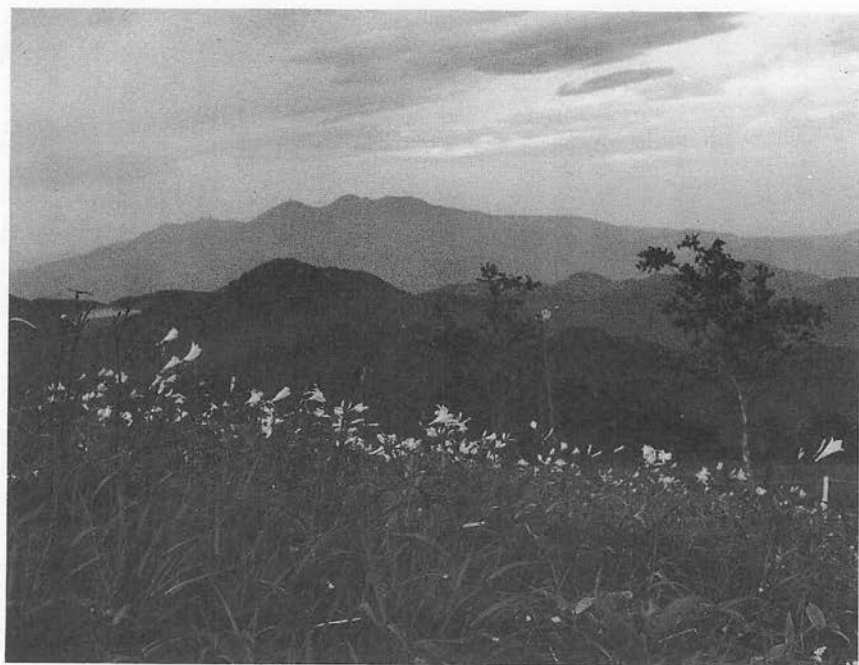
礫の会は神戸に本部を置く会員百名ほどの短歌結社で、由良先生が自ら添削指導をされています。支部は神戸、丹波、西脇、そして東京にもありました。東京は私を入れて五名の小さな支部で、郷友が一人もいらつしやらないのが残念ですが、東京の人達と短歌を通じての新しい友人になりました。

関西の支部には何人か同級生もいますし、丹波支部は私の故郷に住んでいる人達で、私は礫の会に入ることによって何十人もの友人ができました。作歌より友人を作りたい気持ちの方が強かったかもしれません。何はともあれ一生続けて行ける短歌にめぐり合えたことは幸せでした。

夫が転勤族だった関係で、北は仙台から南は鹿児島まで転々とし、社費で長期旅行をさせてもらったようなものです。柏原を離れて以来同じ所に六年以上住んだことがありません。仙台で社会学級の一員となって知り合った友人達とは別れて二十年近くにもなりますが、まだ交際が続いています。子供が大きくなつて子供を通じての交際がなくなりますと、自分から積極的に働きかけないと友人はできません。

同窓会には卒業後四十年近くも過ぎてからの出席でしたが、青春時代を共に過ごした仲間ですから、現在相手がどんなに出世されていても関係なく、昔の名前で呼びあえるのはうれしいものです。子供が四人、皆結婚して孫もおり、「おばあちゃん、おばあちゃん」と呼ばれて、それはそれで嬉しいのですが、いま春日部で一人暮らしの私にとっては趣味で知りあった人や同窓、同郷の友人が何よりもありがたい力となっております。

春日部市は東武伊勢崎線の沿線にあり、日光駅まで一時間半、東照宮、中禅寺湖、霧降高原等は格好の日帰りコースで



す。また秩父長瀬越生梅林等、カメラ片手に気ままに出かけては花の写真を撮ったり短歌を作ったりして一人旅を楽しんでおります。特に霧降高原のニッコウキスゲ（写真は去年七月に撮影）、越生の梅の満開の写真が撮りたくて毎年通っているのですが、まだ気に入ったのが写せません。

春日部での暮しも七年目に入りました。柏原を離れた田舎娘が、いつの間にか便利でにぎやかな町の暮しに馴じんでしまいました。高齢の母の身を案じながらも柏原に移り住むことのできない私です。

帰郷雑感

木内実喜夫（青垣町）



二月八日午後二時過ぎ、柏原駅に着く。東京から四時間半、随分便利になった。特に大阪から一時間少々というのは、全く驚きだ。子どもの頃、蒸気機関車で三時間近くかかったのが、まさに昔日となった。

ホームには間近にせまった厄神祭の提灯が並ぶ。駅舎が全

く新しくなっている。一見どこことなく西部劇を連想したが、すべて木造りである。「花の万博」の山の駅を移築したという。木や自然、いこいをテーマにした地域おこしを推めているところの玄関としてはふさわしいだろうが、周りの景観に溶け込むまでには、今しばらく時間が必要だろう。

各地でその土地の特色を活かした個性的な駅舎が生まれているが、里帰りの人にも、旅行者にとっても、旅の楽しみが増えるのはいいものだ。ただ、個性と調和を地域全体としてどうするかは視点も大切な気がする。

今回の訪問地、氷上町の西（葛野）小学校まで、田園の中のバイパスを走って十五分、これも驚く早さである。高校時代、雨の日も、雪の日も自転車を通った道は旧道になったようだ。

西小学校長の八木（白井）甫瑳子さんに出会うのは何年ぶりだろう。彼女は郡内初の女性校長として活躍中だ。さまざまな分野への女性の進出、活躍は大歓迎だ。ましてや同窓生となると、我がことのように嬉しい。

八木さんとは高校の同級生であり、幼なじみでもある。

彼女のご両親が、私の父とともに成松小学校で教職にあったこともあり、小さい頃から家族でつき合っていた。彼女の父君は大変な蔵書家であった。壁面という壁面が床から天井まで書物で埋まった部屋を今も覚えている。

今回、西小学校へ伺ったのは、PTAの皆さんにお話をするためである。主催者の方で「子育ての忘れもの」という演題をつけて下さった。すばらしい題名に負けて、私の方が話の中味を、いろいろ忘れてしまったような気がする。それにしても、恩師や友人、知人の顔が見えるのは話しくいものだ。

夕方、八木さんの案内で地域の変わりようを見学する。ゴルフ場も造られている。町営の宿泊施設が夕闇の小高い山ふところに見える。

最後に最近建てられたペンションを訪れた。高木克三さんと奥さんのモニカさんの経営である。奥さんの故郷、ドイツ・バイエルン地方に似た土地を探して方々を見て回り、この地を決めたとのこと。かなり広大な山野に手造りのリゾートの夢があるようだ。「この土地に決まったのも、何かの縁です」と語る主人の言葉には、この土地と人々への深い愛着が感じられた。すでに地所の中で、萱ぶきの民家や古い農機具の保存、再現も進んでいる。モニカさんはモンペ姿で有機農法の米づくりにも取り組んでいる。

大きな木造三階建のペンションは、どっしりとしたドイツ的な質実さがある。これを建てるに先だって、大工さんたちにドイツへ見学に行ってもらったそうだ。大きな広間には暖炉で明々と燃える薪のやわらかい暖かさが満ち、外に舞う粉

雪とすばらしいマッチングを見せていた。そんな広間で飲んだコーヒーのおいしかったこと。

「このブレンドは私の創作です。名付けてモニカブレンド」とご主人。奥さんの腕には、日本手拭のナフキンがあった。子どもたちは西小学校に通学し、家では四頭の馬の世話をする役割を負っている。

地域の人々との交わりも、最初は異文化との出会いのまどいがあったらしいが、今ではくらしの中の国際交流が進んでいるようだ。地域の人々にとっても、自分たちの生活や歴史を改めて考えたり、置き忘れてきたものを見直す契機となったりしているようだ。ささやかだが、地域に足の着いた、深い国際理解が育ちつつある。

夜は成松中学時代の同窓会だ。突然の集いであつたが、恩師二人と三十人の出席者で賑わつた。卒業以来四十二年ぶりの顔も多い。しかし、時間とともに昔の顔がよみがえる。孫の話も出てくる年令となつた。誰もが、それぞれの人生を生き抜いてきたいい顔をしている。

翌朝は青垣町の父の墓に参拝する。ピンと張りつめた丹波の冬の寒さが心地よく、昨夜からの淡雪が美しい。

少々時間があつたので、久しぶりに、谷川から篠山へ抜けてみる。一大聖地となつた「円応教」を見るのは初めてである。隣接するパルプ工場の煙突群が噴き出す煙と妙なとり合

わせである。

午後は神戸で高校の同窓会、七十人の出席者で、これまた大賑いであつた。サラリーマンにとっては定年前後である。この一、二年は人生の節目の時期だ。「定年後は、海外で暮らす」という友もいる。来年は卒業四十年、柏原で記念の会を開くことを約束してお開きとなる。今回の帰郷は、同窓会のはしごの旅でもあつた。

丹波柏原へのこだわり

加賀山次郎（柏原町）

人並みに、青雲の志を胸に、生地柏原を出てから早くも三十五年を経過した。その間、学生生活を送つた京都、会社勤めの東京、川崎、福山、横浜と移り住んだのであるが、その間に何千人の人に自分の出身地を紹介したことであろう。

残念ながら「兵庫県の柏原」が全国的地名でないため、例えば「東京です」とか「札幌です」のように一言で皆様にかつてもらえることは少なく、毎度色々と補足説明が必要となる。

「出身地は兵庫県です」というと、たいていの場合、「兵庫はどちらですか」と質問がかえってくる。兵庫県は南は淡路

島から北は日本海山陰まで、東は尾崎、神戸から西は姫路、相生までと内容多様で、地名としてアイデンティティがないようである。たしかに神戸、姫路、淡路島出身の人達とつきあっても、お互いに同県人という気持ち分けあうことは少ないようである。

従って、「兵庫県柏原です」ということになるが、たいていの場合これではすまない。

まず、「カイバラ」が通じない。「カシワバラ」という地名は頭にあるらしく、「カシワバラ」といえば実際にはわかってなくてもわかったような顔で話しが進むが、「カイバラ」といえば「それはどのへんですか」と質問が来ることになる。「かいばら」の地名の漢字が皆様の頭のメモリーに見つからないためらしい。

さて、この答えがむずかしい。一回で納得してもらえない「丹波篠山の隣りです」のようである。「丹波篠山」の位置、土地柄を知っていなくても、皆何となく納得顔になるから不思議である。

しかし小生の場合、次にくる相手のコメントで、当方の感情が害されるので、この答えは出来るだけ避けている。丹波篠山↓山奥↓山家の猿↓田舎者と連想され、これにからむ話題が次々と出てくるからである。

もっともこの答えには、最近になって新しい反応が出るよ

うになった。「桂文珍の出身地の篠山ですね」というのである。

これも相手が「桂文珍」先生をどう評価しているかわからないので、当方としても「そのようですね」とか極めてあいまいな返事をしてしまうことになる。

私がよく使うのは、極めて事務的に大阪からの道順で説明する方法である。

「大阪から福知山線の特急で一時間程の所です」ということにしている。

この説明も東京生まれの東京育ちの人には箱根の西には鬼が住むと思っている人も珍しくなく、大阪を通る鉄道は東海道線を知っているだけで、阪和線も奈良線も福知山線も知らないから、多くの場合追加説明が必要である。「大阪から北に向かい、福知山で山陰本線とつながる線です」ここでもまた、「北へ向かう」から山の中↓山猿と連想されそうときには、「大阪から八十kmくらいの所で、東京でいえば小田原ぐらいの所です」とつけ加えることにしている。

また時間に余裕があつて、少し威張つてもよい相手には、「柏原とはあの織田信長の末えいの織田藩のあつた所で、その城跡は今でもあつて、我々の小学校になっている」とやってみたりする。小説やテレビドラマで信長のことはよく知つていても、その末えいのことを知る人は少なく、己の知識の浅さを内心恥じるのか、納得顔で出身地の詮索は終わること

が多いようである。

また出身高校で説明するときには、「元首相の芦田均の出身校」と説明することもある。ただし最近では芦田首相の名を知らぬ人も多く、「昭電疑獄に関係して短期で辞めた首相」とヤブヘビの説明をするハメにもなる。

デカンショ節にかかわる変なコンプレックスから、出身地の説明に余計な苦勞をしているわけだが、考えてみると人口八〇〇〇人の町にしては、柏原というのは話題豊富な町ではないか。いま住んでいる横浜なんて街は人が多いだけで何をもって人に語れるだろうか。港も、外人墓地も、いま売出しのベイブリッジも、大都会の住民にとっては他所ごとであつて、そこで育つ個々の人間の心の支えとなり、誇りをもつて人に語るべきものにはなりがたいようである。

丹波の田舎の柏原よ、栄えあれ、ただし、開発とか町の発展とかいって、コンクリートとケバケバしい看板ばかり増えるのは勘弁してほしい。

父の三回忌を前に

岡本庄太郎（氷上町）

私の父、岡本憲太郎は、皆さんの中にも御存知の方もおら

れるかと思いますが、氷上町で現在、私の弟の喜八郎が経営している工場や、ボーリング場を創立した者です。

父は、八歳のとき祖父庄太郎と、また十二歳のとき父角治と死別し、それ以後、母のなかと共に家業（半商半農）を引き継ぎ、四人の妹達をそれぞれ嫁がせ、父も近所から私の母を迎え、長男の私を生みました。そして、父は「祖父のような徳のあるよい商人になつてほしい」と祖父・庄太郎の名を私の名としたということです。

父は、八歳になるまで、祖父庄太郎の感化のもとに朝夕、神仏にお参りしたり、食事の感謝をすることを教えこまれたようです。そういうわけで、父の口癖の一つは、「宗教心のない人間は、人のお面をつけた動物、犬や猫と同じである。宗教心を持ちなさい。朝夕、神仏を拝んで、感謝と報恩の生活をしなさい」と、私達は幼い頃から毎日のようにこの言葉を始めとして、たくさんのお話を聞きながら成長しました。

小学校に入り、文字が読めるようになると、今度はこの本を読みなさい、あの本を読みなさい、そして感想文を書いてきなさい、というふうに、広辞林（辞書）のような重厚な「立志奮斗物語」、この本は十数人の伝記をまとめたもの。また十巻も二十巻もある太閤記や三国志、そのほか多くの伝記等々どれも何百頁もある本を何冊も与えられ、全部読むのは大変でした。涙を流しながら読みましたが、得るところもたいへ



〈写真は父と私〉

ん多くありました。

父は十二歳で父を失い、進学を断念し、読書一本で独学をし、巾広い知識を身につけていたようです。書物を通して多くの先生に師事し、多くのことを学び、教えられたことを感

謝しておりました。また父は、夕食の時間が非常に長く、その間中、私たちに話し続けたものです。話の内容は自分の半生の苦勞話、戦国時代の武将の話、中国の昔話、政治、経済、宗教……等々。ここまでお読み下さった方は、私の父はほんとうに立派な人だったのだな、とお感じになられたと思いますが、私が申すのも恥かしいのですが、たしかに立派な父親でした。しかし父もまた人の子で、欠点や、短所、失敗も、数多くありました。

父は、事業を手広くやっていたので、出張や外泊が多く、帰宅のときには、行く先々の土産をよく買ってきてくれました。

ところが、帰ってくると母とよく喧嘩をしていました。何故母が怒っているのか、だんだんわかりました。父は行く先々に母以外の婦人が何人もいたのです。その噂が母の耳に入るものですから、父が帰宅すると喧嘩が始まるわけです。

私は子供心に、これはよくない、私はこの父のようなことをして家庭を暗くしたり、妻や子供を泣かせたり、困らせてはいけない、父のようにはなりたくない、と思うようになりました。いわゆる反面教師というのでしょうか。

ところが、私も、中学、高校と進むにつれ、異性に興味を持つようになり、A子さんはここがいいな、B子さんはあそこがいいな、C子さんは……というように、何人もの女の

子が好きになつてゐる自分を見出ししました。やつぱり蛙の子は蛙だ。自分も父のように、大人になつてお金と暇ができる、一人の奥さんでは満足できず、次々と女をかこうようになる。父以上のことをやる可能性があることを感じ始めました。「父のようになってはならない、なりたくない」と思う自分に、父よりも悪くなる可能性があることがわかり、私は自分に失望し、十七歳で行きづまりました。

そのころ、私は高校の近くの柏原町の木ノ根橋の傍にあつたキリスト教会（日本伝道隊・柏原伝道所）のバイブル・クラスに出席していました。イギリスから来日された宣教師のミス・マコーミック先生が、英語で聖書のお話をして下さいました。そして話の中で、ときどき「人間は皆罪人です」といわれました。そのたびに私は心の中で「いいえ、私に罪はありません、私は模範青年です」と答えておりました。

しかし、自分に失望し、行きづまりを感じるようになった私は、ついに素直に「私は罪人です」と、自分の罪を認め、告白しました。まだ行為となつて出ていませんが、心の中にある罪の卵を発見し、それを告白して、イエス・キリストを救主として信じ、受け入れ、クリスチャンになりました。

それから四十年が経過しましたが、父の過ちをくりかえすことなく、守られていることを感謝しております。父が亡くなつて二年になりますが、父の良いところ、父から受けた良

い教訓は忘れることはないでしょう。また子供や孫達に伝えて行きたいと思つております。

我が家より眺めた鎌倉の空

足立誠一（青垣町）

「お母さん、ちよつと来てご覧、富士山がとてもきれいだよ」と妻を呼び、外の風景を楽しむことのできる鎌倉に安住の地を求めたことに、今は大きな喜びを感じている。

七年前、東京文京区の千駄木より移転し、ここ鎌倉山の高台に居を構えた。妻は東京生まれの東京育ちで、都会の便利さに馴れているせいか、初めのうちは何かにつけて不満もあつたようだが、今はこの地の風景のすばらしさに不満も消え、鎌倉の名所古跡などの見学に余暇を楽しんでいるようだ。

「お母さん、富士山にかき雲ができたよ。明日は雨かもしれないね」

「そう、明日雨なの」

「だつて富士山にかき雲がかかれば、雨になるというもの」

「そうかしら、でも、かき雲つて珍しいね。あの富士の横の山は？」

「あれは箱根の二子山だよ。それからうつと左が天城山



脈、あの高い山が天城山、その下の半島の先が下田市だ。すばらしい眺めだな。こちらに大島が見えるし、その先の小さく三角に尖った島が三宅島だよ」

「ほう、ずい分と遠くまで見えるのね。海もきれいだし、江ノ島もすぐそこに見えてとてもいい景色ね」

「夜の江ノ島のネオンもいいけれど、夕日の色は何ともいえないよね。雲がまっ赤に燃えて波に映るところなど、東京のみんなにも見せてあげたいね」

「夕日の沈むときの早いこと、私、初めて見たわ。あつという間に沈んでしまうんだもの。それに沈む位置が一年中ずいぶん違うのね。東京ではいつも同じ場所に沈むものとはかり思っていたのに。」

富士山の右から天城山の右まで移動するのね」

「雲を見ていると一日飽きないね。いつもいろんな雲が浮いている。とびがピューヒヨロ、ピューヒヨロと舞うし、庭にはリスがやって来る、うぐいすが来る、めじろが来る、名も知らない野鳥が来る。借景を楽しむのは金もかからず一番いいね」

こんな対話ができるのもこの地に来てからである。

二月にフキのとうが家から一分足らずのところで摘める。

三月には、すぐ近くでセリ摘み、四、五月頃には木の芽、あけびの芽、たらの芽摘みと田舎育ちの私に田舎のことどもを思い出させてくれる。四月の桜は家の前が名所になっていてとてもきれいだ。夏は江ノ島海岸の海水浴、歩いて四十分ほどで健康にもよい。

人生の春を、老境になってから楽しむことができるのは、私のしあわせと喜んでいる。おかげさまで今は、風邪ひとつひかないで毎日が楽しく、今もって会社に出勤している。会社から疲れて帰っても、心身ともに癒やしてくれる土地だ。あゝ、すばらしい我が住家、鎌倉の空、毎日が感謝の心でいっぱいである。

☆

大自然に溶け込んだ三陸の日々

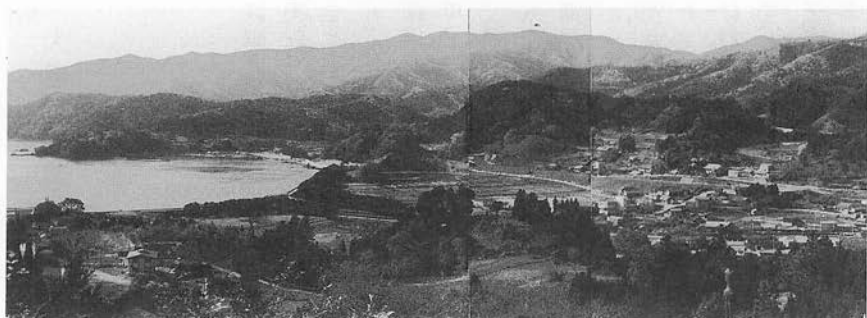
野村 節 三（山南町）

「このあたりは、むちゃくちゃに書くほど正しい」。これは終戦直後の昭和二十一年、県立柏原中学校へ入学した当時、担任になられた徳田武夫先生（故人）の日本地理の授業でのことで、このあたりとは三陸沿岸を指していました。諸先輩もご存知と思いますが、当時の柏中には個性的な先生が多く、徳田先生もその一人でした。今にしてみれば、少々乱暴な表現でしたが、この三陸海岸は誰でも地図なしでは書けないほど複雑に入り組んだ、珍しいリアス式海岸ですから、無理からぬことでした。三陸地方といえば、暖流の黒潮と寒流の親潮が合流する日本三大漁場で、沖合に日本海溝を控えて、昔から地震が多発し、特有の地形から何回も大津波（以前は大津波^{かいしん}）に遇い、さらに大凶作による飢饉などの悲惨な過去があったことを知っていた程度でした。当時、「みちのく」三陸は丹波からあまりにも遠く、その気候や風土も知らない異郷で、私はむしろ三陸に暗いイメージを持っていましたから、それから三十年後に、家族と共に通々この三陸へやって来るとは夢にも思わなかったのです。

私は大学を卒業後長年、東京にある微生物の研究所で抗生物質の仕事に専念していましたが、この研究所を母体として創立された大学も兼務していました。その後、水産微生物学の教育と研究に夢を託して当地へ赴任したのです。

昭和五十一年の真夏、当時はまだ新幹線もなく、上野から東北本線の夜行に乗り、一ノ関で乗り換えて終点の盛^{さか}まで、新任地への期待と不安が交錯していつになく北国への長い汽車の旅でした。しかし、翌日車窓から緑の山々を背景にして、紺碧の海が太平洋へと広がる三陸海岸を初めて眺めたときは、それまで自分が持っていたイメージは消え、夢の「理想郷」を現実に見たような思いがしました。「百聞は一見に如かず」とはこのことで、静かな奥深い湾内に浮かぶ養殖漁業の色とりどりのブイとその間を往きかう漁船や、山間に点在する民家と清潔な町の佇まいを見て、この地方特有の雄大な自然に溶け込んだ人々の生活に、悠々とした落ちつきが感じられたのです。

三陸地方は本州最東端に位置して、南は牡鹿半島の金華山から北は八戸まで、およそ二百八十キロメートルの長い海岸線が続き、そのほとんどは四国とほぼ同面積の岩手県で、陸中海岸国立公園になっています。宮古以南（南三陸）は太古に北上山地が海に沈下して、十キロメートル以上湾入したところも多く、「海のアλπス」といわれる典型的なリアス式海



岸を形成しています。一方、宮古以北（北三陸）は海底が隆起して、百〇二百メートルの断崖絶壁が延々と続き、陸地は海岸段丘といわれる広大な高原地帯で、その雄大な景観は多くの人に強い印象を与えています。またこのあたりには、特有の地形と地質が成因となった龍泉洞^{りゅうせんどう}や安家洞^{あつかどう}など日本屈指の洞窟や恐竜時代の化石産地もあり、美しい琥珀^{ほくろ}（日本唯一）やマンガン鉱（バラ輝石）は装飾品として特産物になっています。また、柳田國男先生（兵庫県出身）による民俗学の基礎となった『民話のふるさと』遠野も三陸からは近く、訪れた人はしばしば幽玄の世界に誘われます。

南三陸のほぼ中間にある三陸町は海洋気象に影響されて冬も比較的温暖で、ツバキやニホンシカの北限になっています。シカの外、時には天然記念物のニホンカモシカも道路近くや大学構内にも現われ、キツネ、タヌキ、テンなどに会うこともあります。クマもかなり生息していますが、幸い私は出会ったことはありません。

しかし、何といっても日本有数の漁業を抜きにして三陸は語れません。この沿岸の魚種（サケ、マグロ、ハマチ、カツオ、サンマ、イワシ、ヒラメ、カレイ、スズキ、イカ）と漁獲量は多く、湾内では増養殖（アワビ、ホタテ、カキ、ホヤ、ノリ、ワカメ、ギンザケ）も盛んで、正に海の幸の豊庫となっています。

山間部では至るところに溪流があり、ヤマメ、イワナ、中流にはアユの魚影が濃く、釣り人にとっては絶好の場として全国に知られています。また、四季折々の山の幸（ワラビ、ゼンマイ、タラ、シドケ、キノコ）にも恵まれ、これら自然の産物が素朴で面白いこの地方の人々の生活を潤しているのです。

一方、三陸には気象庁高層気象ロケット観測所、文部省宇宙科学研究所三陸大気球観測所、東北大学三陸地殻変動観測所が設置され、私が勤務している大学の水産学部と共に科学の町となっていることも特色の一つです。

このような三陸へ定住するようになって以来、大学では微生物学の教育と魚類の病原菌や海洋微生物の研究に明け暮れて、早や十五年が過ぎましたが、卒業研究生やクラブの学生達との交流の中で、コンパ、バーベキューやキャンプ、それに釣りなど当地ならではの余暇も楽しんでいます。また、休日には家族でドライブを兼ねて、「みちのく」の自然と歴史、民俗や産物などを探訪しています。

こうした自然に溶け込んだ三陸生活を通じて、多くの地元の親しい知り合いができたことも幸です。時間が許す限り、地域社会のためにも微力を傾けたいと思い、種々の会合や行事にも参加して、三陸人になりきった毎日を送っています。時には気の合った人達と地酒を交わしながら、話に花を咲か

せるのも楽しみの一つです。このような交際の場で必ず出る話題の一つに、これからの地域社会の有り方があります。それには産業や観光の振興、教育、文化、医療の向上など多くの課題が残されていますが、結局は地方特有の自然や産物をより有効に生かし、都会地との流通を密にして、しかも、自然と調和した特色ある地域社会を築くことで、それが真の「理想郷」への道ではなからうかと思っています。

かつては「陸の孤島」とまでいわれた当地も、今では新幹線や高速道路など交通網も整備され、産業とリゾートが融合した新しい地域へと変身しつつあります。昭和五十九年に開通した日本で初めての第三セクターによる三陸鉄道もその一つで、モダンな列車がリアス海岸を縫うように走っています。最近、三陸では沿岸が一望できる夏虫山高原で、全国でも珍しい養鹿事業が始められ、野趣豊かな鹿肉も当地の味覚に加わりました。また、この夏には「三陸・海の博覧会」も開催されますので、会友の皆様もこれを機会に当地へもおいで下さい。大自然の景観と数多くの海と山の幸が訪れる人々を待っています。

最後に、郷友会の益々のご発展と会友諸氏のご健勝をお祈りして、三陸だよりを終わります。

ジャワの日々から

上野重喜（永上町）

インドネシアで三度目の新年です。平成元年十一月にインドネシアはジャワ島のジョグジャカルタ（一般にはジョグジャと略称）という都市へ移りまして、あつという間に満二年が過ぎました。常夏の国では、四季がないので時間の経つのがわかりません。こちらは季節といえば乾季と雨季のみ、年中日本の真夏の暑さですが、乾季にはほとんど一滴も雨が降らず、雨季には毎日のように大型の夕立ともいえるスコールがやってきて、実に爽快でもあります。

インドネシアにとって、日本は輸出・入とも最大の相手国、たとえば私のいるジョグジャでは、自動車は九九%、オートバイは一〇〇%日本製といつていいでしょう。インドネシアの人々にとって、日本は金持ちの豊かな国、憧れの国です。日本に関心が深く、テレビでは日本のニュースが流れない日は、まずないといえます。天皇、皇后、首相などの名前は、ほとんどの人が知っています。「おしん」の放送が去年までであり、大変な人気で、日本人が街を歩くと「オシン、オシン」と呼びかけられたものです。ジョグジャの町にも、「OSHI

N」という名の店がすでに二軒もあるほどです。

これに較べて、日本ではまだまだインドネシアのことが知られていません。そこで日々生活の中での見聞をまじえて、インドネシアについて少々記させていただきます。

〈国〉 日本で、こんな落とし話があると聞きました。お嬢さん同士の会話です。

A「あなた、インドネシアって知ってる？」

B「いえ、知らないわ。だって私、海外はバリしか行ったことないもの。」

南海の楽園として世界的な観光地バリ島は、世界一の群島国家インドネシアのほぼ真中にある島です。インドネシアは、スマトラ、ジャワ、カリマンタン（ボルネオ）、スラウェシ（セレベス）、イリアンジャヤ（ニューギニアの西半分）の五大島をはじめ、大小一万四千近くの島からなる大きな国です。東の端から西の端までの距離は五千有余キロ、アメリカ合衆国の東西両端間、あるいはイギリスからイランまで行く距離に相当します。種族、言語の数も三百を超えるでしょう。人口は一億八千万、そのほぼ六〇%はバリの隣のジャワ島に集中しています。首都ジャカルタは、東京なみの大都会、私の住むジョグジャはジャカルタから東へ五百キロ（飛行機で一時間）、インドネシアの京都といわれる古都で、いまま王家が栄えています。人口はジョグジャ特別区として三百万、

市域は七十万程度といわれます。

インドネシアはオランダの植民地として三五〇年、太平洋戦争時は日本の占領下で三年あまり、戦後独立しました。独立するにあたってはオランダとの四年間にわたる抗争がありました。初代の大統領は有名な故スカルノ、現在は二代目のスハルノ、この政権がすでに四半世紀続いています。それにしても、人口がいまや中国、インド、アメリカに次ぐ世界で四番目の大国ですから、統治も大変難しいと思われますが、いまのところは治安も良く、まずは安心して住める国です。

〈食〉 赤道直下にあり、熱帯雨林の名のごとくここは緑豊かです。食糧にもなり油もとれる椰子の実が年中なり、特に十月から三月までの雨季は果物が豊富です。ドリアン、マンガ、マンゴスチン、パイア、アボガド、ランブータン……とにかく、いろいろありまして果物好きの私には天国です。

米は一つの田で年に三回収穫可能で、いつでも田植えと稲刈り風景がみられますが、実際は年二回の米作、あと一回は砂糖黍とか豆類などを作って地力を保っているようです。米はいわゆる外米のようにパサパサしてなくて、比較的、日本米に近く、少なくとも私はほとんど異和感を感じません。

野菜類はこれまた豊富。ホーレン草は見かけませんが、葱、白菜、人参、胡瓜、茄子、トマト……なんでも手に入り、新鮮で美味です。

肉は、地元の主流はニワトリです。牛肉は地元のものではなく、スキヤキ、シャブシャブにはニュージーランド産を買わなくてはなりません。やはり牛肉はわれらがふるさと丹波但馬が世界一ではないでしょうか。インドネシアは九〇%がイスラム教ですから、このひとたちは、豚肉は絶対食べません。代わりに山羊の肉をよく食べます。

戦時中に育った私は、好き嫌いがないので何でも食べますが、青唐辛子の辛さと椰子の油は少々苦手です。インドネシアの食堂で注文するときは、ナシ、ゴレン（やきめし）かミールゴレン（やきそば）を頼めば、まずは日本人にとって無難とはよくいわれることです。しかしこれらはもともと中国から入ってきたものではないかと思えます。魚は海岸では豊富ですが、残念ながらジョグジャは内陸にあるので、生魚は敬遠しています。エビ、イカは本場とっていいでしょう。特にエビは各種豊富で、大半は日本へ輸出されています。

豆腐は庶民の安くて栄養ある蛋白源、ほかに大豆食品としてテンペ（tempe）という見掛けはハンペンのような独特の健康食品があります。

パッソ（bakso）は、肉や魚の団子、ちょうど「つみれ」のようなもので、これまた庶民の好物です。そのほかトンセンという山羊肉を甘辛く煮込んだ汁料理、ジョグジャの名物グデツなど地元料理も多彩、香辛料を多用します。

〈衣〉 バティック（ジャワ更紗）は、あまりにも有名です。もとは王宮御用から発達したのですが、実に手間ひまのかかるローケツ染めです。細かく手の込んだ作業を毎日続けて三カ月、半年かかるものも珍しくありません。日当百円程度で十分人手が雇えるからこそ可能な産業です。

男性は長袖のバティックシャツを着れば正装になります。女性にはジャリツ（jarik）という長い巻きスカートに長袖、肩にスレンダン（selendang）という帯様のものを掛けて正装とします。民俗衣装は、いずこの国にしろ長年の知恵が生み出したその民俗の体型に適った美しいものです。

インドネシアには多種の種族がありますから、地方地方でさらに異なった多彩な衣裳があり、結婚式などには、特に出身地独自の伝統衣装を纏うのでそれは楽しいものです。

ジャワはとにかく人類最古のジャワ原人のふるさとですから、考古学、民俗学、歴史、伝統文化に興味のある方には、研究素材の宝庫といえます。

〈くらし〉 ご多分にもれず、ここインドネシアでも急速に工業化、都市化が進んでいます。しかし農業人口がまだまだ多いこの国では、村の掟やしきたりが人々の間に根強く残っています。特に、かつて日本の統治下にあったころの風習もみられ、複雑な心境になります。

たとえば「隣組制度」。農村地帯を中心に日本が戦時中に残



した隣組が確固として生きています。ゴトン ロヨン（相互の助け合い）は、インドネシアで最も大切なことの一つですが、これは隣組が中心となって進められています。日本の昔の農村とまさに同じで、結婚式、葬式、家造り、村の普請、道や溝の清掃など、人々がお互いに助け合って行います。結



婚式はかなり派手で、少々の金持ちなら千人あるいはそれ以上の客を招くのが通例です。田舎の村から村中の人々が集まり、舞踊や影絵芝居の演芸も加わって明け方まで賑わいます。花婿が生卵を素足で踏みつぶし、その汚れた足を花嫁がひざまづいてきれいに拭くことによって従順を誓い（写真）、一方花婿はお金と米を混ぜて花嫁にわたして経済的な責任を約束するなど、いくつかの儀式があり興味深いものです。

〈写真の花婿・花嫁は私の運転手夫妻。こちらでは質素な結婚式でした。右ページ下の写真は結婚式の行列〉



インドネシアの人々は、通常朝は四時ごろに起き水浴、お祈りをし、家のまわりを掃き清め洗濯など、一通りの家事をすませたあと朝食をとります。一年中、真夏のこの国では、朝が一番涼しく爽やかで仕事に運動に最適の時です。暑い昼間は適度にペースダウンをし、夕方からまた活気を取りもどします。熱帯の人々の生き生きとした生活ぶりに触れたい方は、朝四時から七時ごろまでの人々の活動を見るべきです。

インドネシア人は総体にきれいで、最低、日に二回とすには三〜五回水浴をし、そのたびに衣類を取り替えています。下着まできちんとアイロン（炭火のも多い）をかけます。洗濯だけでも家庭の主婦は大変だろうと思われませんが、少し余裕のある家では、お手伝いを雇っています。日本人の場合、通常、運動手一名、メイド二名、ボーイ一名を雇うというのが標準でしょう。ジャワ島は日本よりも遥かに人口過密で就職難のために人件費も安く、貧富の差が大きいという問題を抱えています。しかし、着実に生活レベルは上がりつつあり、活気のある国です。

産油国であること、資源と人間が豊富なこと、インドネシアは未来へ向けて大きな可能性を秘める大国です。

目下、私はインドネシアの放送職員の訓練にあたっており、優秀なスタッフが次々に育っていくのが、楽しみです。

ジョグジャへは、昨年、天皇・皇后両陛下もみえました。バリとともに、ジョグジャを訪れる観光客は日増しに多くなり、一流ホテルは日本人で溢れています。

インドネシア人と結婚している日本人の方、旧日本軍人で終戦後もこの地に残留している方、旧日本軍人を父に持つインドネシア人……さまざまなたとの交流の中で、さまざまな貴重な体験をさせていただいている毎日です。

日本は経済的には世界の一流国になりました。しかし国際協力の人材という点では、私も含め、まだまだ人材難です。

丹波ご出身のかたの中にも、インドネシアに詳しく、お教えを乞うべきかたが多数いらっしゃるかと存じます。よろしくご指導のほどお願い申し上げます。インドネシアにいるとはいえ、まだ、たかだか二年余り、しかも中部ジャワの一都市のみでの私の生活体験です。インドネシアの国是に「多様性の中の統一」というのがありましたが、きょうは、インドネシアの極く一部分のみを記させていただきました。

一年の任期を二度延長しまして結局三年インドネシア勤務です。この十月には任務を終えて帰国いたします。郷友会で皆様にお会いできるのを楽しみにいたしております。

ご一同さまのますますのご健勝とご発展を、遥か赤道の彼方よりお祈り申し上げます。

故郷の恩師と友達

村 上 善 英（柏原町）

「人間は、二歳半ばかり十八歳までの間に、物質的な世界や自分の能力、他人の性格、そして自分と他人の心の動きまでを、それ以降の人生におけるよりも、はるかに多くを学びとる」(サー・ブルーム)

「三ツ子の魂、百までも」

十八歳の春(昭和30年)、私は急行銀河の三等寝台にゆられながら上京した。このことはその数ヶ月前までは考えてもいなかった。百姓の総領として生まれ、当然柏原で農業を継ぐ身であつたのに、恩師や友人達の感化と励ましを受け、大学に進むことになつて東京へ出た。三十数年前のことです。それ以降都会(東京、大阪、神奈川)に住み、氷上郡や柏原は故郷の名と化した。年に二、三回は帰省するが、一週間以上滞在することはない。小川村出身の妻(旧姓深田由紀子)がいるので他の人よりも少し多いかもしれないが、家業は弟が継ぎ、自分は本籍のみ残すことになった。自分の意志や思考ではなく、流れて何となくそうなった気がする。

玉峰山瑞光寺(柏原町本町)の故幸塚則乗和尚は、私の人

生最大の恩師である。生家が寺の真裏にあり、和尚の説経、木魚、尺八の音で眠覚め、境内、庫裡、大屋根、大木が遊び場で、和尚の説教も聞かずヤンチャ、ゴンタばかりして困らせていた。昭和20年の暮、祖父(善太郎)の死を境に和尚の話に耳を傾けるようになった。「人間どんなに生きても死ぬまでだ」「草木石にも魂はある」「人間独りでは生きられぬ」「聞くは一刻の恥、知らぬは一生の恥」「一所懸命」「約束は果たせるかどうかをまず先に」「井の中の蛙大海を知らず」長じて「人間は考える葦」「則天去私」の意味などを、和尚の体験を交えてわかりやすくお話し下さったものだ。「井の中の蛙」この言葉が多感な私の進路を大きく変えたといつても過言ではない。和尚の胸沢大での勉学交友等の話も東京へ出る氣持になった一つかもしれない。

在京中に二人の叔父(弘一・秀夫)、大叔父(松次郎)、父(善次)の死に遇つたが、葬儀や法要の都度暖かい言葉をかけて下さり励まして下さった。読経終了後に吹いて下さる尺八の音は、今でも耳から離れない。「人間死んでから、その人の生きた価値が決まる」このお説教も私の心の糧となった。和尚が大事に使用されていた「萬福多幸」の署名捺印のある扇子を「日本に一本しかないがネ」と私に賜つたのが永遠のお別れとなった。

さて柏原高校時代。校長は後藤英太郎先生と植杉英之助先

生。担任は三年・西山壮太郎先生、二年・荻野辰雄先生、一年・石岡先生。

高校時代勉強した記憶がなく、熱中したのは籃球（バスケットボール）である。練習が終わると田畑へ直行、農作業を手伝うことが高校進学の条件だった。家から学校まで徒歩七分、自転車や汽車で通学してくる学友がうらやましかった。

籃球部は全く弱かった。三年間攝丹地区でも三田学園、篠山高校には全く歯が立たず、有馬高にチヨボチヨボ、篠山農にやっと勝てるくらい、県大会でも灘高に一回戦で敗れた。

母（正子）が通学していた時代には柏原女学校は県代表で東京大会へ出たとも聞かされた。何とか強くしなければと竹田村、久下村等の中学校へ行き、入学したら入部して下さいとPRしたものだ。卒業後に籃球部も強くなったと聞いてうれしく思った。バスケット部の同輩には梅垣宏君、磯尾寛治君、坂上彊君、大野均君、細見多恵子君が三年秋まで一しよに活動した。本田啓右君（故人）、丸川健三郎君、吉見保君は途中で退部したが、屋外コートの敷き直し、ローラー引きなどした懐しい友達である。梅垣、大野、本田三君とは東京で再会でき昔の話をしたものだ。部の先輩で百木雅嵩氏（故人）井本義一氏には東京でもお世話になった。

また竹刀部を創立しようと松尾源三先生（故人）、北川享夫君（故人）と早朝六時半に旧女学校体育館で三人練習デモに

励んだこともあった。

遊んでばかりいた私だが恩師友人には恵まれていた。担任の三先生には学問よりも実教育を指導していただき、漢文の葛谷先生にはよく叱られたが可愛がっても下さった。同級生達が進路を決めているのに自分は何も考えていなかった。そんなとき進学を決定づけたのは葛谷和尚の一言だった。「大学って何だ。勉強して一体何になるんですか」の私の愚問に、先生は「大学とは高校までの教育で一人前になれなかった者が行くところだ。学問はするが勉強する所ではない。全国から集まった人間の中から自分の一生涯つきあえる友人を探す所だ。人間としても視野を拡げる所だ」と。このままでは本物の「井の中の蛙」になってしまう。進学したい!!、反対する親・親戚を説得し、落第したら家業を継ぐのを条件に、両親が折れてくれた。東京へと向いたのは、全国から多勢の人が集まるという単純なものだったが、何度も相談に行った西山、荻野両先生（早稻田大）や幸塚和尚（駒大）との会話、親類の小林弘さん、上野重喜さんが大学生でおられたことも（知人のいない東京であったが）心強く影響したと思う。

高校時代の師で忘れられない先生として、生物のアチャコ先生、歴史の柿原先生、英語の芦田先生、物理の松本先生、地学の家島先生には多大の恩恵を受けた。バスケの林先生には弱い部の指導で大変迷惑をかけた。

柏原中学校時代。川崎校長（日本史）、曾我祐一（3年）先生、村上彰（2年）先生、谷口チエ（1年）先生、藤本正也（社会）先生、岡崎（英語）先生、波多野（体育）先生がすぐに浮かんでくる。村上、藤本両先生は先年、数年毎の中学同期会で再会し、中学時代の想い出話に花が咲いた。入学したとき中学校には校舎がなく、旧柏原女学校と小学校の一部を借りていた。夏休みは新校舎の建設に駆り出された。材木運び、屋根へのドロあげ、瓦運び等、秋の入学に間に合うようにと労務の提供であった。二学期の始業は屋根はあるが、ドア、ガラス戸なし、風が吹くと腰板が鳴るという未完成校舎であった。運動場も粗造成で姿をなしていなかった。排水工事、石拾い、法面の芝つけまで生徒の施工であった。実家から道具を持ち出しては作業した。この工事中忘れられないのが岡崎先生である。炎天下、チヂレ髪にネジリ鉢巻で、ドロ練りから資材運び、鳴板直し、石運び等々、「早く校舎を完成させたい」と遅くまで我々を指導された姿は、今でも目に浮かぶ。一度だけ同窓会でお目にかかれたが、今は故人となられた。

藤本正也先生とは自転車旅行を通じて社会科の真の教育を肌で体験させていただいた。柏原―大江山―由良川―玄武洞―天の橋立―城崎―日和山―豊岡―和田山―柏原のコースを、同級生十人と三泊四日で自炊しながら共に行動した。自転車

は荷台付きの中古車であり、道路は舗装されておらず土道である。パンクパンクの連続で、田中孝夫君（自転車屋の子）の手で直し直し走った。予定の宿泊所へはたどりつけず、月明りを頼りに走り野宿するなど散々であった。途中進路を間違えたりしたが、予定の日には全員無事に柏原へたどりついた。十代半ばのガキ連中を引き連れ、社会教育とはいえ大変だったと感謝せずにはいられない。

中学校舎新築の手伝いは、私が建設業に身を投じる礎となつたのかもしれないし、自転車旅行は未知の世界を知る興味を身につけてくれたようである。

三年担任の曾我先生には非常にお世話になった。高校へ進学できたのは先生のお蔭である。中卒で農家を継ぐ私に何かと肩入れして下さい。「新憲法の中にもある。事情が許せば高校教育を終えてからでも遅くはない」と、再三にわたり我家まで来て両親を説得して下さい。その後神戸へ行かれて会う機会がないが、お目にかかってお礼も云いたい。

学校の師ではないが、生長の家の布教師伊藤五郎先生がおられる。中二の六月、母が病に倒れて医者から見放された。回復を宗教に求めた母をつれて石田の公民館で師に接した。法話は何も覚えていないが、終了時に全員で斉唱する歌だけは覚えている。「私は一体何をしにこの世に生まれてきたのやら……、この世で一番適当な姿^{カタチ}となつて……みんなのために

働くぞ、うれし楽しい、ありがたい」。

今青少年指導員として神奈川県横浜市の非行青少年防止のボランティア活動が勤まっているのも、このとき受けた影響からかもしれない。

中学校の友人達との親睦は高校よりも奥が深い。柏原町と新井村の出身者だからかもしれないが、数年置きに同級生が集まっている。紳士淑女ぶって集まってくるが、会場に入ると「幼な馴染の思ひ出は……」になって何のテライやワダカマリもない。常にいたわりと励ましの会となる。平和と平等の世界である。「東京がイヤになったら、病気になるったら帰ってこいよ。何とかしてやる」と気軽に声をかけてくれる。つつが無きや友垣……。

嗚呼、青垣の山に向かいて

足立正美（青垣町）

青垣町佐治、氷上郡でも山西北区と呼ばれる山奥が私の生まれ育った所である。平野部の成松、石生、柏原中学校には野球、卓球の対抗試合で一度も勝てなかった悲しい記憶がある。しかも成松中は物資不足の昭和二十四年、五年頃に大人用で中古とはいえスパイクを使用、我が佐治中は草履か擦り

減った運動靴。加えてキリキリ舞いさせられた豪腕ピッチャー梅田の名前は、四十数年経た今も忘れない。そのときの弁当は祖母の作ってくれた、こうこ（沢庵）巻き。当時はまだ贅沢な食べ物だった卵焼きを具に巻いたものと見間違えた先生の視線、後ろ向きに避けた出来事は、遠い昔のことのようにも、昨日のことのようにも思う。

第三校舎と呼ばれていた柏原映画劇場への出席が、本校舎への出席率より良かったとはオーバーだが、「青い山脈」「羅生門」等々に魅せられ、手塚治虫の漫画を真似、江利チエミの「テネシーワルツ」にショックを受けた柏原高校時代。あの頃の入場料はどうしていたのか、今だに思い出せない。

中学の頃、破れた角帽、黒マント、ホウバ下駄のバンカラ学生を初めて見た。帰郷していたのか旅人だったのか、校庭に現われ去っていくまでそう長い時間ではなかったが、彼の一挙一動に釘付けになり、角帽に胸が高鳴った。早稲田の学生と知ったのは後のことだった。受験勉強などとてもできる状態ではなかった百姓の三男坊、そのうえ勉強嫌いの私が、二浪の後、長い間懂れていた角帽と、唯一好きだった「美術」という学科名で志望した早稲田大学の校門を潜った。

ところが、美術科とはいえ実習ばかりではなく、哲学原論、仏語など存在すら知らなかった教科を学ぶことに、さらに全国各地からの言葉も価値観も違う学生集団に直面した驚き！

貧乏学生は、明日からの生活費のために、まず色々なアルバイトに精を出さなければならず、学問より社会学の方がしつかり身についた。四年間は矢の如く……。

テレビの本放送に伴い大量の要員を必要としたNHKがTVデザイナーとして私を採用してくれた。テレビ界は白黒からカラーへ、御成婚、東京オリンピックと、業界を揺るがす数々のエポックを通過、私のNHK生活三十二年も運命を同じくした。転勤で、三十代後半の四年間を広島、四十代後半の三年間を松山で過ごした。丹波と東京以外の生活は初めてであった私にとって、広島では原爆の酷さ、戦争の恐ろしさを肌で感じ、自己の無知を恥じることになった。一方、温泉が街のあちこちにあふれ、陽差しの明るさ暖かさ、魚の旨さ、海の美しさを堪能した松山。故郷とオーバーラップさせると何と不公平な！、日本の事などほとんど知らないという事実、単に馬齢を重ねるという文字が重くのしかかる。

入局して三年目の頃、白いゴシック体の文字で、美術足立正美 と私の名前が、ある番組で初めて放送された。それを田舎の親父が見てとても喜んでくれた。あれが親孝行の最初で最後だったかもしれない。数え切れない程の番組を担当したが、最新の作品は正月二日に放送された「さくら家の人がと」。ちびまる子ちゃんの作者さくらもこさんの漫画家デビューまでをコメディータッチに描いた作品を手がけた。平

成二年前期のテレビ小説「凜凜」とは半年間の放送だったので、皆様の中にもお目に留まった方がいるかもしれない。

丹波の山ざるが、時代と社会の最先端を行く職場にいることの苦勞は並み大抵ではない。控え目、謙虚さは積極性が無い。引つ込み思案で他人を立てる性格は自主性、自己主張に欠ける。恥ずかしがり屋は女優さんと口もきけない。(衣装の色も聞けなくてどうする!) 今では仕事でお付き合いした有



「花へんろ」収録時、桃井かおりさんと



名俳優、美人女優とも廊下で擦れ違えば挨拶を交わして軽口もたたけるようになったが、放送の世界は勝つか負けるか、喰うか喰われるかの修羅場である。山ざるはワシテンポ遅れてた。しかし今こんな時代、こんな世の中にあつて、いくら正確なニュースでも完璧を期したドラマでも、その内側に暖かさや思いやり、謙虚さの潜む人間性を感じられなければ、視聴者には受け入れられない。それができるのは「山ざる」じゃないか！

NHKの三文字は、私を珍しい、貴重な場所へ連れていてくれた。たとえば、大磯にある吉田茂の「吉田御殿」、書斎や庭、秘密の避難階段、今でも保存されているマツカーサの執務室、明治時代の元勲の別荘、豪華ヨット等々。映画が小説の世界でしか知りえなかった場所や人に出会えるという体験をさせてもらった。

大器晩成という言葉があるが、都会人にないものを持って生まれ育ち、数々の経験を糧にTVデザイナーとして晩成することを信じて、今日を生きています。丹波に感謝！、丹波を守る人々の健康と繁栄を！。「何が大器だ！」の声の聞こえる前に筆を置きます。

（NHK番組制作局美術部・チーフディレクター）

〈写真は平成二年八月、「凜々と」の打ち上げで田中実他共演者とスタッフ〉

牛の喉

村上 久 夫（春日町）

今はM社の東京支店長として活躍している後輩のI君には忘れ得ぬ思い出がある。彼がまだ独身時代のある夜、残業を終えてから皆でうどんをとり寄せ、空き腹に勢よく音をたてて食べているとき、彼が急に眼を白黒させて「ウー、ウー」とうなり出した。喉の所を指でおさえて苦しむのである。何か異変を感じて近くの医者へかつぎ込んだところ、急いで耳鼻科へ行くと紹介され、早速そこで応急処置を受け、幸に事なきを得たが、医者はもう少しで窒息するところだったという。海老のトゲが喉に刺さり、そこから出血してはれ、球状になって喉を塞いだのだ。天婦羅うどんで命を落とすこともあるのかと驚いた次第である。

私は喉が細いのか、幼い時からよく食べ物がつっかかり、「ゲーゲー」と苦しんだものである。巻寿司の「のり」とか「とろろこんぶ」とか、少し長目のものは野菜でも駄目だった。また魚の骨もよく喉に刺さり苦しんだものである。魚の骨が喉に刺さると、御飯をかまずに呑み込むとれると教えられていた。大きな固まりを喉に押し込むように頸を引

いてぐうつと呑み込むのである。これだいたい骨は何とか喉を通すことができた。

先年、台湾で航空機事故で亡くなられた作家の向田邦子さんは、その随筆「骨」の中でこの御飯の固まり療法にふれ、「それでも駄目なときは祖母が象牙の箸で喉の所をさするようにして『ナンマイダブ、ナンマイダブ』という。それからまた御飯の固まりである」と書いている。同じような経験者がいるものだと思うと、私は思わず微笑み、「牛の喉」事件のことを思い出す。

御飯の固まりでも駄目なとき、私はもつと荒療治を受けたからである。たしか、小学校一年生の頃だった。我が家から三百メートルほど離れた通称「源さん」と呼んでいた農家へ私は泣きながら喉の痛みをこらえ、提灯をさげた祖母に連れられて行つた。そして暗い、くさい牛小屋の前に立たされた。源さんは「ぼん、すぐとれまっせ」となぐさめながら、中に入つて牛の手綱を持つ。私は「かんぬき」という横わたしにしてある丸木に頸をのせる。もちろん、祖母に後から抱きかかえられて高いかんぬきにとどいたのである。

『かんぬき』に喉をのせて私は「うののど、うののど、うののど」と三回唱える。牛は何事かと「モー、モー」と大声で鳴くし、暗い小屋の中で大きな牛の眼だけが光っている。生きた心地はしない。必死の覚悟だった。そしてとほ

とほ帰るころには、いつか魚の骨はとれていたようだ。大変な骨抜きさわざであった。祖母いわく「牛は何でも食べる太い喉をもっているさかいなあー、よかった、よかった」と。

いま思うと笑い話のような馬鹿げたことだが、六十年前の丹波にはこんな風習がまだあったのである。ハイテクの現在からはとても考えられないことだが、こんな迷信のような慣習は、お世話になった本人がいうのだから事実である。

その祖母も昭和二十二年の二・一ストの前夜、風呂から上がって、お茶を飲んだ瞬間に脳溢血で他界した。

「うーのど」は幼き頃の丹波の忘れ得ぬ思い出である。私は魚を食べるとき、いまでは必ず老眼鏡をかけることにしている。

青春虚実——遊蕩事始め——

田 中 篤 郎（市島町）

学生生活を京都で送り始めて、二年目に入った頃のことである。

最初の一年は東山の山麓にあった寺の離れに下宿した。

朝な夕なに、読経の声と木魚の音が流れてきた。身も心も洗われるようだった。はじめのうちは神妙に身を慎しみ、勉

学？にいそしんでいた。そのうちに洗われ過ぎたのか、身も心も渴きを覚えるようになった。それが次第にひどくなってくる。

——これはいかん。血も涙も、そして感動もない、干からびた青春なぞあっていいものか、真つ平だ！——

八方探して、百万辺の近くに下宿を移した。町なかで暮すようになった。人里に降りてきた安堵があった。人里の風は甘く、香しい。

風がささやいた。

「さあ、青春しよう」と。

——遊び好きと怠けぐせ——がパツチリと目をさました。

下宿の近くに風呂屋があった。風呂屋の近くにおでん屋があった。七、八人も座れば一杯になるほどの、小じんまりとした店だった。

まず手始めにと、風呂の帰りに、一ぱしの蕩児よろしく、のれんを頭で割って入るのに時間はかからなかった。

ママさんは三十歳半ばの、色白でほっそりした美しい人だった。難をいえば、愁い顔だった。通ってくるおやじさん達にいわせると、

——そこが何ともいえん色気があって、いいとこなんや——と、こうなる。

ママさんは京都の人かと、はじめは思ったが、言葉は歯切

れのよい東京弁だった。

それもそのはず、ママさんは戦前東京で映画の女優をしていた。まあ、色々あつて京都にきた。また、何かがあつて女優をやめ、おでん屋のママさんになった。店は自前で出した。身持は堅いと噂されていた。

この店にくる客は、宵組と夜更け組とに分かれていた。

宵組は、ほとんどが近所の商店のおやじさん達だった。宵にくる美しいママさんはマドンナだった。それぞれがママさんの保護者のような顔をしていた。おやじさん達の気持ちを代弁すると、

——悪い奴が多いから、ママさんが危のうて——

と、何が危ないのか知らないが、まあこんなふうになる。

そんなだったから、花にむらがる蜂か蝶のように、ブンブン、ひらひら、と、自分とこのカミさんの目をかすめて、夜毎とんでていた。自分の話にママさんが笑つたり感心したりしようものなら、一番槍をつけた武士のような顔になる。

自然、財布のひもがゆるんだ。

一方、夜更け組は、この近くにある劇団、K座の若い俳優やその卵達だった。夜更けにくるこの人達もまたママさんの店にやつてくる。同じ道の先輩を慕つてやつてくるふうに見えるが、それだけじゃなかった。彼等には若さと夢があつたが、金が縁がなかった。彼等はいつも、懐が危なかった。マ

マさんは先輩らしく彼等の懐をやさしく守つてやった。彼等のいる時は若やいでいた。

宵組と夜更け組とは、値段に差があつた。宵組は高かつた。宵組はそのことを薄々感じていた。が、そこはそれ、ママさんの手前、太っ腹なところを見せ、そのことを口にしなかつた。

そのことを知つてからは、夜更け組に転向し、夜更け組の彼等にアヤかつた。そして親しくなつていった。

飲みにくる夜更け組の中に、K座の若手のホープの一人と目されているNさんがいた。

Nさんは二十歳半ば過ぎだった。一緒に飲んでいるうちに親しくなつた。

Nさんは、すらつと背が高く、色白で、額の広い面長な顔だった。その広い額にさらつと長髪がかかり、いつも遠くを見ているような目をしていた。「アラビアのローレンス」を演じた、ピーター・オツールに、どこか似ていた。

Nさんが額にかかる長髪を、あごを突き出し、細長いしなやかそうな指でかき上げながら遠くを見るような目をする、と、ひどく瞑想的に見えた。——女性はしびれるだろうなあ——と思つた。

Nさんに憧れた。

Nさんのように前髪パリリにしてみたいと、強く思つた。

そこで髪をのばした。のばしたものの、くやしひかなくせ毛だった。前髪パラリどころか、髪の前が天を突いた。くせ毛が恨めしかった。

また、これはずっと後の、寒くなつてからのことだが——その夜、Nさんが黒のトックリセーターに濃緑のコールテンの上着姿だった。憎いほど似合つていた。例によつて遠くを見るような目をしながら、長髪をかき上げた。少し離れたところから見ていた。身の嘆きを天に訴える名優の演技を見ているようだった。

Nさんに、男がしびれた。

で、クラスの友人の一人に、Nさんの素敵さを話して、あんな恰好をしてみようかなあ——とつぶやいた。

「あかん、やめとき、そんなことしたらチンドン屋だ」と、言下に、冷酷にして無残な言葉が返ってきた。もう少し言いようがあるやないか、いうにことかいて、チンドン屋とは何といういい草や——そのときの、その友人の顔の憎らしかったこと。

まあ、それはさておき、事程左様に、Nさんに会うたびに、驚きと羨望を味わされた。

草深い田舎に育つたボツと出には、Nさんの魅力に抗すべくもなかった。

だから、Nさんに三日も会えずにいるといらだった。何も

手につかず、飯さえも旨くなかった。

Nさんに会いたさに、三日にあげずママさんの店に通つた。そうなると、安いといつても金が続かぬ。つけにしてみらつて通う始末だった。やがて借金で首が回らなくなる。生家をだまし、その場しのぎの金を引き出した。そうまでしてでもNさんとの交遊を深めたかった。Nさんと一緒にいるだけで幸福だった。見るもの聞くもの、全てが新鮮だった。さらに輝いていた。

——こんなこととしていて、どうなつて行くのだろう——と、心の痛むこともあつたが、Nさんの顔を見るとすぐに忘れた。

秋が深まる頃にはママさんの店で会うだけでは物足りず、楽屋まで押しかけた。学校にも出ず、楽屋と飲み屋を往来するだけの毎日になつていった。

そして、いつ止むとも知れぬ遊蕩的な生活の日々を惰性のまま送つて、その年は終わった。

年が明け、また京都に戻つた。

待つていたのは期末試験だった。Nさんはいなかった。何処へ行つたのか判らなかつた。判然としないままに期末試験に入った。

普段サボつてばかりいたから、ノートがなかつた。クラスの友人にノートを借り歩いた。誰もいい顔しなかつた。身か

ら出た鏝とほぞを噛んだが、今更間に合わぬ。情けないが、頭を下げるしかなかった。一ヶ月余り下宿の部屋に籠った。

その一ヶ月の間に、おでん屋のママさんが店を閉めて雲隠れする、という事件が起きていた。——なんてや、どうしてや——と騒いでいるうちに、ことの真相は知れた。

Nさんが、若い女性と同棲してママさんを裏切ったためだった。

Nさんとママさんの仲は、前々からだった。ママさんはNさんが劇団の研究生の頃から目をつけて、秘かにNさんを応援してきた。ママさんは——自分の果たせなかつた夢をNさんに託したのだ——と、心にいい聞かせていた。が、そこはそれ、歳は離れていても——若くていい男といい女——その上ママさんは女盛り。

商店のおやじさん達のいい草じゃないが、

——夢を託したついでに、体まで託しはつた——と。

いつの間にか割れない仲になった。ママさんの応援は更に力が入った。

今ようやくNさんに俳優としての芽が出てきた。ママさんはNさんの出世を誰よりも強く願っていたから、喜んだ。

ところがその矢先、Nさんはママさんに隠れて取り巻きの若い女性の一人とソツと同棲していた。そのことがママさんの耳に入った。いずれはそうなるかと覚悟はしていたそうだが、

現実となると心は思うようにならない。Nさんを掴えて東京弁で啖呵を切った。ちよつとした騒動になった。割って入る人がいて、なんとか収まった。

しかし、ママさんは無念さと世間に知れた恥ずかしさに、いたたまれなかった。店を閉めて雲隠れした。

ことの真相を知った商店のおやじさん達はびっくりした。自分達のマドンナを、いい男とはいえ、あんなニヤケた若造に手折られていたのかと、頭にきた。

同情は俄然ママさんに集まった。口々にNさんを非難した。非難しながらも、そこはそれ、人の世の常で、腹の中では、

——おもしろなつてきた——

と、ことの成り行きを興味深く見守っていた。

そのうちにおやじさん達は、

——身持ちが堅いといわれたあのママさんでも、男と女のこととなると魔がさすこともあるんやなあ——

と、妙な感心をし始めた。そして、

——そんなら、ことによると自分にも——と、思い始めた。

そうなると、ママさんの復帰が待たれてならなかった。おやじさん達の胸の中でカーテンコールが鳴りひびいた。

風呂屋で会う顔見知りのおやじさん達に水を向けると、

「ママさんも早う氣鎮めてもろて、店を開けてもらわんことには、氣安う飲むとこが無うて大弱りや」

と、大概の人の返事だった。その顔に、胸に下心を秘めた色
がにじんでいた。

近所のおやじさん達を、ずいぶん惑わせ、じらし、待たせ
てから、悲しみに打ち拉がれた女王よろしく、ひっそりと店
を開けた。やつれた顔は前にも増して美しく、おやじさん達
の心を捕えた。

——物凄うきれになりはったわあ——

と、ぎらぎらのおやじさん達が取り巻いた。

ママさんの復帰の夜は、自分だけ——いい子——になろう
と、それぞれが祝儀袋をそつとママさんの袖の下に落とすの
を忘れなかった。

店はおやじさん達で夜遅くまで繁盛しだした。

Nさんには年末に会ったきりで、会えなかった。Nさんの
その後は知らない。

焼きもの雑感

生 田 清 弘（柏原町）

私は絵画や焼きものなどを鑑賞することが好きである。こ
れは中学の頃から絵に関心を持つようになったことに根ざし
ており、それも私の伯父、従弟である常岡文亀、幹彦父子に

少なからず影響を受けたことは否めない。東京に住むようにな
ってからは特に美術・工芸の鑑賞には絶好の環境に恵まれ、
日本画はもとより洋画、版画などにも興味を持ち、さらに陶
芸についても浅く広く聞きかじっている。

顧みると私は若い頃は企業戦士として、後年は会社の経営
という立場から激動の時代を社会の競争原理の中で過ごして
きた。勢い張りつめた精神状態の中で業務を遂行することも
多く、自然ストレスがたまることもしばしばであった。こう
したとき、ストレスを解消し、頭の中の切り換えをはかる知
恵として、いつの間にか、もともと好きな道ということもあ
って、絵画や焼きものの前に立つことが多かったように思う。

仕事を離れても人生には悩みも多い。そんなとき、通りが
かりにデパートでもギャラリーでもあてもなくとび込む。そ
こには必ず何らかの展示が行われている。絵画や焼きものの
前に立つてじーっとそれを見つめ、物によつては触れてみる。
その瞬間は少なくとも何もかも忘れ無心であり雑念はない。

そしてよくわからないながらも作品の美しさ、表現の見事さ
……を自分なりに自身の感覚として受け入れているのである
かくて、いつの間にやらストレスは解消し、また新たな闘
志をかきたてることになる。

気分転換にはゴルフもよし、旅もよい。しかし時間があま
りないとき、相手がいなくてもできる美術・工芸の鑑賞は安

上がりの手っ取り早いストレスの解消法でもあるし、心ある人にお勧めしたい。もつとも衝動買いをやり、思わぬ出費を招くこともあるが、それはそれで自分の気に入ったものであるから、家でじっくり鑑賞したり利用すれば決して後悔することはない。

昨年、長年勤めた会社の第一線を退き、より多くの自由時間を持つようになったので、かねての夢であった焼きものの郷を訪ねてみようと思っている。

焼きものは全国津々浦々、それぞれの地方に窯があり、それぞれ歴史的、地理的背景をもっている。

例えば、有田焼や萩焼などその起源を遡ると大変古い時代に及び、中には遠くヨーロッパとの交流に結びつくものもあり、有田焼の「古伊万里」「柿右衛門」様式などはドイツのマイセン焼に強い影響を与え、現在にも受けつがれているといつたぐあいである。

また焼きものが発達した背景にしても、かつてその地を治めた藩主の施策や、技術の伝来経路、あるいは昔から瓦を焼いていたとか、土管をつくっていたとか、それらに関連して良質の土や石に恵まれていたとか、釉の材料があるとか……こんなことを次々に考えていると興味はつきない。

世の中にはいわゆる六古窯をはじめとする有名な窯元以外にも、あまり知られていない焼きものがたくさんある。窯元

の密集しているところもあれば、人里を離ればつんと点在しているものも多く、そんな場所に足を運ぶのも格別の風情がある。最近では、例えば若き陶芸家が北海道に移り新天地を開くとか、同じ備前でも昔からの伝統を受けついでいる流れと、感性豊かな近代感覚派というか、そうした流れがあるように、陶芸家達の発想もオリジナリティを追求する傾向が強く、また国際交流も盛んで、陶芸の多様化に拍車をかけている。最近益子に行ったとき、女性を含む外国人の陶芸家が弟子入りして研鑽する姿に接し、感銘を受けたものである。

「百聞は一見にしかず」とか「千見、一触にしかず」という。この意味においても自ら足を運び、それぞれの土地の焼きものの作陶環境を確めながら作品を手にとり、触り、あるいは作者と語りあいながら学ぶのは楽しみであり、心にゆとりを感じるひとときでもある。個展などでお目にかかった作者を現地にお訪ねしたことも少なくないが、たいていは思いうして喜んで下さることが多い。一度お訪ねしたところは、あとあとその作品を見るにつけ、現地の雰囲気を感じ、懐かしく親しみをもつと同時に作品に対する理解も容易なことはいうまでもない。以下私の経験した一部を紹介しよう。

私は一時期、栃木県の佐野市で仕事をしていたことがある。佐野市は人間国宝の田村耕一先生の出身地であり、先生は鉄

釉で文様を描くことを基本にした作風で著名であるが、晩年は青磁に絵つけをするなど新しい試みを行った方でもある。中でも葡萄やほたる袋などの絵を得意とされ、その簡素な作風が印象的である。あるとき、萩焼宗家十五代・聴泉庵坂倉新兵衛氏を訪ねる機会があり、雑談しているうちに氏の東京芸大時代の先生が田村先生であることがわかり、いろいろ作品について教示願ったことを思い出し、陶芸界にもいろんな人脈のあることを今さらながら認識した次第である。

人間国宝といえ、沖縄初の金城次郎氏がいる。昭和五十七年に沖縄を訪れたとき、ぐい呑みや抱瓶に彫り込まれた魚や海老の独得の表情が何ともいえず躍動感のあるもので強く印象に残っていた。これが伏線であつた。昭和の終わりに沖縄へ出張したとき、読谷村の金城次郎窯を訪ねることになり、登り窯などを見せていただいた。「次郎さんの魚や海老はすべて笑って描かれ彫られている」と浜田庄司さんも評しているように、見ていて大変楽しい。最も大衆的な人間国宝といわれる金城氏の人柄を表わしているような気がする。

あるとき、日本橋の高島屋で「大ヨーロッパ名窯展」が開かれたことがあるが、イヴァン・バイスというデンマークのロイヤルコペンハーゲン所属の作家が実演制作していた。彼

の作品の中に日本的なぐい呑みを見つけたが、その色は鮮やかなブルーであつた。話すうちに彼はかつて日本に滞在し、萩の窯元で修業したことを知つた。色彩感覚はやはりロイヤルコペンの伝統からくるのであろうか。後年コペンハーゲンに行き食器を求めたことがある。その展示場で彼の作品に再会したが、これもブルーを基調としたものであつた。高島屋でぐい呑みを買つたとき、器用な手つきでロイヤルコペンの印と自らのサインを筆で箱書きしてくれたが、日本の陶芸をかなり心得ている人物と感じたものである。

備前を訪ねたときのことである。木村陶雲さんという作家に出逢つた。そのとき、プロとはまさにこういうものと実感したことがある。お忙しい中申しわけなかったが、徳利の作り方が知りたくて目の前で作ってもらつた。一見無造作に見える所作で捏ねあげた土の塊を掴みとり、ろくろの上でまず円筒状に成形し、首元を絞り口をつくり、竹製の小道具を口から中に差し込み、それを押しつけるようにして徳利の胴体をふくらませて、あらかじめ意図したサイズの徳利ができあがつた。そのとき、土の過不足は全くなかつたのである。作品に必要な土の量は身にしみついているのであろうか。最初の土を掴む瞬間に感触で決まるのであろうか。その鮮やかさには驚いたものである。

陶芸の妙は焼くことにあるといつても過言ではない。絵画はあらかじめ構図や配色を決め、作者の恣意のままに進めることができるが、焼きものは違う。形は作家の意図通り作れても、肌合いとか色は窯から取り出すまでわからない。作者自身が驚くような作品が現われることもあるそうで、窯出しの時は幾つになつても胸が躍るという。それは窯変という現象が生じることや、炎と土の織りなす物理的、化学的反応に基づくものである。作陶の面白さはここにあり、同じ形にくられた湯呑みでも仕上がりはそれぞれ異なつた面白さがでてくる。木村さんの陳列棚にも窯変や灰被りなど、肌に変化のあるものが多く並んでいた。

備前の作家山本^{いづる}出氏（無形文化財山本陶秀氏の四男）の作品に出逢ったとき伺つた話を紹介しよう。氏の作品は陶秀さんのそれとは趣を異にしたものが多いことに気づく。彼の作品の中に、徳利の表面が鉢巻き状に幾つもの輪で構成され、それぞれの輪の色が皆違つているものがあつた。これは特別に釉をかけるのではなく、土の種類を変えることにより、焼成時の反応から各々の特色ある色が現われるという。つまり、『備前の土に数種の土を混ぜることにより、ブルー、グリーン、オレンジ、白、金などに彩られた作品が生み出されたもので、山本氏の名前の「出」と「色彩が出る」という意

味で「出彩」と名づけられた。「備前の魅力は何といつても土味、今まで千年も続いてきたのは人間の土に帰ろうとする本能と、日本人の心を捕えてきた自然の美しさです。でも伝統に固執しなくてもいいと思うんですよ。伝統の中に今を生きている心を表現して自分の追求する美をマツチさせる。それが僕のテーマです」。この「出彩」のほか、彫刻の経験を生かし叩き込む、積み上げる、絞る、プレスするなど、独自の手法を次々と開発、備前焼の世界に新風を吹き込んでいる。「釉薬を使わない備前焼は丸裸です。だからこそ土の温かみが直に伝わるんですよ。試しにいろんな焼きものの湯呑みにお茶を注いで飲んでごらんさい。湯呑みで味わうことは器に接吻するつてことでしょう。きっと備前のよさがよくわかると思いますよ」。備前焼をこよなく愛しながら自由な発想で備前焼をリードする山本氏は、備前焼の未来に示唆を与えてくれた。——『月刊「ジョイフル」より』

昭和五十年に信楽の第四代奥田絞左エ門さんを訪ねた。彼は熱心に信楽の土について説明して下さつた。「信楽の土は疎^そなんですよ。花瓶に水を入れてもなかなか水は腐りません。なぜかわかりますか。川の水は腐りますか。川の水は動いてるかぎり腐りません。信楽の土質は疎であり、隙間があるので水は隙間に入つたり出たりします。つまり器は絶えず呼

吸しているので水は動くのです。従って永持ちするのです」という話であった。先生の工房でジョッキが並んでいるのをみた。これでビールを飲むとすこぶるおいしいとのこと。ふと「萩の七化け」という言葉を連想した。萩焼は大変浸透性があり、酒やお茶を注ぐと、新しいものではしばらくすると器の表面が滲んでくる。使えば使うほど器の内外面が変化することから七化けというのである。

——人間臭の強い庭より自然の山野がいい、妖しい華より素直な花が、高慢な女より心優しき女が、愛されるより愛する方が、憂き目浮き世より静かな壺中が、きらきらする焼きものより素朴な土の肌がなおいい。優雅にして洗練された感覚により素朴なものが生まれる。素朴とは粗野にあらず、信仰であろう。不精窯 絞左エ門——

上越新幹線の上毛高原駅を降りると玄関口に「赤い城山」と題する色鮮やかな壁画が目止まる。これは残照に映える赤城山をイメージした三百五十一枚の陶板から構成されている。作者は福田祐太郎といい、福田さんのルーツは長崎県の樋口窯であるが、現在は群馬県の月夜野町に祐太郎窯をもつ。昭和五十年に福田さんは散策のおり、上越新幹線の工事現場の削除土が陶器となることを発見し、学者の協力を得て磁器質流紋岩と判定され、陶土脈は月夜野町を中心に大量に分布

していることをつきとめた。これが月夜野焼の生い立ちである。氏は陶磁器の中でも最も至難とされている辰砂の焼成を中核としている作家である。

平成元年に、函館の街を歩いていて面白い名前の焼きものに遭遇した。曰く「青函トンネル焼」である。ご存じのことと思うが青函トンネルは昭和六十三年に一番列車が走った。長さ五十三、八五キロメートル、世界一のトンネルである。

「青函トンネル焼」はこの世紀の偉業を記念してトンネル中央部の海底二百三十メートルの緑の原石を釉薬にして焼きあげたもので、肌合いは岩層を、色は海の深さをテーマにしたものである。作者は金野正孝さん（臥牛舎）といい、啄木の研究家でもある。またと得難い海底最深部の貴重な原石をいいただき、よい記念になった。

昭和六十三年、例により何のあてもなく小田急のギャラリーに入った。そこには全国の土や石から作られた作品がずらりと並んでいて、今までに聞いたこともない名前の焼きものばかりであった。中でも「舞焼」と名づけられた茶碗に目がとまり、その色が気に入ったのでしばらく覗き込むように眺めていた。そのとき背後から声があり「愛陶家のご様子、何かお感じになりましたか」と。私は振り向いて「舞焼」の由

来などについてお尋ねした。この方は芳村俊一さんといい、陶芸家であると同時に陶土や釉の研究者として有名であり、過去四十年近く日本各地を歩いて土、石、古陶を調べそのひとつひとつの土に適合する技術をそれぞれ釉の問題も含めて探究し続け、そこから未来の陶芸を夢みている方である。「陶土の探究」、「土と石の研究」等々多くの著書がある。また、伊豆にある「芳村やきもの資料館」のオーナーでもある。

ところで「舞焼」であるが、芳村さんが但馬の関宮町を通りかかったとき、たまたま建設工事現場で掘り返された土を採取して持ち帰り、自らの窯で焼いたところ、土から色々な色が舞い上がるように現われたという。そしてこの土質は京都府の舞鶴地方から兵庫県の北部にかけて分布していることがわかり、「舞焼」と命名したそうである。

後日同氏の資料館を訪れ、種々ご教示いただいた。資料館には全国の土、石、古陶や釉を対象に数千種類の焼きもののサンプルが所狭しと陳列され、このほかにも並べきれないものがあるという。ここには研究、著作活動をされる研究室とひとつひとつの土を焼き、土の性質や釉薬を吟味される窯が併設されている。研究成果は著書に収められ、発表された研究はすべて実証という過程を経て確認されており、非常に説得力のあるものである。面白いのは釉の研究にしても、植物

灰と土との相性を探ったり、身近なところにある例えば、練り歯磨きやケチャップ、あるいは飛来してきた火山灰など、手当たり次第に芳村さんにかかれば研究実験の対象となるという。日本の作陶人口は百五十万といわれる。従って土の消費も年々増え、窯元によっては将来土や石が不足すると予想され、現に種々対策に苦慮していると聞く。これらの問題の解決を含め、これからの陶芸に関し、誠に蘊蓄のある芳村先生の言葉を引用し結びとしたい。

——今、なぜ土か。

パーティントンが「応用化学の起源と発達」のなかで「人類の発達の研究においてどの部分より重大な意義をもっているのは、しかもそれにもかかわらずどの部分より軽視されがちなのは、材料・その使用に関する部分である」と書いたのは百年以上も前だが、今でもいえる言葉であり、材料とその使用に関する部分を地道に攻めていくことによって、むしろ根本的な発達が期待されるだろう。私は夢を見ている。百五十万人が百五十万種の土を使い、百五十万種の釉をつけ、百五十万種の焼き方をする。それらの中から青磁、天目、志野、織部……を越えるものが現われ、昭和・平成陶は桃山陶をのりこえて行く。そしてこれは信楽、志野などの限られた土だけの乱費を防ぎ、大地も安堵した顔をして人間の陶芸を見守るだろう。——（芳村俊一著「陶土の探究」より）

スメタナ先生との出会い

池畑豪四郎（柏原町）

平成四年三月二十六日、有楽町西武アートフォーラムで待ち待ったチェコスロバキア・プラハ在住の巨匠、ヤン・スメタナ絵画展が開催された。

五十六点にもなるスメタナ作品が一堂に展示されたのは、日本はもちろん、世界でも初めてのことである。

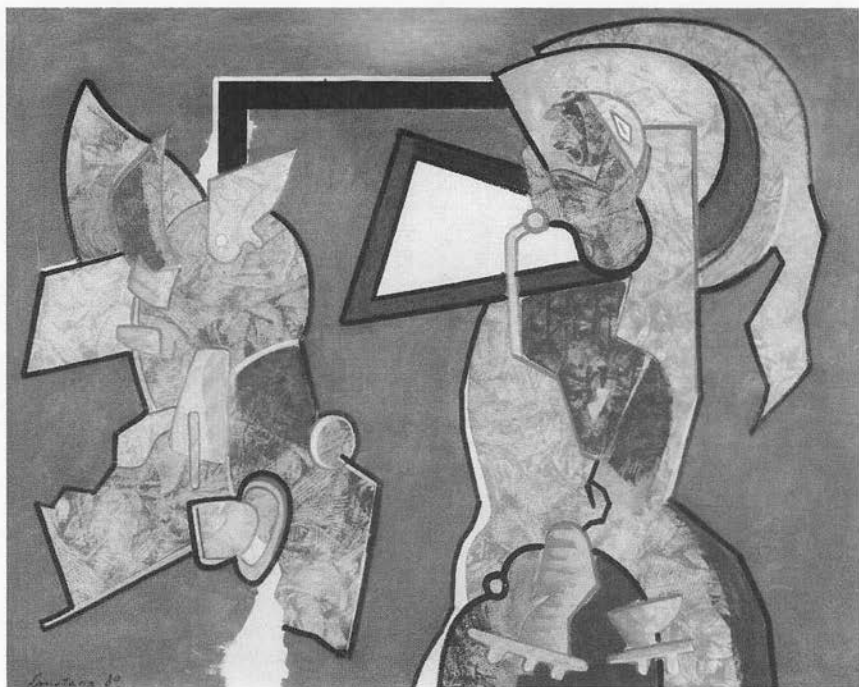
スメタナがチェコの巨匠といっても、ほとんどの人が御存知ないと思うが、クラシックのスメタナと縁戚関係にあり、チェコ国内では随一の実力者である。

簡単に紹介すれば、一九一八年、プラハに生まれ、青年時代には祖国のナチ占領に遭遇し、ゲシュタポに逮捕され、強制収容所生活を経験する。後年「グループ42」と呼ばれ、戦後現代美術に大きな影響を及ぼした総合芸術運動のグループの結成に最年少で参加、現在までチェコ現代美術界を代表する存在として活躍されている。キュービズム、シュルレアリズムの洗礼を受け、宇宙や自然をテーマとする抽象画なので、絵に全くの素人の小生には、正直何を表現されているのか難解で、選択をするときは、絵に出会った瞬間の感性で、

自分に「合う」「合わない」で決めさせていたのだ。

一九九〇年三月、ちょうど二年前、私は解放されて間もないプラハの街に、大学生になる娘と社員二人を連れて訪れた。ウィーン、ブタペスト、そしてパリへ向かう途中での立ち寄りであった。異常気象はヨーロッパでも例外でなく、厳寒であるはずのプラハも外出はセーターで充分であった。知合いもなく、地図とタクシーで見て回るはずのプラハで、一女性との偶然の出会いが後でこんな大きな成果をもたらすとは、まさに「神のみぞ知る」話であった。彼女はチェコ政府要人に大変深い人間関係を持っており、ごぞんじ東京オリンピックのチャスラフスカ女史とも親しい関係で、その彼女がプラハを案内すると申し出てくれた。

最初に行ったところがチェコ国立美術館で、そこに、スメタナ作品が展示されていた。瞬間、すばらしい色彩の絵だなと思い、彼女に伝えると、先生の都合を聞いてアポイントしてあげるとのこと、翌日訪問させて頂いたアトリエで作品を拝見したが、初めから買うというようなおこがましい気なども頭なく、わからないから一生懸命見ていたら、先生の方からもし気に入ったのならわけてもよろしいとのこと。見ていた絵十三点をいただくことになった。その時は信じられない気持ちで胸が一杯になった。帰国し、四月に入って、セゾングループの堤会長が神戸に來られ、夕食を御一緒したとき、



帰国早々のチェコの話をする大変興味深く聞かれ、秋ごろ一緒に行きましようよ、ということになった。もし、堤会長が訪問されるならチェコ側にとつても、すばらしいことなので、ハベル大統領とのトップ会談が実現すればいいな……と心の中で思った。

会長には正式には申し出ずに早速その作業にかかった。フアックスのやり取りが頻繁になり、可能性が出てきたので具体的な下準備に、六月再度チェコ入りをした。同時に「スメタナ先生の絵画展が日本でできればいいな」と会長との話になったので、その交渉も兼ねた。

大統領との話は、三月に出会った彼女のお陰で、急速に進み、チャスラフスカ女史にも会い、スラビツキー大統領補佐官にも出会って具体的交渉に入った。予定は十月。ただ残念なことにスメタナ先生を再度訪れても、友人としては受け入れていただいたが、絵はわけていただけなかった。大統領との会談がいよいよ十月十二日に決定した連絡が入る。一足先に準備のためプラハに入り、堤会長をお迎えする。会談の前に国営テレビのインタビューがあり、堤会長はみごとな英語で応答されていた。いよいよ会談の時間がくる。小生も同席を許され、四十分という短い時間内に集約された話が進む。他に物音一つしない厳肅な雰囲気で、経済大臣、文化、建設両大臣、もちろんチャスラフスカ女史も同席され、会談後特

に経済大臣から、もう一時間、時間を下さいということできらに具体的な話し合いが始まった。

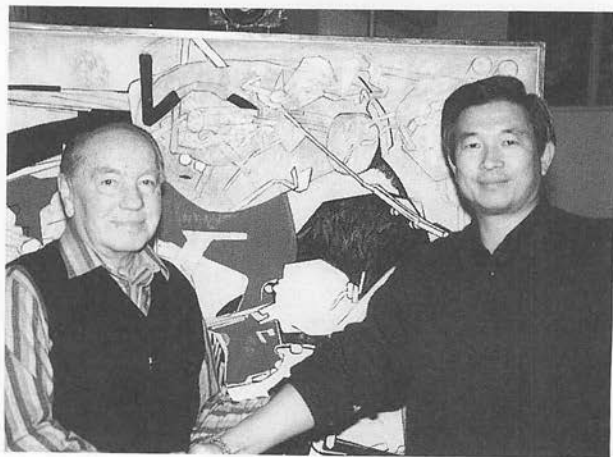
もう二度と味わうことがないだろうと思いつながら、また、なり行きの不思議さを感じながら息を潜めて聞き入った。

無事終了。続いてスメタナ先生を訪問。堤会長は財界人でもありながら、文化を最も理解される方であり、ヨーロッパ芸術、文化等の話題が次々と先生との間で交わされ、時間の経つのがあつたという間であつた。会長のお陰でスメタナ先生の小生に対する信頼がますます増え、今回はスムーズに作品をわけていただくことができたのである。

かくして三月二十六日、有楽町のアートフォーラムで、西武百貨店主催の「ヤン・スメタナ展」が実現したのである。

オープニングレセプションに、後援者のチェコ及びスロバキア連邦共和国特命全権大使ヤン・ヴィンケルヘーフェル氏の御臨席を賜り、堤会長、常岡幹彦先生を始め、多くの皆様方の御出席を賜り、開会できたことは無常の喜びであつた。丹波出身の方々と柏原高校の同窓生も激励に駆けつけていただき心強い思いであつた。残念なことは、スメタナ先生御夫妻を御招待申し上げたが、心臓を少し悪くしておられ、ヨーロッパ国内の旅もドクターストップがかかっておられ、来日できなかつたことである。四月六日までの約二週間、いろんな方々に鑑賞していただき、少なくともチェコの文化の一端を

御紹介し、御理解いただけたことに、この場をお借りして厚く御礼申し上げる次第です。大きく変化しているヨーロッパのその心臓部に位置するチェコスロバキアが、全く日本人の感覚に類似していることや、経済的、文化的にも将来世界に向けてキャスティングボードを握っていることなど、いろんな意味で日本と似通っている。この国が、小生にとって初め



て訪れて、まだ三年にしかならないとは、とても思えないほどの縁の深い国になった。

この原稿を書いているとき、チェコスロバキアのハベル大統領が国賓で初来日されることが決まった。御縁を感じる次第である。両国の相互理解と繁栄が、ますます深まることを期待したい。

小川晴通氏に 勲四等旭日小綬章



大正三年、氷上郡山南町山本に生る。

①日本鍼灸師会の副会長十年、会長七年を歴任、全国鍼灸師会の法人化を推進する一方、鍼灸医学の科学的発展と国民の保健医療推進に多大の貢献を果たした。

②「あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等に関する法律」の改正に尽瘁し、教育制度の改革、国家試験の実施、資格免許の引き上げを実現、鍼灸の資格制度改革に画期的な功績をあげた。

③「財団法人・東洋療法研修試験財団」の設立に準備委員長となって関係団体を結集し、顕著な功績をあげた。

そのほか日本鍼灸師会主催の学術講習会、研修会等の講演や実技指導、健康保険適用の改善、日本鍼灸師会倫理綱領や会員共済制度の制定、等々、二十数項目に及ぶ氏の受章業績があげられている。

平成三年九月、椿山荘において、福田赳夫元総理、日本医師会会長羽田春兔氏ほか、日本鍼灸師会あげての盛大な叙勲受章祝賀会が催された。

現在も院長として西新宿に杏林堂を経営するほか、日本鍼灸師会名誉会長、東京鍼灸師会名誉会長など、数々の役員を兼務しながら斯界に活躍されている。

梶原清氏の 内閣委員長就任祝賀会

梶原清・参議院議員の古稀の祝いと、「運輸交通と50年」出版の祝いもかねて

『内閣委員長就任をお祝いする会』が、平成四年三月六日、千代田区の九段会館で、政、官界および丹波出身者約五十人が出席して盛大に開催された。

祝賀会は氷上郷友会の宮野近氏の司会ではじまり、足立誠一氏が「梶原先生は丹波の二宮金次郎、苦学力行の人で、中学を三年で中退後苦難の道を歩みながら京大法学部を卒業し、公認会計士の資格を取得、運輸省に入られ、今や陸海空のオーソリティであります。また先生はいへん多くのニックネームを持っておられ、なかでも「ミスター六万三千元」、「ミスター運鈍根」というのが有名であります。艱難汝を玉にするという言葉がありますが、まさにそのとおりの先生です。さてその先生のご努力もさることながら、先生を今日あらしめたのが、ほかでもない「やす子夫人」の内助の功……」と、開会の挨拶をした。

次に梶原先生と同じ篠山出身で、国際行政書士会々長の畑光氏が「私は故有田

喜一先生にかわって、今日の会をお喜び申しあげたい。先生は税制改正、福知山線の複線化など、国家のため、郷土発展のため数多くの貢献をされてきたが、さらに福知山線複線化の延長などに、これからも働いてほしい」と、お祝いの言葉を述べたあと、FCCメンバーのミスフランスが梶原先生に、ミスドイツがやす子夫人に、それぞれ花束を贈呈した。

続いて元氷上郷友会々長の足立三治氏により乾杯、アトラクションとして小泉源兵衛氏のピアノ伴奏によって吉田慧己さんによるシャンソンや参加者全員による「ふるさと」合唱を聞きながら、梶原先生ご夫妻を囲んで楽しく歓談した。

梶原先生は「今日みなさんにこのようなお祝いの会を催していただき、こんなに嬉しいことはない。私は国鉄に十三年、運輸省に二十九年、昭和五十年には参議院議員にみなさんのご協力によって当選させていただき、国会議員を二期十二年無事勤めることができ、心から感謝して

梶原 清先生内閣委員長就任をお祝いする会



いる。この間、六十年には政務次官、つづいて大蔵委員長などを経験し、現在は内閣委員長を拜命している。これからも運輸交通の発展のため、あるいは福知山線の複線化を氷上郡に延長するために全力をつくしたい」と、丹波人の厚志に対して感涙の謝辞を述べた。

最後に氷上郷友会の足立和巳氏が「四年後は郷友会百周年、福知山線の複線化の成功と先生ご夫妻、参加者の発展と健康を祈ります」と、閉会の挨拶をした。

(足立静雄)

上山 顕氏の 出版と米寿を祝う会

柏陵東京支部長で、厚生省保険局長、労働省職業安定局長などの要職を歴任した「上山 顕さんの出版と米寿をお祝いする会」が、四月九日、満開の桜の匂う千代田区九段会館で、氷上郡出身の在京人約四十人が出席して盛大に開催された。

祝賀会は坂上勝郎氏の司会ではじまり、先ず関東氷上郷友会々長の村上末吉氏が「上山さんはわが郷土が生んだ誇るべき人物で、東大政治学科を卒業して、厚生省では戦後の混乱期に保険局長、その後労働省職業安定局長の要職を歴任、その間、社会保険を充実してわが国の社会保障制度を確立された。また労働省職業安定局長になられてからは、失業保険法制定に尽力されるなど、その功績は誠に偉大です。また趣味も豊富で『やきもの』『美術観賞』に造詣が深い。私たちも上山さんのご教示にあずかりたい」とお祝いの言葉を述べた。続いて柏陵東京支部副支部長の谷達雄氏が、上山氏の実家の思い出などを交えながら祝辞を述べた。

次に上山氏が「私はこの八月で満八十七歳、米寿といわれるようになった。昭和五十年に『回想と覚書』を出版してから十数年になるが、その間求めに応じて『山ざる』誌その他に寄稿したものがあ

上山顯さんの出版と米寿をお祝する会



約十編を削り、『様々な出会い』を出すことにした」と、新著の出版にいたる経緯を語り、また「戦後の私は、厚生・労働両省および関係団体にあつて、主として社会保険ないし労働保険に関係する仕事に携っていたので、旧著は社会保障に関連して思うところを述べたものが多い。読み返してみると、私の後半生がおのずと語られているが、今さらこのようなものを公刊する考えはなかった。そこで新著は、まさに私家版にふさわしいものと考えた。郷里の方々など少数でも購読を希望されることもあろうかと、公刊の形をとった」と述べた。上山氏はさらに、柏原中学出身著名人の思い出を楽しそうに語るとともに、今日の祝賀会に対し、「我が生涯の最良の日」であると深く謝意を表した。

続いて村上郷友会々長から記念品、木呂子恵美子さんが花束を贈呈し、元郷友会々長・足立三治氏の乾杯でなごやかな歓談に入った。また宴会の間をぬって、

梶原清氏、吉住重造氏、足立かをる氏、生田清弘氏、渡辺隆男氏、常岡幹彦氏、宮野近氏、鈴木大助氏らが次々とお祝いの言葉を述べ、終始うちとけた雰囲気、祝賀会であった。

(足立静雄)

上山顕著「様々な出会い」購読ご希望の方は(株)ホンゴ出版(東京)〇三(三二四八)六六二五番まで

足立源治さん逝く

平成四年三月二十九日、関東水上郷友会前副会長・足立源治さんが久我山病院で療養中、呼吸不全のため急逝された。四年前、胆管結石が肝臓に入って大手術を受けられたが、その後回復され、郷友会にも元気なお姿が見られた。今年二月初、食欲不振で再入院されていたもの。氏は大正六年十一月、青垣町東芦田の産。享年七十四歳であった。

柏原中学校卒業後陸軍士官学校に入ら

れたが結核で中退、道を変えて旧制高知高等学校から京都帝国大学法学部に進まれ、卒業後司法試験を経て検事に任官され、昭和二十年、京都地方裁判所検事局に務められた。戦後のヤミ取締りにも当られていたので、生来の潔癖と相まって食糧難ことのほかきびしく、その後も持病の再発と衰弱になやまされつづけたという。昭和二十七年には大阪通商産業局に移られ、昭和四十一年に通産省からジエトロに出国のため上京し、昭和五十一年まで企画部長として活躍された。

昭和六十二年、郷友会副会長に就任されたが、その数年前から松山幸逸さんのあとを受けて当誌山ざるの編集主幹として健筆をふるわれていた。ちなみに本誌16号以降の編集後記などに(源)とあるのは足立源治さんの一文である。

長兄・足立徹氏(現トヨーサッシ相談役)と次兄・足立春治氏(在郷)が健在。夫人・秀子さん、長男・足立仁氏、長女・西田佐紀子さんが東京に在住。



足立源治さんの逝去を悲しむ

田中篤郎

三月二十九日、午前九時四十五分、渡辺隆男さんより、足立さん逝去の知らせが入った。続いて、足立さんの奥様、ご令息からも悲報が入った。

電話を切って佇んでいると、足立さんの面影が浮かんできた。その面影に「ちいーと、早かったネ」と、つぶやいた。

足立さんとの出会いは、昭和五十九年の秋、「山ざる」の編集会議に出席したと

きであつた。その後、急速に親しくなつていった。

互いに連絡を取り合い、八重州地下街や銀座などを、よく飲み歩いた。ときには渡辺さんの呼びかけで、銀座、新宿をはしごした。

そのころの足立さんは元気で、気嫌よく飲んでおられたが、足立さんの心奥に触れるような話になると、なぜか貝がふたをするように、ピシヤリと心を閉じられた。

付き合い始めて二年ほどたつたころだつたか、銀座でしたたか飲んで遅くなり、帝国ホテルの前でタクシーを待つていた。そのとき何が気に入らなかつたのか、足立さんの気嫌が悪くなつた。タクシーの中で口いさかいになつたが、足立さんのわからずやに腹が立つた私は、降りしなに、もう二度と合いたくない、と捨てぜりふを吐いた。

これで足立さんとの付き合いは終わったと思うと、限らないさびしさと悔いが

残つた。それから幾日かたつたある日、

「やあ、こないだはどうも、ところ

で、今夜どうや」と、明るい声で足立さんから電話がかかつてきた。

いやもおうもなく、喜んで付き合つた。渡辺さんが一緒だつた。

「今夜はえらう肩がこるわア、ふところが重とうて……」と、上気嫌だつた。当

り馬券のお金の入つたという夜だつた。

口いさかいが契機になつたのか、足立さんが心を開いて、自分のことを話されるようになった。

足立さんは、柏原中学校卒業後、陸軍士官学校、旧制高知高校から京大法学部に進まれ、検事に任官されたが、戦後は通産省からジェットロと歩まれた。その間の話を折々に聞いていると、あり余る才能を生かすことなく終つた無念さと、やり場のないかなしさにぬれた足立さんの心底に触れる思いがした。さぞ無念なことだつたろう、と思つた。

「今更、しゃないことやけど」と、寂し

く笑うそんな足立さんに、失礼ながら、言いしれぬ愛情を感じた。付き合いはさらに質を深めていった。

足立さんが肝臓の大手術を受けられたあとは、夜の付き合いをやめて、昼に軽く飲むことにした。藤田正雄さんもお誘いして、三人で池袋や中野で落ち合つた。三年ほど前から、年の瀬になると、きまつてカレンダーを頼まれた。カレンダーをお渡しして一杯やるのが恒例になつていたが、昨年末は寒さがひどく、今年に入つてお渡しした。その時も一杯やつたが、酒も進まず、元気もなかつた。心配だつたから、ときどき電話を入れて様子を聞くと、

「温^{ユル}なつたら会おか」と、いつておられた。

三月八日の日曜日は暖い日だつた。久しぶりに足立さんを誘い出そうと、電話を入れたら、入院した、と奥様の返事だつた。心が痛んだ。二十二日に、その後の様子を聞くと、思わしくない、と心配

そうだった。心が重かった。

そして、間もなしに、この悲しい知らせが入った。ただただ、かなしみの極みであった。

足立さんとの付き合いは、歲月こそ短かったが、中味は何十年にも匹敵するほどの濃いものだった。

足立さんは、私に、いろんなことを語られたが、その言葉のはしほしに、かなしさとあきらめが、そこはかとなくにじんでいた。

その心を少しでも癒すに、私で間に合ったのだろうか……そのことが気になって仕方がない。もし間に合っていたのなら、この上ない喜びなのだが……いまはこのことを問うすべもない。

足立さんが逝かれた今、その霊を慰めるに如何なる言葉もむなし。ただ、足立さんの安らかに眠られんことを乞い願うのみ。よき後生であられますように、と。——合掌——

出版

上山さんの「様々な出会い」

を読んで

上山さんは厚生省の保険局長等の要職を果たされた丹波出身の偉大な大先輩です。

上山さんは今年満八十八歳の米寿を迎えられるのを機会に「様々な出会い」を発刊されまして、三五一頁に及ぶ単行本は内容がとても充実していてこの拙文ではとても語れないすばらしい本です。

本書は私的というより公刊の形をとることにしたと、ご本人が述べておられるとおり、戦後の混乱期から厚生行政に関与され、進駐軍総司令部との交渉に当られ、大変な功績を挙げられました。その巻頭に「国民に希望を与えよ」という中央公論総合雑誌の巻頭言を引用し、講和後の日本を考えると、果たして経済の自

立が全うできるかどうか、前途まことに樂觀を許さないものがあり、国民は漠然たる不安に襲われている。しかし、ただ国民を失望させ自棄に陥らしてはならない……」という悲痛な叫びから始まっていますが、当時今日の日本の経済的な発



展を誰も予想し得なかったと思います。

そして国民に希望を与える施策として「一つは水力電源開発の促進であり、他は社会保障制度の確立である……」として、上山さんの活躍が始まっていくわけです。

上山さんは学生時代から山がお好きで、スキーにも行かれ、ユーモアとか美意識についても深いものが感じられます。巻頭に幾つかの陶器の写真が掲載されていますが、追憶篇の中で「やきものとの出会に寄せて」として陶器類に対する思い入れが厚く、専門的な見識を披露しておられます。また陶器を求めてパリへ、スペイン陶器に接しられた状況が詳述されており、上山さんのご人格が彷彿として浮き上っております。

社会保険制度を整備するという固い行政に腐心され、その実績を挙げられた一方で、人間として豊かに充実した人生を歩まれたという足跡が縷々述べられており、貴重な半世紀にわたる資料を兼ねて

おります。

最後になりましたが、本書は郷友の（株）ホンゴ出版社長池田忍さんの所で出版されたことを加筆しておきます。

（村上記）

木村さんの「青竹のように」

を読んで



木村さんは現在調布市に在住され、市福祉協議会の理事を務めておられます。

昨年ご自分の歩んでこられた道を「青竹のように」と題して小説風に上梓されたことは、郷友会に出席の皆様に頒布されましたのでご存知のことと思います。

利発な少女「房子」の温かい家族のぬくもりの中で生いたちに、丹波の風物と程よく描かれていて、また風土記など



も書きしるされ、思わず知らず郷愁に誘われてしまうような自在な筆の運びに感服いたしました。

それも木村さんが調布ブッククラブで短歌を、また文芸同人誌「たきおん」で学んでおられると知り、さもありなんと思いました。

大きな夢と希望を胸に上京、多くの人々との巡りあい、さまざまな体験を経て、

まさに行路の難しさを痛感されたことであ
りましょう。太平洋戦争勃発の年に結
婚、夫の出征、戦後の守りと子育て、戦
災、疎開等は同年代の殆どどの女性が体
験してこられた事柄だけに自分の人生と
オーバーラップして感慨を新たにされた
方も多いのでは、と思います。

戦後復員してこられたご主人の始めら
れた製材業を皮切りに、持ち前の明るさ
と積極性で、ひたむきに協力していかれ
戦後の混乱期の中でさまざまな困難、挫
折に遭遇されても、いつも力強く、前向
きにたち向かって行かれる。その多忙の
中で常に三人のお子さんを大きな愛情を
もって育くんでこられた姿、そして今は
それぞれ立派な家庭を築いてられるさま
は、まさに戦後の女性史ともいえると思
います。

年とともにたくましく、女性として心
豊かに成長された著者の真骨頂は、東京
オリンピックの年、オープンのホテルの
清掃の仕事をして二人ではじめられ、会社を

設立して企業化され、まさに人生意気に
感ずるサクセスストーリーそのものであ
ると思います。

その後、ご主人の看病にうちこまれる
姿は大変なことでありますのに、読む者
をして、暖かい春の日差しを浴びている
ような、ゆったりとした安らぎのころ、
が感じられるのは、この「青竹のように」
が亡きご主人に捧げられた鎮魂歌にほか
ならないと思われてなりません。

老後という言葉がさまざまな意味を含
めていわれていますが、健康に留意され
て創作の趣味を末長く活かされ、福祉の
お仕事にも活躍されることを祈念してや
みません。
(美知子記)

展 覧 会

常岡幹彦氏個展

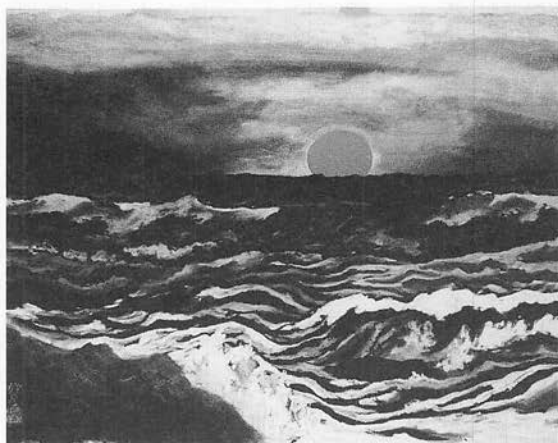
○四月二十日～四月二十八日 神田・ギ

ギャラリー毎日。タイトル「折々の賦」
30号二点、20号二点、ほか15号から10
号まで計二十点を出品しました。

○明年五月開催の銀座・セントラル展に
は、作品の姿を一本にしたいと思ってお
ります。およその目標はありますが
なかなか思うようにはまいりません。

写真はギャラリー毎日に出品したうち
の三点です。「冬響」 忍野の富士・10
号、「月響二月堂」 奈良・15号、「昇る」
日本海・30号。
(常岡幹彦)





可部美智子さん陶芸展

「女流陶芸IN・TOKYO」展が一月末から二月三日まで、渋谷東急本店で催されました。「女流陶芸」は、日本に一つしかない女流陶芸家の草分け団体として京都に誕生し、二十五周年を迎えました。毎年秋に「女流陶芸公募展」として京都市美術館で開かれています。

なぜ女流を区別しなければいけないかの議論はさておき、「女流陶芸」の看板だけでなく、中味の評価あつての東京進出となつたとは喜ばしいことです。

伝統あり、前衛あり、創作に命を燃やしている三十一人の一人として、このイベントを機に、もう一步の飛躍を期しています。
(可部美智子)

可部美智子関係作陶展日程

- 赤坂・乾ギャラリーⅡ赤坂三丁目・陶香堂ビルⅡ四月一日～四月七日。
- 銀座アートホールⅡ銀座八丁目コリド

街Ⅱ五月十一日～五月十七日

○陶光会全国陶芸展(東京都美術館)Ⅱ

六月三十日～七月六日

○新宿小田急百貨店・別館工芸サロンⅡ

九月二日～九月七日

○女流陶芸公募展(京都市美術館)Ⅱ十

月十一日～十月十九日予定



荻野美穂子さん個展

- 三月十八日～二十二日、国際アーティストフェアⅡ晴海東京国際見本市会場。
- 世界18カ国からアーティストが集まり

内外約三百人の作品をそれぞれ個展形式で見せる第一回めの国際アート・エキスポです。今回はイラストをブース出品しました。これからもがんばります。

(赤坂・あとろえぎのこ・荻野美穂子)

氷上文化同好会報告

屋形船「納涼の夕べ」

屋形船が復活して人気を呼んでいるが郷友会副会長の吉住さんが企画された氷上文化同好会主催の屋形船による「納涼の夕べ」が、平成三年八月四日、開催された。この行事は、郷友会に文化同好会がつくられてからはじめての行事で、家族づれや気の合った丹波の仲間約四十人が参加した。

夕暮れとともに、浅草の柳橋を出発した屋形船は、ウォーターフロントが美しい東京湾の夜景を眺めながら、船頭さん自慢の次から次へ出される手料理を楽し



みながら、江戸情緒たつぷりの隅田川を下った。

屋形船は品川のお台場公園で一休みしたあと、紅ちようちゃんが水面にゆれる船べりから冴える屋形船の群れを眺めなが

ら、お酒やカラオケ、おしゃべりに興じつつ隅田川を上った。この間約三時間の船旅だったが、丹波では味えない小宴を満喫した。

(足立静雄)

氷上ゴルフ同好会報告

回を重ねること四十七回、一年に四回のコンペです。から年数にして十二年目になります。やはり同郷のよしみ、気が合っ

て楽しいから続いているのでしょう。それと幹事役の足立謙悟さんに、毎回いたれりつくせりのお世話をしていただいているからでもあります。近ごろは4組ないし5組、どのコースもとりがなくなってきましたが、そこは顔役メンバーにこ

とにかきません。

常連は連戦の結果、みな高ハンデになっ

てしまいました。新人の入賞はいまがチャンスです。ふるってご参加ください。ピギナー、女性も大歓迎。入会ご希望の方は足立謙悟さんにご連絡下さい。

〈最近の成績〉

第四十四回 泉カントリークラブ

平成三年六月十二日

優勝 村上昇、二位 川端明光

三位 村上久美子、B B 渡辺貴美子

第四十五回 習志野カントリークラブ

平成三年九月二十日

優勝 橋爪忠、二位 宮本隆行

三位 村上昇、B B 早瀬徳郎

第四十六回 京葉国際カントリー倶楽部

平成三年十二月十日

優勝 畑義則、二位 橋爪忠

三位 村上久美、B B 松岡恵美子

第四十七回 平塚富士見カントリークラブ

平成四年三月三日

優勝 川畑明光、二位 村上昇

三位 岡林逸男、B B 沢田みさを

氷上囲碁同好会報告

氷上囲碁会は春日建設地下一階「かすがホール」をホーム・グラウンドとして毎

月第三土曜日の午後一時から開いております。囲碁趣味をお待ちの方の多数参加をお待ちしています。

平成三年四月から今年三月までの戦果は次の通りです。○数字は参加回数。

坂上⑨ 31勝 25敗 前川⑨ 25勝 33敗

藤田⑧ 33勝 22敗 上小沢⑧ 29勝 27敗

増田⑧ 13勝 28敗 小日向⑦ 16勝 16敗

足立(源)③ 3勝 6敗 三浦② 5勝 3敗

足立(正)① 6勝 1敗

なお、当囲碁会の師範的存在であった足立源治氏は三月二十九日逝去されました。心からご冥福をお祈りいたします。

また、平成三年八月十五日〜十六日には鶴川温泉「本陣」にて合宿の囲碁会を行いました。今年も合宿の計画あり。参加ご希望の方は坂上勝朗まで。

三つの同期会

平成三年の三月と四月、柏高七回生の同期会が、関東と丹波で行われた。

関東は三月二十一日、新宿西口の嵯峨野で「いい日旅立ち松柏サミット」と名づけた。丹波では四月二十日と二十一日の二日間、円応教が会場で「55 G O G O 熟年同期会」と銘うった。

もう一つは「柏原崇広小学校同期会」が、後夜祭のごとく続いたのだった。

「いい日旅立ち松柏サミット」に参加して

陶山笑子

(旧姓村上・柏原町)

先日は同期会のお世話ありがとうございます。皆さん顔の顔が見られて嬉しく楽しく過ごさせていただきました。皆さんそれぞれの道で活躍されている同郷の人たちの近況を見聞きして、私の生きる励みとなりました。

幼な顔の中に五十余年の歳月が表われていて、苦悩の果ての、自信に満ちたお姿に、幼友として誇りに思えました。

山深い小さな町の懷に生まれ育った私

達が、遠く関東の地に住いして幾十年、言葉もすっかり関東弁ながら、季節の移り変りが山や川に見られ、黄金色した稲



穂の通学路、あのおだやかな風情は、いまも心の奥に残り、ふる里を持つ者の幸せを感じます。

男と女の生きてゆく姿勢は異なりますがそれぞれの道で実り多い熟年のときを過ごしてゆきましょう。人の笑顔の喜びと涙の悲しみのわかる、ゆとりある境地になりたいものです。息子や娘の結婚の時期となりますと、やはり親としての生き方までもが問われることを痛切に感じ、過ぎし日がかやまれます。幸せがどんなものか、息子や娘が自分の手の中で感じてくれることを願うのみです。

この次逢うときは、皆さんどんな心境でおいでになるか、期待し、楽しみにしております。がんばってください。

「GO(55)GO熟年同窓会」

宮野 近

(柏原町)

平成三年四月二十日午前九時、東京駅

ひかり発着ホームの一号車前に集合する約束、息せき切って到着するや電車は動き出す。予定では男四人、女六人が乗り合わせるはずだが、なぜか男は私一人。一対六では多勢に無勢。独りションボリ禁煙表示を眺めていた。「どうしたのよちゃん、いつもの元気はノ奥さんに三下り半でももらったのかしら!」、いわれ放題である。ややあつて車内アナウンス「柏原高校の宮野さん、お電話です」円応教からであつた。「谷川駅に何時に何名ご到着ですか」それでは三時にお待ちしています」と。ここまで配慮してくれたF君に皆は感激した。

前夜祭は六時から無制限である。谷川駅に着いた我々には三時間の余裕があつた。川代峡谷の村営発電所と石龕寺を見学したいと申し入れる。これも心よく引き受けてもらい、円応教のDXバスで春の丹波路を走る。豊かな自然、美しい景観、人情あふれる郷土、かけがえのない故郷、心の故郷が今、眼前に展開する。



なつかしい顔、顔、顔、「あんた今何し
とってん」「ずい分大きくなったネ」
「おおきに、おせわさん」……。

いよいよ六時、五法閣の和室、百余名
の宴会が始まった。関東対関西のカラオ
ケ大会が盛りあがる。みな馬鹿になつて
のドンチャンさわぎ。横綱は朝の六時ま
で。おかげで翌日正午からの本番はいさ
さかグロッキー、うつろな目で校歌を斉
唱。またまたあほらしい馬鹿さわぎが延々
四時まで続く。すっかり疲れ果てて、六
時からの小学校の同期会へと急いだ。

柏原崇広小学校の同期会

移動時間は小一時間、柏原「いりり」
に到着。すでに田貞江先生と中山静江先
生が鎮座します。

「あんたが宮野さん？、可愛い子やつた
のに、街で出会ってもわからへんネ」
「そやけどよう帰ってきてくれちゃった
ネ、まあ、こんな高価な記念品をくれて

んけ、感激やわア……」

そこで約五十年前の「お遊戯」を披露
し、感嘆また感嘆。また今日も、あほら
しくも楽しい夜が更けてゆく。

「みんな過労死はあかんで、命あつての
もの種やさかい」全員納得。そのうち取
つくみあいのケンカまで勃発、なだめた



り、すかしたり、いやはやたいへんな同
期会でありました。

かんれき

えんゆうかい

小田 明子

(旧姓中西・山南町)

昭和七年生まれの壬午、同じ申歳でも
六十年目に一度ある壬申は強運に恵まれ
ると申します。そういえば、私たち東京
に出てきている同級生十数人、大半が学
童疎開を経験し、成長期に食糧難で骨が
弱い世代だといわれながらも、みんなが
たくましく、六十歳の還暦を迎えます。

柏原の併設中学、高校を通じ、猿山の
猿の如く明るいというか、賑々しいとい
おうか、毛が三本足りないおかげで六十
歳になりました。今日も誰かが一声か
けるとサッと集まる申歳集団なのです。

名前は「猿友会」。今年も園遊会ならぬ
猿友会で、ワイワイ、キャアキャア、元
気で集まることを楽しみにしています。

井田 悦子

(旧姓安田・市島町)

昭和七年生まれの私は、今年還暦とい
うほど遠いような気持でいた年にととう
うなつてしまいました。歳月の流れの速
さに驚きます。

戦争中祖母や父の故郷である丹波へ疎
開し、最初は柏原町の石田に住んでいま
したが、父が大阪の関西電力から柏原の
関西電力へ転動して、その後国領、大路
市島へと勤務先が変わるとともに家族で移
動していました。最後が市島でそのまま
永住して実家が市島町ということになっ
ています(弟が在住ひかみ農協勤務)。郷
友会等に出席すると、出身地で一番困る
ことになっている私ですが、市島は私が
東京に来てから住みついた所なので、殆
んど地名が分らず困っている次第です。

祖母が市島と丹波竹田の中間位でし
ょうか、前山村の生まれで、幸世村の
嫁ぎ、父が子供のころに大阪で住む
ようになったそうです。

丹波での思い出は何といっても戦時中
のことが強く心に残っています。小学校
六年の夏崇広国民学校に疎開のため転校
して、そして柏原の女学校、殆んど勉強
とてなく毎日鐘ヶ坂へ木の伐採に行き、
切った木を担いで学校まで戻るのです。
馴れない労働も食べ盛りの年令に、空腹
と戦いながらの毎日でした。そして終戦、
六三三制となり動乱の学生時代でした。
大路からの通学も木炭バスのため、朝エ
ンジンがかからず、乗客皆で後押しをし
てやっと動いたバスに乗って、また遂に
エンジンのかからないときは黒井の駅ま
で歩いて学校へ着いたころには、もう授
業が始まっているような始末です。十キ
ロほどあったでしょうか?今の人達には
想像もつかない時代でした。そのつら
かった時代の我慢と、鍛えたおかげで、昭

和七年生まれの申年の同級生達は皆活動的で、何事にも辛棒強く、今も猿友会等と命名、よく会合を持ち、皆元氣です。

昭和二十八年に結婚して東京に住んで四十年近く、その東京に四年前、主人の会社が茨城県水海道市に移転したため別れをつけて、千葉県流山市に転居しました。千葉都民という言葉があるように東京に近く、皆ご近所も殆んどの方が都心へお勤めです。東京の近くにまだこんな緑が多く自然のたくさん残っている所があつたなんて嬉しい限りです。我家の裏に森があり、春は鶯やカッコー鳥が鳴くのです。家事が終るとよく散策して、松の落葉を見て丹波を思い出しています。子育てもやっと終り、今は長男夫婦孫二人と六人家族で暮しています。東京にいる二男も休みごとに孫を連れて遊びにきます。何の不足もなく幸せでありがたいと感謝しています。

名実共におばあちゃんになってしまったのですが、家族はもちろん近所の子供

達におばあちゃんと呼ばれるのが、チト氣に入らないのですが、食事の仕度も嫁にまかせて本당にご陰居様になってボケては一大事と、遅ればせながら、少々趣味等と思ひ、松戸の古典文学（古文書を読む会）を習いに行っています。なかなかむずかしく、解説するのに四苦八苦です。流山市のふるさと入門講座（古文書を読む会）にも通っています。我が家の庭からもしかして埋蔵金でも出た時に困らないように習うのだと、家族に冗談をいいながら出掛けております。流山にトントランドという木の工房ができ、近いこともあつて、そこへも木の薄い板で作る風景画（マーカーター）や本棚その他、木で作るものの指導を受けながら、下手ですが作つて楽しんでいきます。先日郷友会で二玄社の絵が抽選で当たりましたので、その絵の額縁も自分で作り、家に飾らせていただいております。主人も元氣でいったん定年になりましたが、ひきつづき勤めております。去年の夏には

小学校二年生になる男の子の孫を連れて、丹波の棧敷に眠る祖母父母のお墓詣りに行き、年々発展して行く丹波に驚きながら、柏原での小学校時代、女学校、高校と変動の時期を過ごした故郷を眺めて、子供のころ可愛がつてくれた祖母、苦しい時代を頑張つて育ててくれた父母を思い、自分がその親の年になった今、体が震えるほどのなつかしさを感じました。

この春から近くの農家の畑を借りて野菜作りに挑戦する予定です。

会員の皆様を始め同級生の皆様もご健康にお氣をつけ下さいます。毎年の郷友会でのお目もじを楽しみに、末長く郷友会の発展をお祈りいたします。

澤田みさを

（旧姓田村・柏原町）

長寿時代の今日とはいえ、無事に還暦を迎えられて、ほんとうに神様に感謝しております。お元氣な先輩の方々のお姿を拝見して感心し、見習わせていただき

たいと思います一方で、早逝した友人達のことなども思い出して、共にこの日を祝いたかったと思っております。

思い返してみますと、どの時代も神様のお恵みのもと、家族をはじめ、周囲の方々の温い愛情に支えられて過ごしてまいりました。

戦争は絶対に起こしてはならないという思いは固いものの、柏原での疎開生活では、山国の父祖の地の美しさを味わいたくさんの良き師、良き友にめぐりあうことができました。

微力で何のお役にも立てませんが、自分自身のルーツ、そして若き日の思い出を大切にす意味でも、いつまでも郷友会の末席に連ならせたいだきたいと思っています。

千葉 淳子

(旧姓山内・山南町)

一月十八日、丹波谷川の厄除大神八幡社で厄ばらいの神事が執り行われました。

あらためて六十歳になったのかと思ひ、いやまだまだ若いという気持で小学校の同窓会に出席、久方ぶりの友達と逢い、あったれやいな、わしわかるか」といったなつかしい言葉。

それぞれ久しぶりの顔ぶれ、でも五十余名の中で顔のわかる人はわずか二十人たらず、それでも名前を聞きながら、あの人はこの人は、こんな人だったと、小学生のころのあどけなさが今だにどこに残る懐かしさで一ぱいでした。ともに山川で遊び、苦勞し歩んできた友達同志の会話もつきることなく、時間も忘れ最高でした。

友達の話のいろいろ聞きつつ、自分もセカンドバースデーを迎え、第二の人生を頑張らないという気持を新たにし、みんなでフアイトフアイトのかけ声で別れました。

来年も元気で、またいつか厄ばらいに出かけたいと楽しみにしております。

安原三智子

(旧姓足立・青垣町)

エキゾチックな町といわれる神戸に生まれた私は、国民学校と呼び名の変ったときに入学、この年は紀元二千六百年の年、それにちなんだ歌をうたったように思います。たしか三年生の十二月八日、大東亜戦争勃発。真珠湾攻撃と華々しい時代でした。

五、六年生のころ、次代を担う子供達がおなかをすかしては困るとのこと、学校給食が始まりました。当時は各自がお弁当箱とお椀、お箸を袋に入れて毎日持参し、母親が交替で御飯炊きや味噌汁作りでした。六年生の夏休みも終わったころ、集団疎開で鳥取県八橋町へ出発、学校に集合したときはみんなで行けることもであり、大喜びで、涙ぐんで見送りにきている母親の気持ちは全くわかりませんでした。夜汽車に乗り、車窓が暗くなると、どこからともなくすすり泣きの

声、そのうち全員が家族恋しきで泣き出しました。先生が「戦地で勇敢に戦っている兵隊さんのことを思えば何だ意気地なし」といつて励ましておられました。

長いトンネルを過ぎたころ、互いに顔を見合わし大笑い。トンネルを通ったのときたない手で涙を拭ったので顔があちこち黒くなっていたのでした。八橋町は日本海に面した漁師町。海岸にそって家が並んでいました。毎朝浜でラジオ体操、学校から帰るとオヤツのふかし芋を食べ、町の中を友達と一しよに夕食時間まで散歩。「疎開のこともさん／＼」と声がかかり、その方を見ると「親元を離れて可愛想に」と、ふかし芋を下さる、学校の休みの日は、浜に出て地引網を手伝い、食卓に魚がのります。でも最初は、ゆっくり網を引いているのを見たときは重くて困っていると思い、みんなで「わっしょい、わっしょい」と勢いをつけて引っぱったので、中の魚が逃げてしまい、先生が平あやまりで終りました。ここは二十

世紀や、大きなオク三吉等の産地、これらの果樹園に梨もぎにも行きました。私達の年代は、女学校に入学し、途中で新制中学校、卒業は高等学校、男女共学と今までにない時代の変わり目を肌で感じてきました。今年は年男、年女と、ますます元氣はつらつ？で、年を取って行きたいものです。山ざるにちなんだ猿友会ナインで命名し、日光の猿群団より少々お利口さんを自負している次第です。

小糸イキ

(旧姓大輪・西脇市)

一週間に四回集めにくるゴミ出しの日、必ず目につくことに気づいたのは、半年も前のことだったでしょうか。うず高く積まれたさまざまなゴミ袋を、一つ一ついていねいに、まだ入りそうな大袋には小物を入れ、そのほかはまとめて一つにするという作業をしている人がいたのです。この人のおかげで、都の清掃局の集収車が五分前後かかっていたのが二分

足らずで発車できるようになりました。また収集の後、交代で出る当番の人が少しでもおけると、その方がその場所はもちろんのこと、近隣の道路まで掃除をなさるのです。——ここまでなら、何だそんなことと思わずござれそうですが、私の申したいことはこれからのことです。

その作業をしていられる方とは、一年ほど前に近所に引越されてきた七十五歳くらいの、それも足が不自由でいつも杖をつき、耳もご不自由な男性なのです。

私はあるとき言葉をかけました。「いつもありがとうございます。でもこのように雪が降り天候の悪いときは当番の人がいたしますから」と。するとその方は笑いながら「僕は自分のためにしているので、けっして気がねはいりません」と。

私はよく義母を車いすで連れて出るところがあるのですが、道路の段差に困っているときとか、とびらを開けるとときとか、見知らぬ人がちよつと手を借してくださるその善意に、いつも感銘します。

このごろ、私の頭の中にボランティアという快よい言葉がよぎります。遠くに出かけてするボランティアももちろんりっぱですが、こんな小さな町の片隅にも一人一人がいつでもできるボランティアがあるのだなあと気づきました。今後の生活の中で、どんなささいなことでも、私なりに、社会にお返してゆくものがあればしてゆきたいと、還暦という人生の節目にあたり考えるこのごろです。

お便り・短信

植村章子さん（春日町）

長い間、郷友会にご無沙汰しております。して申しわけなく存じます。

いつも立派な「山ざる誌」を送っていただき、なつかしく拝見しております。

昭和五十八年五月、突然脳血栓で倒れ五十九年十月まで入院しておりました。その節は会長、副会長様お見舞いただき

ご厄介かけました。二週間意識なく、医者から見離されたそうですが、寿命があったか、意識は取り戻しましたものの、右半身不随でした。厳しいリハビリに堪えて、右手の人指し指が曲がりかねるだけで、元の体になりましたが、独りの外出は散歩以外できません。医師から、いつ発作を起こすかわからんからと、迷い子札を持って家の近所を散歩するのが日課です。いつか渡辺様から、車で迎えにいつて、すんだら送り届けるから郷友会に出席するよう、涙の出るようなご親切をいただきましたが、万一のことがあつては皆さまにご迷惑かけると思ってお断りいたしました。温いご心情に陰ながら感謝しております。

今のところ日常生活に支障なく八十九歳の春を迎え、ひたすら召される日をお待ちしております。細見綾子先生の句会にも出られませんが、この頭では句作はむずかしいです。毎日もっぱらベッドでテレビ見たり、週刊誌を週に三、四冊読む

らいで、頭は空っぽです。

物の芽に心遣ひの筈かな

尾長降り枝移りして春誘ふ

佗び棲める身に室咲の華やぎて

散歩路の書店に寄りて日脚伸ぶ

日脚伸び橋裏にある水明り

こんな駄作しかできませんが、細見先生にしばらくでしたがご指導うけたことは何よりの心の糧です。

会員の皆様ますますご健在でご活躍をお祈りしております。

会員の何人かの方々から励ましのお便りもいただきます。御著書もいただきました。ご温情、この紙上で厚く厚くお礼申しあげます。

上野重喜氏（水上町）

美しい表紙と懐しい読物の数々。特に水上政記は有意義でした。まだ名簿から多くの人が洩れているのが残念です。

畑 雅樹氏（春日町）

三十六年間勤務した国鉄↓JRを定年退職しました。管理者は五十五歳が定年

です。現在、鉄道整備KKで新幹線電車の整備の仕事をしております。

余田士郎氏（市島町）

心臓をいたわり、定職にはつかず、年金生活でのサンデー毎日で町内の歩こう会や、学生時代、会社時代のOB会で結構会合があつて、飲み食いだけはおとろえることなく元気にしています。音楽会にも毎月一回を目標に行っています。

常々山ざるを通じ田舎のことを知らせて頂き心より感謝しています。しかし学校生活はすべて東京であり、今の私の子供達は一度しか田舎へ行ったこともないありさまです。私の親戚も殆んど代替りをして、田圃で遊んだ友人も、わらじ作りを教えてくれた年寄りも殆んど居なくなつてしまいました。

足立 治氏（青垣町）

「山ざる」発刊については委員の並々ならぬ御苦労を号を追うことに感じております。

上手下手抜きで楽しく句も遊ぶ 治

能勢 徹氏

初めて「山ざる」拝読しました。丹波の香りを感じました。特に恩師である植田憲雄先生については、御写真とともに懐しく、柏高のくすのきにも郷愁を感じました。今後ともできるだけ写真の掲載を希望します。

須原 清氏（市島町）

年々、バラエティーに富み内容充実するのは嬉しいことです。編集部のみなさんのご苦労を謝するのみです。

東田 実氏（山南町）

年毎に立派な山ざる誌をお送り下され嬉しく拝読致しております。常岡様の絵も楽しく拝見しております。

坂上五朗氏（水上市）

「山ざる」への提案として、総会に出席された方々全員の氏名、出身町名入り写真掲載されてはいかが？「山ざる」を読んでも参加されない方々も懐かしさで参加されるかも。また個別に電話連絡されるかも？、昔別れた旧友は写真を見

ないとなかなか思い出せないものです。

片山日幹氏（春日町）

山ざる誌楽しく拝見しました。寸志ですがお礼のしるし送らせて頂きました。

（元英岳 九十三歳）

野村節三氏（山南町）

「山ざる」誌大変興味深く読ませて頂いております。編集部の方々のご苦労に感謝しておりますが、原稿の「ゲラ刷り」は投稿者に校正を依頼されたいかがですか。作業の省力化と原文の完全を期するためによいと思います。

森下千壽子さん（市島町）

山ざる第二十二号に原稿の依頼を受けたとき、今日まで自分は馬齢を重ねてきただけですから、とてもお受けできないと思いましたが、たとえ短文でもお気軽にと書いてくださっていますと、とてもお断りもできませんボツになることを期待しながら、折り返し拙文を送りました。しかし、日頃不勉強な自分を思い知る大へいよい機会となりました。深く感謝

申しあげています。

澤田みさをさん（柏原町）

表紙の絵も本紙の紙質も印刷も内容もお世辞ぬきにレヴェルの高いもので、楽しく読ませていただくとともに、かわわってくださっている方々に深く感謝申し上げます。今回の『方言調査』、『90丹波の動き』は興味深く読みました。『方言』は懐しく、『動き』は故里の状態が東京ではつきり解りにくいのが、一目で理解できて、急に丹波が近くなった感じがしました。次回も続けてくださるようお願いいたします。

林田孝子さん（柏原町）

立派に出来上りました『山ざる』楽しく拝見致しました。会員の皆様のご活躍に敬意を表します。

杉上能章氏（氷上町）

「山ざる」編集委員の皆様ご苦労の結晶第二十二号をありがとうございます。

今号、扉と目次の池上隆一さん撮影の写真は特になつかしく拝見致しました。

小、中、高校生の頃、雪が降るとこの光景の中を歩き、手で雪をすくっては食べたものでした。二度と出来ないであろうあの思いを、誌上で再び体験させていただきました。蔵王、谷川岳、志賀高原それぞれあのすばらしい冬景色を知っておりますが、やはりこのスナップ写真の雪にはかないません。

この冬もまたこのなつかしい光景が展開されることでしょう。池上さん、ありがとうございます。

兼松千恵子さん

先日の屋形船から見た東京の夜景は、とてもすてきでした。何かとお世話様になりました。

生田清弘氏（柏原町）

回を追う毎に内容が充実して参りました。関係各位のご尽力の賜と敬意を表しますとともに感謝致しております。

坂本重雄氏（柏原町）

毎号すばらしい編集と読みごたえのある文章がのせられていて楽しませて頂

いております。

猪川節子さん（岡山県）

りっぱな本でいつも感激して読ませて頂いています。この種の本では他に類例を見ないのではと思っています。

山ざる誌に魅せられて

中野真理子

（柏原町）

最近「山ざる」誌をはじめて見せていただいた。第22号とある。年一回の発行ならば22年も前から発行されているらしい。こんな立派な雑誌が関東氷上郷友会の機関誌なのだ。私は一瞬「取り残されたような感」をおぼえた。

私は関西で職業を持ちながら子育てもした。職業と家庭の両立はむずかしく、結果的にはどっちつかずになってしまった。はじめのうちは同期会どころではなかったが、退職して自分の自由時間ができ、余裕ができて、あまりにも疎遠に

すぎたので出席をしぶるようになる。

目の前に「還暦」が待っている。いま六十の手習い」とやらをはじめた。

山ざる誌の表紙画は、夢のような色彩の風景である。見とれていたとき、所用で来ていた親戚の者が「いまごろこんなところあるんだろうか」と問う。私は心の中で、丹波のどこかにちがいない、もしわかれればいつかその人を案内したいと思う。八幡山や木の根橋のイメージが重なる浮かんできくるのだ。

「山ざる」という誌名は誰が名づけたのか、丹波人を象徴しておもしろい。丹波の田舎育ちが、都会の人々をあつといわせるようなことをする、そんな心意気さえ伺われる。「生き馬の目を抜く」といわれる東京での生活は、たいへんな苦労や努力がいるだろう。だから山ざるのような機関誌が生まれ、育くまれたにちがいない。私の弟も二人東京に住んでいる。だから私も弟ぐらいの年令の人には仕事の上でも特に気をとめ、親身に対応して

きた。弟たちも東京できつと誰かにそうしてもらうことを信じて。

口絵の写真に見入る。谷川駅あたりに帰郷したような錯覚におちいる。次頁はこれぞ丹波の雪景色であり、特有の静寂が伝わってくる。次の頁には桜がのびのびと枝を張って、昔ながらの花ざかり。

「山ざる誌こそ会のかなめ」を読み、発刊にいたるまでの関係者諸氏の陰のご苦労を思い、すべてボランティアであることにも驚く。異郷に住む人たちに心の安らぎを与え、希望とファイトを湧かせることだろう。良き後継者を得て、いつまでも号を重ねられることを切望する。

上久下の村営発電所のこと書かれていた。私は五十年ほど前にその発電所を見た。きれいな透明な水が集まり、音を立てて流れ落ちていた。この発電所に勤めていた青年が出征して、ビルマの地で二度と帰らぬ人となったことを、いまでも忘れられない。素直で明るく、やさしい人だった。

「柏原町歴史民俗資料館」は尊敬する藤本先生のお陰で美しくできていた。昨年帰郷したときは時間がなくて入館できなかったが、織田信長がリバイバルのいま、まことに有意義なことだ。私は柏原藩陣屋跡の長屋門をくぐり、書院造りの風格ある玄関を見ながら六年間、通学した。いまもそれを誇りに思っている。歴史を象徴する高い老松も目な裏に残っているが、松食い虫のせいかな、その姿が見られなかったのは淋しく残念だった。

若くオペラの道を究めている方、それぞれに夢を実現しようと一筋にがんばっている方々の随筆は、とてもうれしく、感嘆と尊敬の念を禁じえなかった。

ブームに乗った太平記に、いわれのあるお寺も郷土史も、歳のせいかな、興味津津なものがあった。

「方言」これもまた興味あり。学院時代の私を代表する丹波言葉は「なんじやいな」である。「どうしてです、何です」という意味だが、言葉よりもそのイントネーシ

ヨン、私が頸をしやくつて強がるさまがおもしろかったのだろう。兵庫神戸の「なんじや」という言葉もある。「なんじやいな」を「なんじやいね」といつて張りきっていた若き日がなつかしい。

郷友会の皆さまのご多幸とご発展を、心よりお祈り申しあげます。

元気でいつてまいります

足立さつき

郷友会々員の皆さま、私は文化庁芸術家在外研修員として十二月七日成田を発ちイタリア、ミラノに留学いたします。

私はデビューをいたしましたして四年たちましたけれども、その間なにもわからないうち無我夢中で、いろんな舞台やお仕事をして今日までやってまいりました。

そうしていろんな方に助けられ、周囲の方に励まされ、そして共演した方々と一緒に、楽しいお稽古、苦しいお稽古を乗り越えて、なんとかここまで、やって

これたような気がいたします。

中でも一番心の支えになったのは、郷友会々員の皆さまの応援と温い拍手でした。これからの二年間、日本を留守にいたしますので、舞台を通して皆さまとお会いすることはできませんが、皆さまのお顔、お声、笑顔に励まされて、歌に演技にしっかりと勉強してまいります。

二年後に帰国いたしましたして、皆さまのお元気なお顔と再会し、私の成長した舞台を見ていただきたいと心から願っております。何卒今後ともよろしくお願い申し上げます。

「では元気でいつてまいります！」

さつきさん行つてらっしゃい

吉住自由造

産経新聞の「芸術とこころ」で、三田佳子さんと対談された高田宮さまの話の中にこんなのがありました。

「以前、オペラのキリ・テ・カナワ（ソ

プラノ）と話したとき、なんと五年先まで予定が入っていると聞いてびっくりしました。五年先のその日に向けてコントロールしていくわけですが、その間にも仕事が無数に舞い込んでくる。大変だろうと思います。われわれは、多少顔色が悪くても、そこに居れば何とかサマになるし、スピーチのとき、しわがれ声でもかまわない。しかし歌手はそうはいかない。予定に合わせて体調をコントロールするのは大変なことですね」といつておられます。

私はこの話を聞いて、すぐ、イタリアに留学するあなたのことを思いました。

あなたはオペラ歌手として最も将来を嘱望され、注目されているのです。周囲が放っておくわけがありません。

留学を終えて帰国されると、むやみに忙しい日々が続くことになるはずですよ。

スリムだが健康には自信があり、何ごとにも意欲的で責任感が強く、サービスピ精神に富んだあなたのことから、留学

中も一生懸命頑張られると思うが、どうか帰国後のことを考慮して無理しないよう、体力作りを第一に心掛けてほしい。

すきな言葉ではないが、競走社会の日本では健康序列ということさえいわれています。ゆとりのある生活をし、体調をコントロールしてほしい。

はなむけの言葉としては、頑張つてきて、と激励すべきでしょうが、将来を慮り老婆心までに申しあげておきます。

あなたの留学されるミラノを見ておきたいと思ひ、ジュネーブ滞在中の七月に行ってきました。「古いものと新しいもの、その両方で美を求める旅人をも決して失望させない都市、それがミラノだ」と聞いていました。そのとおり魅力溢れる大都市でした。

特にこの街はイタリアオペラのメッカであり、世界に名だたるオペラの殿堂スカラ座があり、街には芸術的雰囲気横溢していました。

この現代のイタリアの顔といわれる、

良い環境の中で、歌に演技に勉強されるあなたはほんとうにしあわせです。

さつきさんおめでとう。

「元気でいつてらっしゃい！」

あたたかいご支援に感謝

足立 洋子

丹波は、厄除さんをすぎると春めいてくるといわれています。春日の里も心なしか春の気配を感じるこの頃でございます。城山を背にした興禅寺のお堀の水も、少しずつやわらかさを増してまいりました。

関東氷上郷友会の皆様方におかれましては、益々おすこやかにご活躍のこととお喜び申しあげます。

つきましては、昨年五月、足立さつきの「椿姫」公演の際には、みなさま方に絶大なるご支援を賜わりまして誠にありがとうございます。厚くお礼を申しあげます。おかげさまで無事ヴィオレッタ

役を演じることができました。これひとえに関東氷上郷友会のみなさまのあたたかいご支援、ご声援の賜ものと深く感謝申しあげます。そしてその後も、公演のたびに郷友会のみなさまが多勢かけつけてくださり、あたたかいはげましのお声をいただきましたこと、親子ともども、ただただ感謝申しあげるばかりでございました。

このたび、さつきはミラノへ旅立ちました。二年間、イタリアを中心にオペラの勉強を続けまして、平成五年の秋には帰国する予定となっております。帰つてまいりましたら、またみなさまのお世話に相成ること存じますが、今後ともどうぞよろしくご支援のほどお願い申し上げます。

誠に言葉が足りず、意をつくせませんが、この紙面をお借り致しまして心からお礼申しあげます。どうもありがとうございます。

郷友会のみなさまの益々のご健勝とご

発展を、春日の里よりお祈り申しあげて
おります。

足立さつきのCDを！

市場 暉子

足立さつき後援会事務局長

足立さつきは昨年末より文化庁在外派遣研修員として、イタリア、ミラノに派遣され目下歌に語学にと勉強中です。

たいへんな難関といわれる文化庁の選考を通り、みごとこのチャンスを掴みました。こころ、二年の彼女の活躍ぶりと、その実力のほどを御存知の方にはご納得のゆくことと思いますが、特に氷上郷友会の多数の方々に、主役を歌ったオペラ「椿姫」の舞台を御鑑賞いただけたのはいへん嬉しく、強い味方を得た思いでした。

また春日町文化ホールでのふるさとコンサート「第三回・足立さつきリサイタル（写真）」には、観光もかねて後援会々員二十名が応援に駆けつけていただきました。丹波の里で、地元の皆様とともに聴いた名唱の数々は、一段と味わい深く感

動的でした。

彼女が研鑽を積んで戻ってくるのは来年の秋ですが、幸いなことに出発前にソニーレコードからC・Dが発売出されました。大好評で売上げも急上昇ですが、まだお聴きでない方へ、オペラ・歌手 足立さつきの留守の間は、どうかC・Dを身代りにお楽しみいただきたいと思います。

「足立さつきLA PROMESSA」

SRCR8668 ¥2800

入手になりにくい方には後援会事務局がお世話致します（送料別）

事務局 TEL 03（3858）1219

兵庫県民会館と満浦謙之さん

そういえば、有田喜一先生がお元気なころだった。ご存命の時代、「宮野君、県人会の満浦君のあの態度を見習いなさい」といわれたことを思い出す。

兵庫県東京事務所の次長として活躍し

ておられたお姿が、今なお私の脳裏から離れない。実直で真摯な態度は多くの人達に感銘を与えたにちがいない。

ホロンピアの旅行のとき、満浦さんには大変なご迷惑をお掛けしてしまった。ここに謹んで心よりお詫び申しあげます。

その満浦さんが「宮野さん!! あのこと、は、よろしいやないですか、水に流しましようよ、それよりも私は今、兵庫県民会館の仕事をしております」……とのお手紙を拝受。

結婚式・同窓会・ご一族の集い……等々には最適の場所の様子。「関東氷上郷友会の会員の皆様のためなら、できる限りのことをさせていただきます!!」……との有難いお便りであります。(宮野 近)

寄付者芳名録

●片山日幹殿
●小谷正雄殿

五〇〇〇〇円
四五〇〇〇円

●小川晴通殿

四〇〇〇〇円

●渡辺ひろ子殿

二〇〇〇〇円

●兵庫県人会・森本浩三殿

一〇〇〇〇円

●竹村政雄殿

一〇〇〇〇円

●塚口生郷殿

一〇〇〇〇円

●常岡 昭殿

一〇〇〇〇円

●常岡昌子殿

一〇〇〇〇円

●畑 秀夫殿

一〇〇〇〇円

●堀井隆川殿

一〇〇〇〇円

●三替洋子殿

一〇〇〇〇円

●足立かをる殿

五〇〇〇〇円

●坂上 明殿

五〇〇〇〇円

●坂上五朗殿

五〇〇〇〇円

●須原 清殿

五〇〇〇〇円

●田中篤郎殿

五〇〇〇〇円

●徳枘紘逸殿

五〇〇〇〇円

●松永富士殿

五〇〇〇〇円

●足立真一・松子殿

三〇〇〇〇円

●井本義一殿

三〇〇〇〇円

●植村章子殿

三〇〇〇〇円

●木呂子恵美子殿

三〇〇〇〇円

●永井 勇殿

三〇〇〇〇円

●波多洋三殿

三〇〇〇〇円

●高見嘉都司殿

二〇〇〇〇円

●小田明子殿

一〇〇〇〇円

●林田孝子殿

一〇〇〇〇円

●東田 実殿

一〇〇〇〇円

●村上末吉殿

一〇〇〇〇円

ご芳志まことに有難うございました。厚く御礼を申しあげます。広告協賛金とともに、会の運営費や「山ざる」誌の制作資金として活用させていただきます。

計 報

平成四年三月末までに事務局にお知らせいただいた計報は左記の通りです。

足立源治殿 平成四年三月二十九日

江間時彦殿 平成三年五月十五日

竹村政雄殿 昭和六十三年

中村道子殿 平成元年

謹しんでご冥福をお祈りいたします。

'91丹波の動き

— 丹波新聞の見出しから —

政治・行政

- 平成三年度の県施策を発表 寝たきり老人ゼロ作戦「丹波に縁ゆたかなサイクリングコース」整備 (1・6)
- 平成二年十一月末現在の丹波の人口十一万八千三十九人 (1・10)
- 篠山町は待望の新庁舎着工へ 総事業費は二十三億円 (1・17)
- 焼却灰の資源化施設 敷地造成に着手 (柏原町) (1・20)
- 丹南町長選激しい舌戦の火ぶた 杉本、河南氏が立つ (2・7)
- 丹南町長選杉本氏が大差で再選 現職の強みを発揮 (2・14)
- 平成三年度丹波関係県予算 並木道中央公園を整備 ヘリポート適地調査も森

- 構想に沿い施策 (2・14)
- 市島町長選に吉田氏、正式に出馬表明 懸案事項の解決を (2・17)
- 市島町の国際交流 今年は留学生七人小、中学校で交流会など (2・17)
- 風雲急の県議選 畑、梶川氏が出馬表明 現職と「三つどもえ」か (2・17)
- 市島、春日トップに予算町会 市島町予算総額五十一億五千万円 前山小体育館を改築 春日町予算総額は六十一億円に 東部簡易水道に着手 (3・3)
- 藤原県議の質問に知事ら答弁 下排水対策やヘリポート 丹波文化会館は立派なものに 鐘ヶ坂の改修も (3・7)
- 県議選が近づく 氷上郡は「無風」か 多紀郡は三つどもえの激戦か (3・10)
- 丹波十町の予算総額六百十億円を超す 氷上町総額九十九億五百万円 町営住宅、北小学校プールなど (3・14)
- 一月末丹波の人口 十一万八千八百八十人 (3・14)
- 氷上郡の県議選無風から一転選挙戦へ 大西氏が出馬表明 (3・17)
- 夏の氷上町長選に小森町長が再出馬表明 (3・21)
- 春日町の振興計画 まず生活基盤を充実 火葬場や下水道は急務 (3・24)
- 県議選 氷上郡選挙区には二議席へ現職二人、新人一人、多紀郡選挙区では一議席に現職と新人二人 (3・28)
- 県議選終盤にかける各陣営 得票増へ 藤原、村上両氏 大西氏も上昇ムード (氷上郡選挙区)
- 藤井、畑氏の篠山決戦「全力投球」の梶川氏 (多紀郡選挙区) (4・4)
- 町長、町議選告示迫る 市島町長選は新人同士一騎打ちへ 春日町長選は現職再出馬で「無風」か (4・7)
- 県議選藤原、村上 (氷上郡) 藤井 (多紀郡) 氏の現職組がそろって当選 藤原三郎氏「下排水整備などに全力」村上 旭氏「七選の栄に恩返し」 ショックもちらり

藤井正一氏「複線化の実現に全力」福祉
対策の推進も (4・11)

○町長選 市島は新人同志の一騎打ち
春日は無投票で村上照雄氏再選 青垣町
今田町は無投票 (4・18)

○統一地方選挙終わる 市島町長に吉田
照三氏初当選 市島、春日、西紀の三町
の新町議も決まる (4・25)

○ふれあいの祭典⁹¹ 山南をメイン会場
に (5・2)

○〈兵庫二〇〇一年計画〉丹波地域の方
策 快適な生活空間「丹波の森」の形成
交通基盤の整備 健康・福祉対策の推進
も (5・26)

○山南町では学校統合 体育館など建築
費の住民負担廃止 (6・16)

○市島町の助役に阪東仁氏 (6・23)

○部落解放基本法の制定求める 部落問
題解決へ大会決議 国民運動水上実行委
が発足 (6・23)

○水上町南地区で公共下水道 七年がか
りで着工 (6・27)

○四月末丹波の人口 十二万八千五百十
七人 (6・30)

○福知山―青垣―津山間の国道昇格運動
展開 自動車パレードも計画 (7・4)

○丹南町議選三人超の二十一人立候補
「激しい舌戦」を展開 (7・11)

○市島町川東地区の集落排水終末処理場
の建設着手 (7・11)

○焼却灰を資源再生化 自治体では初の
プラント導入 柏原町小倉で (7・21)

○水上郡の平成二年の人口動態 死亡
(七五八人)が出生(七四六人)を上回
る (7・21)

三大死因(心疾患、がん、脳血管)変わ
らず(柏原保健所発表) (7・21)

○丹南町の新町議十八人決まる 新人の
進出目立つ 女性が初議席 (7・18)

○河川水質検査の結果 生活系汚水の影
響大(篠山保健所調査) (7・25)

○多紀郡の人口動態 出生三七〇人、死
亡四二五人 (7・25)

○国道昇格運動をPR 京都府福知山市

―青垣―岡山県津山市
○氷上町長選小森氏無投票で再選 町議
選では二十二人が立つ (8・1)

○丹南町の味間小 児童数の急増で来年
度に校舎建築 (8・4)

○氷上町議選で新顔が全員当選 二十人
の町議決まる (8・4)

○町道大手線(篠山町)三十年ぶりに全
線開通 新市街地形成に期待 (8・4)

○奥野々峠改修工事を陳情 (8・11)

○みんな集まれ ふれあいの広場へ 数々
のイベント展開 山南で (8・18)

○丹波の森構想にもとづく「丹波芸術村
構想」の演劇関係者が意見 (8・29)

○青垣に特養ホーム誕生 ふれあいの郷
「もくせい」 (9・1)

○丹波八十八歳以上が百人超す 百歳以
上老人は七人 (9・5)

○独居老人ら四〇四人が利用 緊急通報
システム開始以来四年 病院に搬送三十
二件 (9・8)

○丹南町の宇土・岩崎地区処理場建設に

着手

(9・12)

○丹南町の給与、報酬の改正案 町長が七十二万円、議長二十八万円 (9・12)

○給与・議員報酬のアップ西紀町も提案

(9・15)

○平成三年七月末丹波の人口 十一万八千三百七十六人 (9・15)

○人口増がハイペース 町づくりに大きな影響 丹南町の住吉台の入居は五百世帯超す (9・22)

○JR複線化に夢膨らむ 新三田―篠山口間県の予算措置に対応し多紀郡四町も負担金計上へ (9・29)

○青垣町議会議員報酬アップ案否決 三役給与は引き上げ (9・29)

○柏原町議選定数二人超過で舌戦 現職十三人と新顔五人

○JRの複線化の負担金 今田町四四〇万円、丹南町二二六〇万円 (10・3)

○子育ての真髄を指導 育児不安の増大に教室を開講 (10・6)

○柏原町議決まる 女性新人トップ当選

低調ムードで投票率ダウン (10・10)

○台風十九号被害に減税 町税減免条例を可決(春日町議会) (10・13)

○十五年連続で全町黒字 丹波十町の平成二年度決算見込み 地方債依存度は増加(県民局まとめ) (10・13)

○不祥事の責任とる 青垣町議会議員が辞職 (10・27)

○町民におわびの文書 総務常任委員長も辞任 不祥事にけじめ (10・31)

○丹波二時間人間ドック 昭和五十七年以来的の受診者は延べ七五〇〇人 胃ガンの早期発見も(柏原保健所) (11・10)

○山南町初の下水道 草部の農業集落排水事業が完成 (11・10)

○篠山町議選現職強し、全員当選 投票率七九・八六%と低調 (11・21)

○ふるさと市島未来塾が町出身者の会結成へ 古里と全国結ぶネットワーク (11・24)

○篠山町河原町住宅が周囲の景観にマッチして建設大臣賞を受賞 (11・28)

○春日町国領 大路地区に水道『三宝ダム』から給水 平成六年の完成めざす (11・28)

○下水道建設に特別委 丹波文化会館整備も(柏原町議会) (12・1)

○春日町長が新庁舎位置を検討へ 委員会に諮問 (12・8)

○平成四年四月から石生、市島両駅再び無人化へ 谷川、黒井、広野は夜間無人に JR西日本鉄道部設置で合理化

○栢野(市島町梶原)の開発に着手 住友グムのスポーツ研究所など建設 現地で起工式 (12・12)

○十月末丹波の人口 十一万八千六百二十九人 (12・5)

○新成人は一、六一九人 氷上郡は増多紀郡は減 (12・19)

○柏原町は福祉基金条例を制定「ふるさと創生」の福祉版 (12・22)

○水遊びのできる川に 氷上町香良のイリズミ谷川を改修 (12・26)

○篠山町郡家の旧「たんば荘」解体へ

撤去後は駐車場として整備 (12・26)

○水上町長給与は七十三万円に 議員報酬もアップ (12・29)

事業

○国道四二七号播州峠三年後に全線開通
トンネル工事着工へ (1・10)

○豊岡自動車道は五月に協議 (1・10)

○北近畿豊岡自動車道の水上町大崎で杭打ち式 春日町と青垣町間 (2・7)

○青垣の里にもみじロード 小倉、大名草間の国道五キロ 五年計画で近く着手 (2・24)

(柏原土木事務所)

○柏原町の国道修景事業の二期工事急ピッチ けやき四十本を植樹 (3・3)

○篠山町大手線延長工事に着工 市街地を南北に縦断 (3・7)

○川代ダムほぼ完成 丹波と播州の「水のかけ橋」試験湛水スタート (3・24)

○舞鶴自動車道 福知山―舞鶴二十三・七キロ 二十六日から供用 (3・24)

○篠山町南新町の篠山川桜づつみ事業が

完成

(4・4)

○「水分かれの社」整備が完成 高低木二千本を植栽 水上町では憩いの山として活用 (4・4)

○建設省の桜づつみモデル事業に青垣町の加古川を認定 (4・21)

○県道篠山ルート南バイパス 太田地区で使用始める (5・16)

○柏原土木事務所管内で新規事業三十六カ所を計画 総額は約六十億円 (前年比十一%増)

○柏原駅前修景事業第二期工事終わる第三期工事のプランは新駅舎に合うものと協議 (5・30)

○「三宝ダム」建設へ 水害防止や生活用水に 県と地元が協定 (5・30)

○鐘ヶ坂峠が全面開通 引き続き防災対策 (柏原土木) (6・6)

○トンネル (西谷―打坂) 建設へ 西紀丹南線の延長で整備計画図 (9・5)

○新しい丹波のシンボルJR柏原駅華やかに「山の駅」完成 祝賀行事で大にぎ

わい

(9・26)

○モダンな東角橋 (青垣町佐治) が完成 親柱に「もみじ」や「春蘭」をあしらって (10・10)

○歩道がある金屋橋 (山南町) が完成 (10・13)

○修景事業三期工事始まる 柏原駅前のグリーンベルト周辺は検討中 (10・27)

○県道朝坂―山南線三・七キロの道路改良着工以来十八年ぶりに完成 (11・17)

○国道四二七号播州トンネル着工 青垣町大名草で安全祈願祭 (11・21)

○県道朝坂―山南線の開通式 テーパカットやくす玉で全線改良工事完成を祝う 地域振興に期待 (11・24)

○北近畿豊岡自動車道の青垣―和田山間の十二キロの環境影響評価準備書が青垣町などに送付される (12・5)

○丹波並木道中央公園計画 川代ダム下流域の山林一三二ヘクタールに建設 (12・2)

学校・教育

○小学校の新生、昨年より七十四人減少 新生十人台は五校 (1・13)

○全国春の高校バレー県大会に氷上高校と柏原高校が出場 初めから強豪と対決 (1・27)

○幼児減少で経営難 五保育所が共同歩調 市島町で運営研究会発足 (1・27)

○全国高校春のバレー県予選会で柏高は準決勝で敗退 (2・3)

○カギ子十人に一人 半分以上がファミコン持つ 氷上郡教委の小、中学生実態調査 (2・7)

○春の高校バレー氷上高校が県大会で優勝 全国大会出場決まる (2・14)

○上空百メートルをスイスイ クラス全員が協力し合う 氷上町北小の五年生八十人が連ダコ作る (2・17)

○思春期セミナー開講 氷上町教委が新中学生と保護者対象に (2・24)

○丹波地方の中学生一七二七人が卒業

(3・7)

○コンピュータ教育の推進に「教育研修棟」を建設 生涯学習課を設置(氷上郡教委) (3・21)

○氷上高校女子バレーボール部 悲願の初優勝飾る！失セットゼロ、完全試合達成 (3・28)

○柏原高校長に永井壮一郎氏 氷上、多紀郡の校長異動 足立洋子新井小校長、塚口欽一上久下小校長、細見嘉夫竹田小校長、上田雅之前山小校長、大槻巍市島中校長、村岡正廣山南中校長、大對啓司八上小校長、長沢幹男畑小校長、倉田田置小校長、清水民五郎後川小校長、小林弘二大芋小校長、酒井美智代村雲小校長、和田道春西紀小校長、田中祥元古市小校長 (3・31)

○やつたぞ初優勝！黒井駅前で氷上高の女子バレーボール部が報告会 (4・7)

○国公立大学に六十人 柏原高校の今春合格者延べ人数 (4・18)

○柏原高校からオーストラリアへの留学

生 夏休み中の約三週間 女子生徒ばかりの十人 男子は留学に消極的 (5・23)

○「平和の尊さ」再確認 氷上町中央小児童らが広島の修学旅行で千羽鶴託す (5・30)

○鴨庄小のふれあい学習 秋に鴨庄音頭を発表 地域の文化遺産継承 (6・9)

○柏高女子剣道部が県高校総体で過去最高の堂々三位 (6・13)

○氷上高校はボランティア活動でJ R黒井駅など清掃 (6・27)

○昨年度の問題行動集計 中学生の窃盗万引き三十六件、小学生は全般に減少 (氷上郡教委) (7・7)

○氷上西校の移転問題 子供の数の減少で分校、廃校が心配 (7・11)

○氷上高校の就職好調にスタート 求人件数が最高記録 (7・21)

○青垣町芦田小で児童対象に歴史教室 氷上郡教委が東芦田遺跡で (7・25)

○「国際交流の体験」をと西紀中生徒ら

中国広東省訪問へ (7・28)

○氷上西高が大学進学などに対応し、学習合宿 (8・1)

○春日町進修小で蛍と錦鯉のフ化に成功、理科観察にも一役 (8・4)

○身長二メートルの好青年！ライニアソンさんが柏原高校英語指導助手に着任 (8・11)

○柏原高校に伝わる「思無邪」と大書の元総理大臣芦田均氏の遺墨 国会・憲政記念館で展示 (8・25)

○氷上高校で丹波生活改善グループの集い 特産物に付加価値を (9・1)

○同和問題で意識調査「結婚を祝福」半数弱 (氷上郡教委まとめ) (9・12)

○氷上西高校の充実を 氷上郡PTA連合会が郡内で署名運動を展開 (9・26)

○体格、よりたくましく！中三男子は四・八センチ増 二十一年前のデータと比較 (10・13)

○郡内高校学級数維持を要望 中卒予定者八二人の減で (氷上郡) (10・20)

○募集定員の現状維持を 高校問題で署名運動 (多紀郡) (10・24)

○氷上西高校文化祭に近隣のお年寄り招く、生徒の体験発表に感動 (10・31)

○柏原高校の民間企業就職者 男子就職わずか五人 今までにない低調ぶり (11・7)

○崇広小六年生の合唱 MBSコンクールで念願の最優秀賞を獲得 (11・10)

○氷上郡教委の研修棟完成 埋蔵文化財調査に最新機 (12・5)

○大幅な定員減回避 一学級を一律四十人に引き下げ (氷上郡) (12・12)

産業

○六十年の歴史に終止符 日本たばこ柏原営業所が閉所 (1・13)

○春日町多利「日ヶ奥」の整備進む「愛ランド公園」標柱 (1・13)

○舞鶴自動車道春日インターの年末年始の通行量新記録へ (1・13)

○平成二年度水稲の作況指数「九八」の

やや不良 だが前年より増収 (1・20)

○丹波ひかみ農協が盛大に合併式典 地域に密着した組合に (1・24)

○丹波の今春高卒予定者の地元就職率は三四・八% 昨年十二月の求人倍率は一・九七倍「人手不足」物語る (1・27)

○温水プールが完成オープン (ピュアスポーツ柏原) (1・31)

○建設業の人手不足目立つ 依然人手不足が深刻 景気先行きに不安も (中兵庫信用金庫まとめ) (2・7)

○丹波ひかみ農協が初の選挙 新総代六百人を選出 (2・10)

○ふるさと探訪列車を 都市と農村との交流に 貝原俊民県知事が前山ふるさと農園を視察 (2・14)

○福知山線複線化に熱い期待 アンケート調査の結果 (3・7)

○城下町を大胆に変革 商業地再開発で協組 (篠山町商工会) (3・17)

○転作田を花のじゅうたんに 丹南町油

井でれんげ花まつり開催 (4・21)

○地域の魅力アップなどを提言 Uター
ン就職の推進に 冊子発行 (4・21)

○美酒の香りいっぱい「きき酒会」に二
百八十六点(丹波杜氏組合) (4・28)

○平成二年度分一千万超の高額納税者
丹波は倍増近い九十九人 譲渡所得者が
七割(柏原税務所公示) (5・2)

○春日町の遊農園オープン 貝原県知事
も山の芋植え 家族連れで大にぎわい
(5・2)

○丹波初の本格的なペンション 篠山町
新荘にオープン 篠山町の小島さんが経
営 自慢の料理を提供 (5・19)

○自動車税お忘れなく納税を 課税額は
十三億円余 県税収入の十八・一％に
軽自動車含めた保有率 一世帯二・二九
台(柏原財務事務所管内) (5・23)

○篠山町農協と丹波農協合併へ向けて協
議 研究委発足に注目 (5・26)

○個性あふれるログハウス村 会社の保
養所に活用 フィンランド風別荘も(氷
上町三方) (6・2)

○丹南町の四季の森会館前四・五アール
を枝豆もぎとり会場に 秋の味覚まつり
で開放 (6・2)

○市島町塚原に養魚池、つりぼりが完成
町営「こぶしの郷・アマゴの家」がオー
プン (6・6)

○青垣町で全国もめん展開幕 木綿のぬ
くもり伝わる 二十九都府県から二百五
十点出品 (6・9)

○来春丹波の高卒就職希望者は三十二％
地元企業へは大幅減に (6・13)

○「ウナギの住む川」に 五河川に六百
匹放す(青垣町観光協会) (6・16)

○見直される葉枯らし スギ材乾燥の昔
からの技術 丹波年輪の里で今年度から
独自に調査 (6・20)

○「第二の人生」は就職難 人手不足と
は裏腹「高年齢者の雇用を」(柏原職安)
(6・30)

○天敵放ち丹波栗守る クリタマバチ防
除に柏原農改が氷上町で試験 (6・30)

○ポーナスの意識調査「貯蓄志向強く、
堅実型」平均は四十七万二千元(中兵庫
信金まとめ) (6・30)

○ピーマンの出荷順調 中旬から一氣に
本格化(丹波農協) (7・4)

○高値呼ぶ「春日ナス」悪天候で出荷伸
びず (7・7)

○春日町国領に農村改善センターが完成
(7・18)

○味よし「大山スイカ」出荷順調ピーク
(8・1)

○新鮮な地場野菜が人気 氷上町常菜で
毎週土曜に青空市 (8・18)

○人手不足に高額アップ 高卒男子は約
十四万四千元 週休二日制も浸透 丹波
地方の今春の初任給実績(柏原職安調べ)
(8・22)

○神姫バス(株)が「バス交通問題対策懇話
会」開く 黒字二十、赤字五十九路線
(8・22)

○黒大豆に害虫多発 篠山農協が防除呼
びかけ (9・8)

○新メニューに「鳳鳴御膳」「特産館さきやま」が五周年記念で開発 (9・15)

○今年の作柄は不作か 早生栗の出荷始まる (市島町農協) (9・19)

○「鳳鳴汽車ポッポ」多紀酒造が「山の駅」祝って販売 (9・22)

○「味の宅配便」始める 四季の特産品めて (丹波農協) (10・6)

○丹波篠山味まつり「山椒壺道中」復活 観光客の熱い視線 (10・17)

○安値販売に長蛇の列 今田町の陶器まつりに十万人 (10・24)

○市況の大暴落でピンチ 鉄スクラップに引取料 (氷上・多紀金属組合)

○低農薬野菜をどうぞ 市島未来塾が三ツ塚公園で朝市 (12・1)

○氷上郡産和牛の名声高まる 三重松阪肉牛共進会で但馬牛のブランド実証 (12・8)

○篠山せいもん払い 香港旅行に六人招待 福引抽選会を開く (12・15)

○本年度米の集荷量限度数量に達せず

日照不足や低温影響 (県経済連柏原支所まとめ) (12・29)

社会・文化

○検挙、補導が大幅増 昨年の少年非行状況 (篠山署) (1・13)

○火災四十二件で死者三人 損害額も前年の七倍 救急件数は最高を更新 (氷上郡消防本部まとめ) (1・20)

○窃盗犯が増加する! 百八十四件を検挙 (柏原署まとめ) (1・20)

○車上狙いが六十三件も 自転車盗は倍増 (篠山署まとめ) (1・20)

○木彫のダルマを製作 卒業生全員に贈り十二年 柏原中の足立教諭退職で今回が最後に (1・24)

○祥舞会が舞初め 一年の精進を誓う (1・27)

○黒井城の保存整備へ 県下最大級の中世山城 保存管理委員会も (1・31)

○卒業記念に小型湯のみ 校長先生がコツコツ作る 在校生には進級祝い (青垣

町神楽小学校) (1・31)

○室町期の鰐口 柏原町の神社から流出し和歌山県の文化財に 今秋の特別展に里帰り (2・10)

○篠山町の武家屋敷跡発掘で木杵の池 (防火用) など出土 (2・10)

○二日間に九万八千人 参拝者らで大にぎわい「雪」の厄除け大祭 (2・21)

○「今昔」の息吹き伝える 古丹波焼きと現代作陶展 (2・21)

○大公孫樹が若返りへ 山野忠彦樹医が治療 (市島町梶原) (2・24)

○イタリアと丹波の架け橋に 十一月から二年間留学 春日町出身のオペラ歌手 足立さつきさん (2・28)

○この冬最後に「大雪」あわてるドライバー 大喜びの子供たち (2・28)

○福祉サービスの偏見やめて 寝たきりをなくそう 在宅福祉を考える集い

○市島町梶原のイチヨウ 名木指定の価値あり 若返りへ治療始まる (3・7)

○市島町梶原区「鴨神社の歴史」を発行
故由良慶介さんの遺稿の氏神の由来を冊
子に (3・10)

○山南町歴史資料館特別展 十五日から
「山南三山展」小野道風の寺号額も (3・10)

○篠山ABCマラソン 早春の丹波路を
一万一千人ひた走る (3・14)

○樹木に愛情を！山野樹医を講師に名木
蘇生について研修(市島町) (3・14)

○山南町和田で初の岩尾城まつりにぎわ
う 城跡で宝さがしなど 児童は元気に
太鼓出演 (3・21)

○氷上郡ロードレース大会 寒風を切っ
て力走 中学生から一般四百十三人 (3・24)

○ゴミ減量作戦を促進 資源ゴミ回収に
山南町が奨励金 (4・7)

○五百人が花見気分タップリ！ 山南町
の川代サクラ祭り (4・11)

○資源ゴミ回収しよう 柏原町も報奨金
制度 (4・11)

○高齢化率グンとアップ 丹波は五町で
二十％台 西紀町は二十二・五％に (4・11)

○古舞台で桜花の宴 春を彩る篠山春日
能 (4・11)

○市島三ツ塚マラソン大会に千四百人が
参加申込 (4・21)

○丹波生活科学センターの相談概要
リサイクルの相談急増 悪質な特殊販売
の事例も (4・28)

○敷物、袋物など二百点 柏原のもめん
グループが藍染・古布創作展を開催
(青垣町民センターで) (4・28)

○柏原町の西楽寺で「別時念仏」 信者
や僧侶ら六十人参加 四日間ひたすら念
仏 (5・9)

○柏原駅改築工事始まる 大阪国際花と
緑博の「山の駅舎」を移す (5・9)

○丹波弁を現地調査 動植物から言い回
しまで 甲南大学の学生達が研究成果を
まとめる (5・9)

○親王塚(氷上町指定の文化財)が大ピ
ンチ 氷上町北野の土地所有者が別荘建
築 文化財保護にブレイキ (5・12)

○「玄」に向かつて'91(其の三) 常岡幹
彦さん(柏原町出身)が個展「丹波の秋」
など二十三点 (5・12)

○西紀町西谷の西紀ニュータウン宅地造
成の工事中に遺構を発見 鎌倉時代の集
落跡か 町教委が近く発掘調査へ (5・16)

○現状届け提出を親王塚土地所有者に通
告 文化財愛護教育推進も(氷上町教委) (5・16)

○山南町谷川の高座神社の拝殿改築 百
年ぶり本殿の全容見せる 江戸期の県指
定文化財 (5・19)

○無残な姿の親王塚 工事中止へ仮処分
の申請 氷上町教委が地裁柏原支部へ
裁判所の判断注目 (5・23)

○柏陵同窓会が定期総会 百周年に「同
窓会館」今年度中に結論出す (5・26)

○アウト！ダイヤルQ2 地方全体での
規制も 青少年に悪影響与えると問題視

(NTT)

(6・2)

○「親王塚(氷上町北町)」問題で柏原地裁が仮処分認める 建物、建築など現状変更禁止 (6・6)

○青垣町沢野のボラ山で町内最古の古墳発掘、竪穴式の石室など確認 五世紀前半と推定 (6・6)

○親王塚掘削で結論 外観変わり価値低い「町指定解除やむなし」(氷上町文化財審議委) (6・13)

○篠山町鷲尾で地元の英雄後世に「鷲尾三郎」の供養塔再建 一の谷の戦へ源義経を道案内 (6・13)

○雲仙被災者へ義援金 中兵庫信金の役員のカンパで (6・16)

○篠山城跡の天守台の石垣修復へ 文化庁技官が調査 (6・20)

○螺鈿の技法を究めたい 伊丹市の小島雄四郎さんが「漆器製作に好環境」と山南町谷川に工房作る (6・20)

○十三塚(山南町金屋)の正体に新説 祈禱十三壇法の遺跡か 足利尊氏と関係

郷土史家細見末雄さんが発表 (6・23)

○福知山線の電車が大型車に衝突 負傷者三百十人に (6・27)

○団体旅行は電車で JR福知山線多紀郡利用促進協は助成金を八百円(一人あたり)に増額 (6・30)

○氷上町成松で白いオタマジャクシ! 保育園児が見つける 珍しいと飼育 (7・4)

○市島町与戸にログハウス村を建設 別荘地で人気集める (7・7)

○レベルアップが目立つ青垣二〇〇一年日本画展 (7・14)

○ムツレ教室(スウェーデン方式の野外活動)を普及へ 成果あげた鴨庄保育園 (7・14)

○大正十一年政府が全国各地に設置した道路元標を屋外展示 柏原町歴史民俗資料館 (7・18)

○ゆつくり走ろう兵庫の道 レター作戦や冷茶サービス 夏の交通事故防止運動 (7・21)

○地域活性化に観光を 名刹生かし十三仏巡り 荻野恵五郎町議(市島町)が提案 (7・28)

○「子育ては家庭の仕事」なのに「使命忘れた親」との指摘も 研修大会開き役割討議(丹波文化会館) (8・4)

○氷上郡に走る仲間の会 年輪の里走遍会結成 (8・11)

○夏祭りにぎわう! 伝説の愛宕祭り近づく アイデアの「造り物」(氷上町成松)

市島町の盆踊り神池寺で二十六夜祭
花火や盆踊り盛況 ふるさと柏原祭り
二十二連一千百人が輪に 黒井ふるさと祭り

盛大に縁日大会 四季の森(丹南町)の夏祭り (8・18)

○古里でリサイタル! イタリアへの旅立ち前にオペラの足立さつきさん
○最高です! 夏まつり
「デカンショ祭り」 人出は十二万人
大花火大会に人の波 青垣町佐治川祭り

○郷土史家の細見さんは丹波の歴史を表に 八年前から制作着手 ライフワークに意欲 (8・22)

○夏休みの宿題にどうぞ 水上町の「ときめ樹」親子らに好評の木工クラフト教室 (8・25)

○量販店も環境運動 消費者団体と連絡組織 牛乳パック回収など (8・29)

○緑を守る心を育てよう 青垣町の小学五、六年生が「緑の少年団」を結成 (8・29)

○山南町の親子ふれあい教室 五十人が風車、竹トンボ、水鉄砲など竹細工を楽しむ (9・1)

○民間レベルで交流会 エドモンスズ大学日本校(神戸市)の学生らを迎え八朔祭りやナシ狩りも(春日経営研究会) (9・5)

○不明だった書を発見 柏原小唄二番の歌詞 作詞者野口雨情の直筆(柏原町の霞月楼) (9・8)

○地域に開かれた施設に 青垣町の「も

くせい」特養ホームオープン(9・2)

○春日町下三井庄で平安前期の荘園跡から埋蔵調査で発掘へ 町内初、庄塙遺跡と命名 (9・19)

○碧梧桐(新傾向俳句の提唱者)の書見つかる 丹波に比較的長逗留? 柏原町の旅館霞月楼で (9・19)

○久し振りSL走る! 福知山線「ウッドアイ号」試運転 (9・19)

○柏原病院の外來患者が年々増加 一日あたり昨年度は五四六人 (10・3)

○篠山全国車いすマラソン 一二五人が丹波路を疾走 (10・3)

○篠山城跡北掘に白鳥二羽がお目見え 二世誕生に期待 (10・6)

○「日本の藩窯磁器」展 篠山歴史美術館開館十周年を記念して (10・6)

○黒井城保存検討へ 学者や文化庁関係者加え保存委員会が初会合 (10・10)

○近衛家と春日の関連 春日で特別展オープン (10・17)

○水上郡町村会誌編さんに着手 資料散

逸せぬ内にとまず明治時代からの年表を作る (10・20)

○五台山登山に六百人! 市島、水上両町初の「合同まつり」 (10・24)

○秋晴れの兵庫青垣もみじの里健康マラソン 二二五六人が力走 バザーやマツタケ弁当に人気 (10・24)

○柏原の彫刻家磯尾隆司さん 日展に七回目の入選 自然への畏敬を表現 (10・31)

○青垣町の東芦田で中世の集落跡を発見 歴史の空白解明資料に 荘園葦田荘の中心地 (11・3)

○ソ連ハバロフスク地方から友好代表団が来丹し子供娯楽園(丹波年輪の里)を視察 (11・3)

○おごそかに開扉法要 山門大改修など祝う 水上町常葉の高山寺 (11・7)

○今年度のともしびの賞の二団体 稲塚風流神踊り(春日町稲塚)と人形狂言保存会(丹南町池尻神社) (11・10)

○あす狩猟解禁 丹波地区のハンターは

減る

(11・14)

○篠山ABCマラソンの申し込み四日間
で定員超える 一万二千人で締め切り

(11・14)

○「ぼたん鍋」本番へ 篠山の精肉専門
店へ全国から注文殺倒

(11・17)

○ボランティア劇団「ほほえみ」が旗上
げ 独居老人に初舞台披露(柏原町)

(11・21)

○山南町岩屋の石がん寺もみじ祭り 戦
国絵巻の武士行列 かごかきレースも加
えて

(11・21)

○悠々自適でよいのか 社会参加積極的
に(篠山町老人会)

(12・1)

○「還暦」に再会旅行! 鴨小卒業生四十
一年ぶりに伊勢参拜

(12・1)

○「虚仮(こけ)」の庭ができる「自己を
省りみる場」に青垣町山垣の報恩寺境内

(12・5)

○日展に二十四回目の入選 柏原町出身
の中尾画伯(京都市在住)

(12・8)

○明治建築研究会が兵舎跡(七十連隊)

など残してと篠山町長らに要望

(12・19)

○駅社員の配置存続をJR福知山支社へ
要望(春日町)

(12・22)

○柏原Uターンバンクの丹波地方の各戸
に申込書配り強力に呼びかけ(12・22)

○Xマス会にぎやかに 保母さんら演技
(春日町の保育所連盟)

(12・26)

○山南町井原の稲荷神社 一通の古文書
の発見を機に村ぐるみで「復工」へ

(12・29)

会員のみなさまへ

☆「山ざる」誌は、同じふるさとを持つ

者の、あたたかい心のふれあいを求めま

す。老いも若きも、男女を問わずに、気

がねのない、親しい交りを広げたいので

す。お互いの生活や仕事や趣味を通して、

来し方を語り、行く末に何か心の支えに

なるような「ときめき」を、分かちあい

たいのです。

☆母なるふるさとを、たたなわるあの山
川を、ときには思い出して、今日に生き
ることの幸せを見つめたいものです。

☆「山ざる」誌は、郷里に関係ある寄稿
を歓迎、毎年一回発行して、この名簿に

記載された全員及び郷里の学校・役所等に
無料で贈っています。中部以北や海外等

に在住する水上郡出身者・関係者で登録
もれの方や住所等の変更がありましたら、

ぜひ事務局までお知らせください。

☆関東水上郷友会および「山ざる」誌は
すべてボランティアによって運営されて

います。通信費や本誌制作実費等の資金
も、会員篤志家のご寄付や協賛広告料、

年会費等によってまかなわれています。

☆年会費は一〇〇〇円と規定されていま

すが強制的なものではなく、これも郷友

のご理解とご芳志に期待するものです。
隔年掲載の会員名簿に領収年を記録、ご
報告します。お手数ですが、どうか応分
のご支援をお願い致します。(編集部)

会 計 報 告 書

平成3年11月2日
(平成2年10月1日～平成3年9月30日)
関東水上郷友会
会計理事・足立和巳

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
繰 越 金	771,082	出 版 費	1,076,890
年 会 費 収 入	343,000	通 信・印刷 費	225,795
総 会 費 収 入	490,000	総 会 費	425,864
役 員 会 費 収 入	114,000	長 寿 祝 費	38,151
編 集 会 費 収 入	0	会 議 費	221,427
寄 付 金	257,000	慶 弔 費	0
広 告 料 収 入	754,000	支 払 手 数 料	13,516
受 取 利 息	13,805	消 耗 品 費 他	67,500
雑 収 入	3,000	繰 越 金	676,744
合 計	2,745,887	合 計	2,745,887

監査の結果上記の通り相違ありません。平成3年10月25日 藤田正雄 荻野武

財団法人 東洋療法研修試験財団 理事

社団法人 日本鍼灸師会 名誉会長

鍼 専 門

杏 林 堂

院 長 小 川 晴 通

新宿杏林堂

〒163東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル5F

電話 03-3348-0721 FAX 03-3348-0722

猿友会



井田悦子

大石佐代子

小田明子

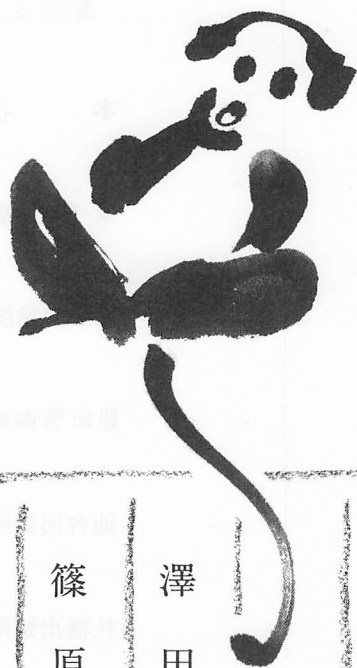
可部美智子

岸本昌子

喜田綾子

小糸イキ

笹倉郁子



澤田みさを

篠原よね子

千葉淳子

長尾貴美代

安原三智子

大和季代子

渡邊貴美子

建築材料販売工事

建設大臣許可 第 1834 号

中央建材工業株式会社

専務取締役
東京支店長

荻 野 武

(市島町出身)

本 社 名古屋市千種区高見 1-6-1
電話 052 (761) 6181 (代表)

東京支店 東京都中央区銀座 7-14-3
電話 03 (3543) 8106 (代表)

大阪営業所 大阪市西区江戸堀 1-8-15
電話 06 (443) 6665

豊田営業所 愛知県西加茂郡三好町大字三始西田 3-4
電話 05613 (4) 3121

仙台出張所 仙台市青葉区高松 2-11-15
電話 022 (273) 5724

札幌出張所 札幌市中央区南一条西 7-12
電話 011 (271) 3961

新潟出張所 新潟市米山 5-1-25
電話 0252 (45) 1705

松本出張所 松本市野溝木工 1-6-58
電話 0263 (25) 0351

広島出張所 広島市西区中広町 1-4-16
電話 082 (291) 3780

能力とは知識を
行動に置き換えること

《ヒューマンアドバンス コンサルタント》

人生を楽しむために

人材育成研究所

三井海上火災保険株式会社	講	師
安田火災海上保険株式会社	講	師
全国自動車保険整備工場協会	講	師
日動火災海上保険株式会社	講	師
学校法人 ホンダ学園	非常勤講師	
労働基準管理協会 会員	労務管理士	

所 長 坂 上 五 朗

(氷上町下新庄出身)

〒349-01 埼玉県蓮田市西新宿 2 丁目32番21

TEL & FAX 0 4 8 - 7 6 9 - 6 8 8 5

日 刊 自 動 車 新 聞

坂上五朗氏を講師に

AIR 経営セミナーを開催



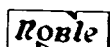
（静岡）AIR静岡支部は「丁度経営と経営者」と題する経営研究所の坂上五朗氏を講師に「これからの経営者」をテーマに、11月24日、11月25日の2日間、経営セミナーを開催した。



心に刻まれる感動の一瞬。

スポーツにはドラマがある。

あらゆるスポーツウェアのご相談は当社へ



ノブリスター株式会社

取締役会長 吉 住 重 造 (春日町中山出身)

〒101 東京都千代田区東神田2-4-7 電話(03)3866-9121(代)

消費税・法人税・所得税・相続税・贈与税

の相談・代理申告

船越税理士事務所

税 理 士 船 越 祥 郎

(春日町多田出身)

〒196 東京都昭島市郷地町 2-17-9 電話(0425)44-5997

株式会社 三葉水道

代表取締役 橋爪 忠

(氷上町黒田出身)

〒276 千葉県八千代市八千代台西 7-5-29

電話 0474-84-7121番 FAX 0474-82-9626番

門と塀と庭 ブロック 門扉 車庫
プレハブ サンプルーム ベランダ 温室

株式会社 大_{ダイ}樹_キ

代表取締役 岡吉 明

(柏原町出身)

〒351 和光市南1-11-40 電話 (0484) 63-4420 (代表)

大菱印刷有限公司

田 中 寛 (山南町出身)

〒110 東京都台東区台東1-27-5 大塚ビル

☎03-3833-1595

同郷の著者による珠玉のエッセイ集

様々な出会い

上山 顕著／四六判 352頁／定価2000円

[大船調映画]の盛衰を描くドキュメント

撮影所のある街 大船物語

升本喜年著／四六判 242頁／定価1500円

株式会社 **ホンゴ出版**

代表取締役 池田 忍

東京都中央区明石町 2-16-501

〒104 ☎03(3248)6625

郵便振替 東京 3-144071

丹波茶・宇治茶の御進物 御贈答に 明日香園の健康銘茶を!

《明日香園のオリジナルブランド》 ウーロン茶の缶ドリンクが
ただいま大好評です。各種御注文は本社工場にて直接承ります

創業明治四年 **伝 統 銘 茶**

株式会社 **明日香園**

代表取締役社長 池畑豪士郎

本社：東京都千代田区九段北 2-3-2 電話 (03) 3265-2579

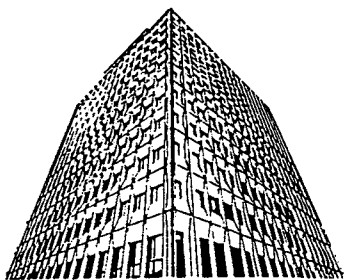
本社工場（御注文承り先）兵庫県氷上郡柏原町南多田3146

電話 (0795) 72-3588 **フリーダイヤル0120-163588**

直販店：西武百貨店池袋本店B1 電話3981-0111(内線)5076

たび だち
二人のハッピーな出発に…

- 神式・仏式・教会式・人前式の挙式スタイルからお選びください。
- 料理(和・洋・中)は、4,000円から10,000円までございます。



兵庫県民会館 総合結婚式場

〒650 神戸市中央区下山手通4丁目16番3号

電話(078)321-2131(代) FAX(078)321-2139

社会福祉法人
調布市社会福祉協議会

理事 木村 つた 江

東京都調布市東つつじヶ丘 2-39-5
電話 (03) 3300-6895

株式会社 近藤写真製版所

取締役社長 近藤 勇 夫 (国領出身)

東京都新宿区下宮比町 2 番17号 電話 03-3260-6281(代表)
FAX 03-3260-6527

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます

電気主任技術者第一種免状 第2-319号
技術士(電気部門)登録証 第15810号
エネルギー管理士(電気)免状 第2857号
エネルギー管理士(熱)免状 第5191号

若森技術士事務所

所 長 若 森 敏 郎

〒302 茨城県取手市白山5-4-13
TEL 0297(72)0907

同好会：日本のおどり 端唄と三味線

土曜日 午後1時～5時
老若男女 初心者 歓迎

日 舞 指 導 西 崎 祥 (柏原町出身)
端 唄 指 導 根 岸 妙

〒141 東京都品川区西五反田8-10-14-201 電話(03)3491-8962

足立和巳

自宅
府中市栄町一―一五―二七
電話(〇四二三)六四―七三二七

足立勲平

〒251
藤沢市鵜沼 藤ヶ谷一―七―四
電話〇四六六(二七)二六四六
(二二)六四六一

(株)ミワシステムズコンサルティング
代表取締役
足立謙悟

〒220
横浜市西区岡野一―十三―十三
TEL(〇四五)三―二―五四一八
FAX(〇四五)三―二―三八〇一

交通毎日新聞編集局

次長
足立静雄

東京交通毎日新聞社
東京都港区赤坂二ノ四ノ一(白亜ビル)
電話六四二―三四一四番 下107

株式会社ニユー東京フーズ

社長
足立卓巳

〒284
千葉県四街道市美しが丘二丁目一九―一
電話(〇四三四)三―一―四八七七番

日本損害保険協会
特級(一般)資格 第特一三五八六号
飯田保険事務所

飯田光雄

自宅
四街道市旭ヶ丘三―九―二
〒284 電話〇四三四(三三)二―二八〇

生 田 清 弘

〒157 東京都世田谷区成城一―七―七
電話(〇三)三四一五―一八九三

上 田 脩

〒112 東京都文京区小石川五―一七―六

上 山 顯

〒106 東京都港区元麻布二ノ一一ノ三六ノ五〇三

日製産業株式会社

相談役 大 木 正 徳

〒105 東京都港区西新橋一丁目四ノ一四
電話(〇三)三五〇四―七一―一番

大 野 善 三

自宅 〒228 相模原市相模台七―二五―八
(〇四二七―四六―八七七九〇)

小 田 富 士 夫

木呂子恵美子

社団法人日本産業用ロボット工業会

事務局長

小森康宏

〒157 東京都世田谷区北烏山三一三―一四―五一〇

坂上勝朗

静岡大学教授

坂本重雄

自宅 〒422 静岡市小鹿三丁目四―五
公務員住宅八―二六
電話 ○五四二(八二) 八〇五八番

佐々木盛雄

〒161 東京都新宿区中井二―十一―十八

笹倉強

〒352 新座市栄四ノ五ノ二五
電話 ○四八四―七七―五六四〇

須原清

〒164 東京都中野区南台五の三〇の六
電話 (〇三)三三八一一六二番

高見産婦人科

医学博士 高見嘉都司

東京都板橋区熊野町四〇番地
電話 (三九五六)〇六〇〇番

正呂地群治

〒105 東京都港区芝大門二一六一十二
(正呂地ビル)
電話 (〇三)三四三一一一六五三

田中篤郎

勢川武彦

〒164 東京都中野区東中野二ノ一七ノ二〇
電話 (〇三)三三六一一八六七六番

谷垣正雄

東京都杉並区高井戸西一―二四―一七
電話 (三三三二)一〇七六番

畑 義 則

宗教法人

青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑

管理 (都営八王子霊園となり)
(新規墓地分譲案内中)

住職 堀 井 隆 川

〒193 東京都八王子市元八王子町三一三九七
電話 (〇四二六) 六三一八 四〇三

瑞豊産業株式会社

代表取締役
社長

水 船 隆 昌

〒102 東京都千代田区六番町六
勝永六番町ビル3F
電話 (〇三三三二二) 七三五

国際行政書士協会会員
東京都行政書士会会員

行政書士 宮 野 近

〒192 八王子市打越町一二二一三一三
TEL 〇四二六(三五) 四三八五

ウエディングドレス専門創作卸
(株) シヤルム商会

常務取締役 村 上 昇
東京店店長

東京店 〒104 東京都中野区弥生三ノ五ノ三
電話 (〇三) 三三七四一〇二一五(代)
本社 〒604 京都市中京区問之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話 (〇七五) 二二二一〇二一五(代)

村 上 久 夫

〒168 東京都杉並区高井戸東三一四一十二
電話 (〇三) 三三三三一七 一三四番

医学博士 常岡昭

眼科・常岡医院

〒154 東京都世田谷区桜新町一―一九―一四
渡部ハイツ二階
TEL(03)三四二八―八八七七

常岡幹彦

鶴田宏

田英夫

東京都千代田区永田町二―一―一
参議院議員会館24号室
電話(三五八一)三一―一 内線五二二九

波多洋三

〒112 文京区春日二―一七―二
電話(〇三)三八一―二八六〇番

集	編
後	記

☆ねがわくは 花の下にて
春死なん そのきさらぎの
もち月の頃 (西行)

山ざる誌の編集の追い込み

が、いつも桜の季節だった。仕事が終わって、さて「花見て一杯」といこか、となる。そんな酒席で、編集主幹の足立源治さんが、よくこの一句を、やや感傷的な眼ざしで口ずさまれたものだった。その足立さんが三月二十九日、久我山病院で亡くなった。その数日前、長女の佐紀子さんが「おじいちゃん、桜が咲いたよ、ホラ、窓から見えるでしょ！」と耳もとで告げていた。かすかにうなずかれたかに思えた。その後もう意識はなかった。山ざる21号と22号の編集後記は、足立さんの好きな桜ではじまっている。「……まるで散り急いでいるようだ、いつの間にかさつさと散ってしまった……」と。それはご自身のことではなかったのか。☆源治さんはお酒を好まれた。お酒というより酒の席がことのほか好きだった。

四年前に肝臓の手術を受けられてから、ドクターストップがかかったはずだが、ドクターブレーキだといい、「こんなもんどこがうまいのや」とお茶めな目つきで練習にはげんでおられたようだった。盃を手によれば、もう何の遠慮もなかった。天衣無縫、だれでも千年の知己。純粋な丹波弁がナマリゆたかにほとばしる。みなついづられて丹波弁にもどる。☆源治さんは丹波をこよなく愛した。やさしさとガンコさとねばり強さをその性に兼ねそなえた「生粋の丹波っ子」だった。「わしが死んだら丹波の草むらに埋めてくれい」といい、すでに墓地在実家に予約してあったという。「虎は死して皮残すちゆうこと知ってるか、あんな何残す、ゼニか、しょもない……」源治さんの高笑いがまだ耳に残る。そんな丹波人の心意気を残して源治さんは逝った。

☆

除した原稿もありましたが、悪しからずお許し願います。来年の24号にも、我と思わん方はぜひご寄稿ください。編集部では新人の登場をとくに期待しています。千数百人の郷友が熱い期待で読んでくれます。うれしいことではありませんか。☆ほんなら来年まで、お達者でなあれ、秋の懇親会にもご一統はん、たんと出とくんはなれよ。(玄)

山ざる 第23号

平成四年五月三十日発行

委員 足立静雄 池田忍 木呂子恵美子
足立和巳 大野善三 小田富士夫
坂上勝朗 田中篤郎 常岡幹彦
編集 鶴田ゆき子 宮野近 渡邊隆男

発行者 関東水上郷友会会長・村上末吉
〒102 東京都千代田区神田小川町1ノ11
DMSビル内・関東水上郷友会・事務局
☎〇三(三三九三)〇七〇七
振替・東京一―二二二一三〇
製作 株式会社二玄社

くろぎ多彩 いま1枚のカードから...



プロスキーヤー/三浦雄一郎

お問い合わせ・資料請求は

エスカイクラブ本部事務局/〒530 大阪市北区芝田2-1-18西阪急ビル10F TEL06・372・8571

フリーダイヤル 0120・10355

エスカイクラブ東京事務局/〒104 東京都中央区銀座7-2-22同和ビル9F TEL03-3574-7340



28年の歴史と80,000名のエグゼクティブ達。

1枚のカードで全国196店をご利用いただける。

比類なきスケールの会員性クラブとして、

おらかなクラブライフをおとどけています。



●当クラブでは、品位と風格を守るため、敢てご入会資格を30歳以上の
 自営または管理監督職以上の方とさせていただきます。

嗚呼青春讃歌。

ロマンあふるる恋歌、胸躍る軍歌、情感こもる唱歌、
 ヒット歌謡まで、魂を揺さぶり、心の琴線に触れる数々の
 歌・唄・詩……。専属のコーラスガールと
 一緒に心ゆくまでお楽しみください。



すずきのビル店 札幌市中央区南四条西3-3 すずきのビル6F 011-512-5191
 銀座店 東京都中央区銀座6-5-16 銀座みゆき館4F 03-3573-5885
 名古屋店 名古屋市中区錦3-19-6 ワンダフルプラザビル4F 052-951-5122
 北新地店 大阪市北区曽根崎新地1-2-28 古沢ビル4F 06-344-6316



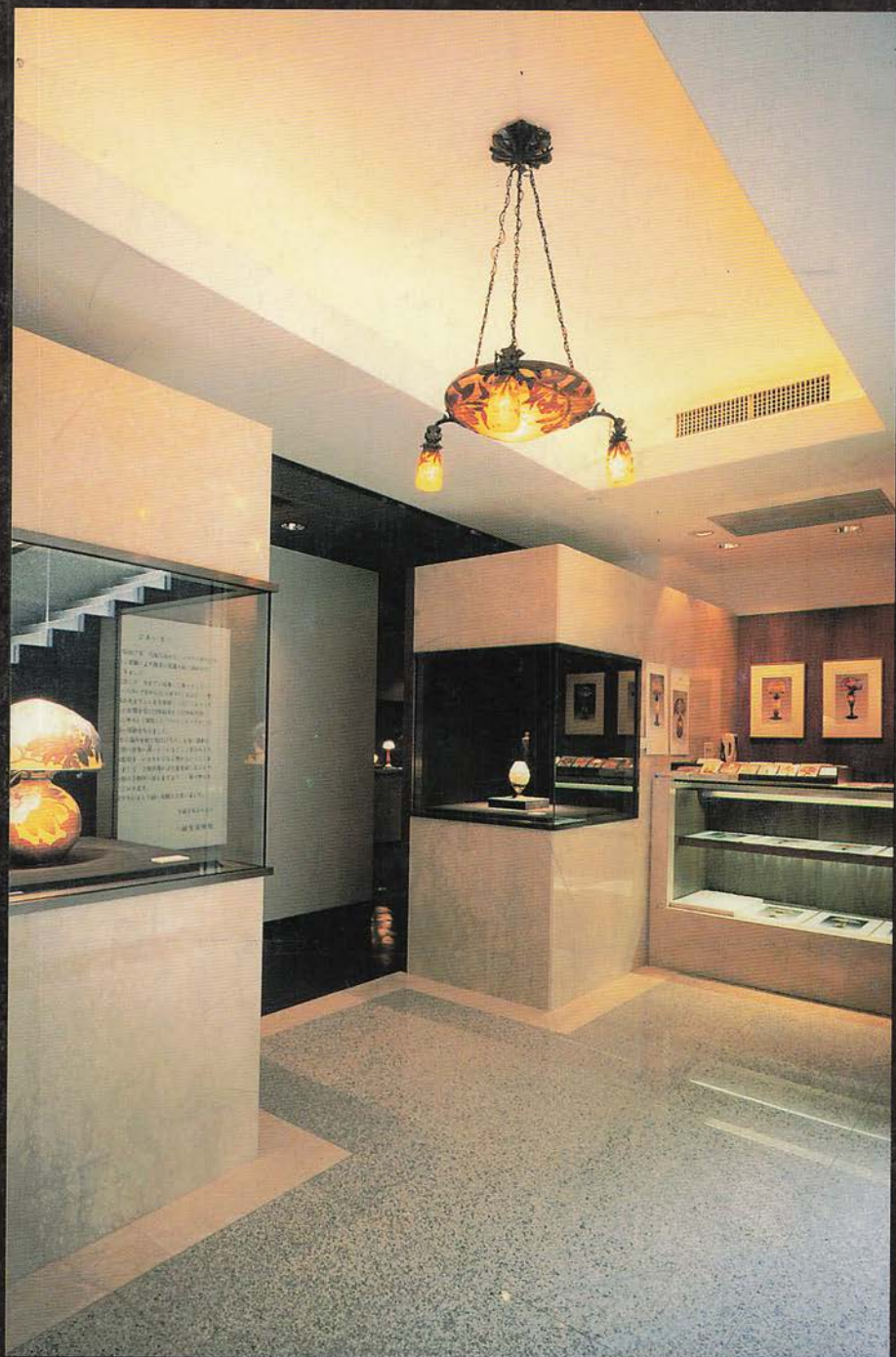
浮世を彩る舞い扇。

旬の味を盛りこんだ日本料理の数々、宴をいろる美酒。
 そして、舞妓・芸妓の艶舞のおもてなし。
 都心の夜を華麗に演出するお座敷情緒——。
 心ゆくまで演舞を楽しめるクラブです。



銀座店 東京都中央区銀座7-7-6 アスタープラザ4F 03-3574-7745
 北新地店 大阪市北区曽根崎新地1-8-10 V・OビルB1 06-344-2913
 南店 大阪市中央区東心斎橋1-6-5 南・VOビル2F 06-253-0581





設計・施工 桂建築計画工房